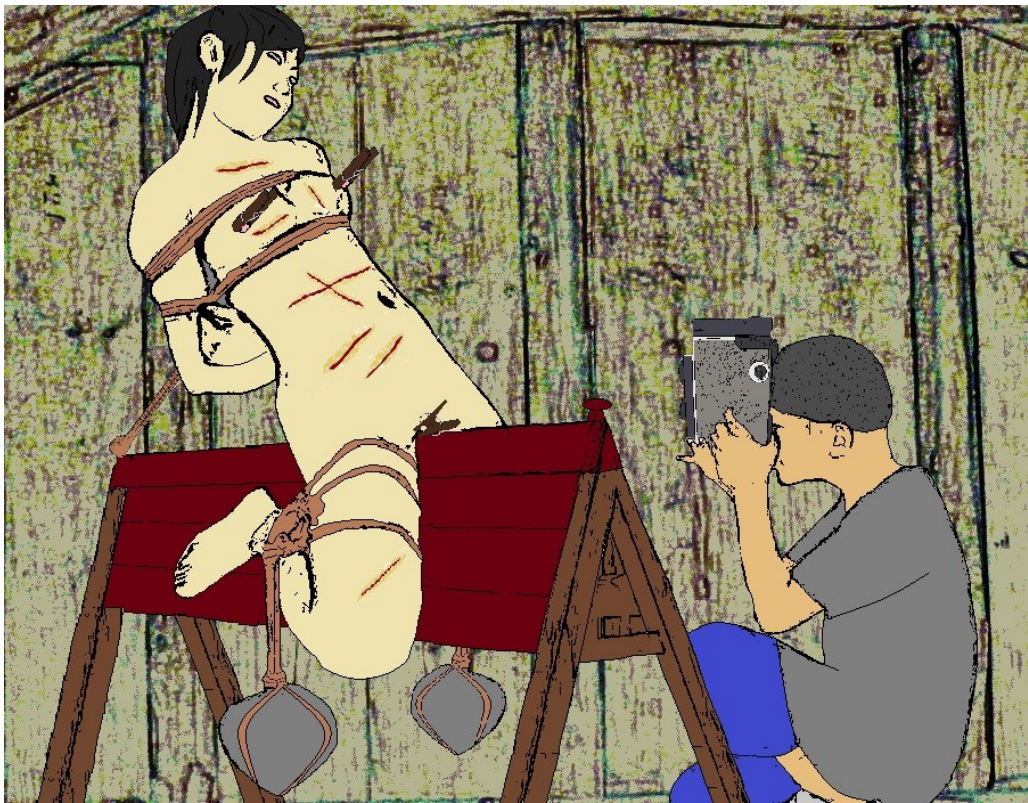


# 大正弄瞞

義理の伯父と継母と異母兄に  
淫虐三穴調教される箱入り娘



## 目次

一	折檻宣告	3
二	下女奉公	4
三	拷問屋敷	8
四	閨房修行	14
五	幼虐教師	20
六	女虐学校	25
七	処女接待	28
八	屋外露出	4
九	花電車芸	
十	電車通電	
十一	温泉旅行	
十二	寒中修験	
十三	刺青美惨	
十四	淫獄無限	
	後書き	
	章単位で「しおり」を設定しています。	
	閲覧の際にご利用ください。	

## 一…折檻宣告

伸びきって海に落ちたテープの端を右手に握りしめたまま立花佐江は、ゆっくりと動きだした汽船の一等船客甲板に立つ父に向かって左手を振り続けていた。

「お父様あ！ 御無事で帰っていらしてねえ！」

ひととき強い風がテープを吹き飛ばし、佐江の長い一本三つ編み髪をそよがせた。

貿易商の父は、五年前にも海外へみずから買付におもむいたことがある。そのときは本邦よりよほど文明の進んだ欧州だったし、不在も四か月だけだった。けれど今度は、文明未開で疫病が猖獗をきわめる阿弗利加へ象牙の買付に行くのだった。これが今生の別れになるのではないかという不吉な予感が、ふつと脳裡をかすめる。

まさか——とは、思う。それよりも。父の

帰国は、商いが順調に進んでも一年後。一年ものあいだ、赤の他人に囲まれて暮らしているのだらうか。継母とその兄とにはさまれて手を振り続ける●五歳の乙女は、不安に胸をふさがれていた。

実母がスペイン風邪で急死したのが一年半前。その半年後には、母よりも四つ若いユキが後妻として乗り込んできた。佐江より年上の利行は、父の隠し子だった。つまりユキは、今の佐江と同じかもっと若い頃から父に囲われていたことになる。

とんだふしだら女だと、佐江の軽蔑はそちらへ向かう。実母の花江が相手でも父を取り合うほどだった佐江は、父が若い娘を妾にしたとか、喪の明けないうちから妾を本妻になおしたというふうには考えないのだった。

家にいるのがユキと利行だけなら、まだしも。おとなの男が家にいないと物騒だとユキが父を口説いて、ユキの実兄である本郷長三郎を引き入れてしまった。ユキには高飛車に

出て頭を押さえつけている佐江でも、成人男性に対してはそうもいかない。それをいえば、腹違いの兄である利行も気味が悪い。風呂にはいつていると、なにかと口実を設けては脱衣所まで来て、佐江の裸を覗く気配が再三あった。

「名残は惜しいが、もう姿も見えなくなつた」  
帰ろうと本郷にうながされて、佐江は振り返り振り返り岸壁からはなれた。父の会社からまわされた自動車に、佐江はユキと本郷の二人にはさまれる形で乗つた。助手席には利行。助手席には一行のうちの目下の男性が座るものだし、ユキと本郷に比べれば佐江は若輩だから、この形になる。まったく礼儀になつた席順なのだけど、これからの一年が暗示されているようで、佐江はますます胸ふさがれる思いになるのだつた。

帰宅するなり、不安は現実のものとなつた。それも、佐江が予想もしていなかつた悪夢の

形で。

床の間を背に本郷とユキ母子が並んだ前に、佐江は正座させられた。女中の正子と千津も呼ばれて、佐江の後ろにひかえる。

「おまえは母親であるユキをないがしろにし、兄も軽蔑しているな」

いきなりの『おまえ』呼ばわりに、佐江は面食らった。

「義兄さんも心を痛めていたぞ。自分は娘に甘いから、君の手で厳しく躾けてくれと頼まれた」

佐江は心の中で溜め息をついた。ユキとはろくに口もきかない娘の態度に父が頭を悩ましていたことくらい、聡明な佐江は気づいている。けれど、母より先に父の子を宿し、母の喪が明けないうちから本妻になおった、この妾に好感情を持てるはずがない。

(形勢逆転したのね)

父は佐江の側にいてくれたから、二対一だった。その父がいなくなり、ユキの兄が加わ

った。一対二。仕方がない。これから一年間、せいぜい猫をかぶつていよう。

内心でそんなことを考えていた佐江は、本郷の言葉を聞き逃した。いや、正確には。あまりに突拍子もない言葉だったので、意味を理解できなかったのだ。

「聞こえなかったのか。そこに立って裸になれ」

「なんで、そんな真似をしなければいけないのです!？」

縁戚の伯父は気が狂ったのだろうか。

「おまえの身体は、まだおとなになりきっていない」

佐江の甲高い声に、重々しく作った言葉がかぶさる。

「どこまで折檻しても大丈夫か、見極めておかねばならない」

驚愕を通りこして、佐江はぼかんとしていた。

「立てよ、佐江」

いつもは佐江の顔色をうかがっておどおどしていた利行が、立ち上がって佐江の二の腕をつかんだ。ずるずると引き立てられる佐江。本郷も立ち上がった。

「自分で脱げないのなら、脱がしてやるぞ」  
本郷の手が鶯色のスーツをつかんだ。ブチブチと無雑作にボタンを引き千切って、胸元をはだける。スーツの下にはシユミーズしか着けていない。

「いやあつ……やめてください」  
我に還って、佐江が悲鳴を上げた。肌着をかばってうずくまる。

「本郷様……！」  
「なにも、そんな乱暴な……」

腰を浮かした二人の女中に、本郷が顔を向けた。

「おまえたちにも言っておく。これからは佐江にも家事をさせるから、女手は余る。俺の方針に不満のある者は、辞めさせるからな」  
二人の女中は顔を見合わせ、口を閉じて座



りなおした。世界恐慌のあおりを受けて不景気のどん底にある世相。給金半額でも、新しい口は見つからないだろう。

佐江本人以外には反対する者がいなくなつたのを見定めて、本郷は軽くうなずいた。うずくまっている佐江の両脇に手を入れて引きずり上げ、そのまま羽交い絞めにする。

「いやあ！ やめて！ 乱暴しないで！」  
身を振りほどこうともがく佐江の前にユキが立ちはだかった。

「ギャアギャアうるさい。おとなしくしな」  
右手を振り上げで、容赦のない力で佐江の頬を張った。

バシン！  
左手で反対側の頬にもビンタを見舞う。

バシン！  
女学校で、一年間一度もビンタを張られたことのない生徒は珍しい。けれど、これほど痛烈なビンタを張られた生徒は絶対にいない。そうでなくてもふつくらとした肉感的な頬が、

ただの一発ずつでお多福のように腫れあがった。両頬の痛みに、佐江は抵抗する気力を失ってしまった。

「このお嬢様は、ひとりでお洋服の着替えもできないようだから、トシちゃんが脱がしてあげな」

●六の息子に向かって『トシちゃん』はな  
いだろう。いつもならば必ず文句を言う利行だったが、今は目をぎらつかせて母親の言葉に従った。

「いや、やめて……」

弱々しい抗議の声を無視してスカートに手をかけると、ホックをはずすのもどかしく引きずりおろす。

「いや、いや……下着は赦して」

バシン！

頬が音高く鳴って、佐江は言葉を封じられる。

利行は息を荒げながらシュミーズの胸元を両手でつかんで、一気に引き千切った。

「ひいつ……」

ビイッ……佐江の押し殺した悲鳴と木綿布の破れる音とが重なった。

「あ、ああ……」

ビンタを恐れて声を出せない佐江は、ただガクガクと震えている。その足元に利行がしやがみ込んだ。伯父を真似て角刈りにした頭が、佐江の腰の前で止まった。

「あ……いや……」

焦らして女に恐怖と屈辱を与える手管など持ち合わせていない少年の両手が、かすかに震えながらズロースを引き下ろした。

「へええ、可愛い顔して、こっちは髭もじゃかい」

三十女のユキにとっては、言葉で年下の同性を辱めるくらい朝飯前だった。

「腋も毛深いぜ」

本郷が追い打ちをかける。

「縄がよく食い込みそうな二の腕をしてやがるし、ぼっちゃりした尻は思う存分ぶちのめ

せそうだ」

本郷の言葉に佐江は震えあがった。しかし佐江に与えられる屈辱は、こんな言葉くらいではすまなかった。不意にユキが、佐江の双つの乳房をつかんだ。

「ひ……痛い！」

付根に指先を食い込まされて、どうしても悲鳴が漏れてしまう。

「ふうん。お乳のほうは、まだまだねえ」

ユキは瘦身のくせに胸と腰が張っている。時代が進めばグラマーと形容される体形だが、今はまだ江戸時代からの審美眼が残っていて、『鳩胸出っ尻』などと酷評されることもあるのだが。その胸に惹かれて言い寄る男が数多いのも事実だった。容貌でも教養でも行儀でも佐江に負けているユキは、まだ成熟しきっていない上半球がえぐれ気味の乳房を嘲りながら、ぐりぐりと左右に捻った。

「なあに。縄でくびり出して鞭でなめしてやれば、倍には腫れあがるさ」

ひっと息を吞む佐江。子供を縛って叩くというのは、程度にもよるが折檻として珍しいことではない。しかし乳房を鞭打つとなると、これはもう折檻の域を超えて拷問というべきだった。

(これは…：わたしへの仕返しなんだ)

でもわたしは…：ユキさんに手を上げたりはしていないのに。

そんなことを考えていられたのは数秒だけだった。

「それじゃ、どれくらい耐えられるか実地に試してみるか」

佐江を畳に突き飛ばしておいて、本郷がズボンに手をつっこんだ。ずるずると長い布を引き出す。

「…：？」

佐江はわけのわからないまま、怯えた眼差しで本郷のすることを見守っていた。本郷は六尺禪の真ん中、股間を包んでいたあたりを折り返して輪を作り、両端を交互に何度もく

ぐらせた。その大きな結び玉が、佐江の口元に突きつけられた。

異臭にむせて、佐江は顔をそむけた。顎をつかまれて、正面を向かされた。

「あまり騒がれると近所迷惑だからな。これを啜えている」

男の股間を包んでいた布を口に詰められようとしている。悟って、佐江は固く口を閉ざした。

「トシちゃん、立たせてやりな」

息子に命じておいて、ユキが本郷の隣にならないだ。引きずり立たされた佐江の腹に、いきなり拳骨を叩きこんだ。

「うええ……」

腹を抱えてうずくまろうとする佐江の半開きの口に、六尺禪の結び玉が押しこまれた。

「あ、ぶうううう……」

吐き出そうとしたが、強い力で喉の奥まで詰められた。結び玉から伸びた布で頬をくびられた。顎の痛みも窒息しそうな喉の圧迫も、

二の次だった。アンモニアの異臭が鼻の奥まで突き抜けて、佐江は吐き気に襲われた。

「うええ……」

苦い液が喉の奥からせり上がってくるが、結び玉の詰め物に押し返されて、また飲み込むしかなかった。

「本郷様……なさりようがむごすぎます」

見かねて、女中の千津が言葉をはさんだが、「文句があるなら、これ限りの暇をくれるぞ」

千津は泣きそうな顔で立ち上がって座敷から出て行こうとしたが、それも許されなかった。

「家事手伝いでは、こいつはお前たちの後輩になる。先輩が後輩を躱ける参考に、最後まで見学していけ」

女中にまで虐待の片棒を担がせようという意図はわかって、拒めば路頭に迷う。通い女中の千津は、給金で一家を支えている。まして住み込みの正子には、帰る家もない。

「さて、本格的に躱けてやるか」

女中に背を向けて、本郷が座布団の下から縄束を取り出した。うづくまつている佐江の腕をつかんで背後にねじ上げて、手首をきつく縛った。

「んんん……」

手首が痛むことよりも——両手がまったく動かせないというのは、不思議な感覚だった。これでもう、なにをされても抵抗できない。恐怖がつのると同時に、諦めの感情が芽生えた。

手首が肩甲骨のあたりまで吊り上げられ、縄尻が胸に回される。きゆううつと乳房の上を絞られると、腰のあたりに激しい脱力感が生じた。生殺与奪の権を握られたという実感。ますます諦めがつのってくる。

「へええ」

ユキが今度は本気で嘆声を発した。

「兄ちゃんが女を縛るのを見たのは十六年ぶりだけど、ずいぶんと上達したねえ」

ユキは意味ありげな目で佐江の裸身を眺め



ている。

「あれで懲りてな。捕縄術に入門して、今じや免許皆伝よ」

本郷は二本目の縄を二つ折りにして、佐江の下乳を絞った。

「んーん、んん……」

ただ苦しいだけではないと、はっきりわかる呻きが、佐江の鼻から漏れた。

「なんだ、こいつ？ 縛られて、最初からよがつてやがる」

佐江は弱々しく首を横に振った。『よがる』という言葉の意味はわからなかったが、卑猥なことを言われたらしいとは察せられた。

「どれどれ……」

本郷の手が佐江の太腿を割り開こうとした。あわてて太腿に力をいれたが、無駄だった。本郷は太腿を割ることなく、その付根に指を差し込んで女陰の奥まで穿った。

「んぐうっ！」

羞恥と狼狽、そして軽い痛み。痛みは一瞬

で終わった。

本郷は引き抜いた指を光にかざしていた。

「やっぱり、濡らしてやがる。血は争えないぜ」

言葉の後半は意味不明だが。さっきの脱力感で小水を漏らしたのだろうか、ますます激しく佐江は狼狽した。

「それなら、ちっと念入りに縄化粧をしてやるか」

本郷は下乳を絞った縄尻を腋にとおして、上下の縄を引き絞った。さらに三本目の縄を首に巻いて、Y字形に垂らすと二つの乳房の間で上下の縄がくっつくほど厳しく絞った。

「んんん、んん……」

上下左右から圧迫されていびつに突き出される乳房。腰の脱力感に加えて、胸が切ないような息苦しさ。それが被虐の陶醉だと知るには、佐江は無知で幼かった。

「いつまでも甘やかしてはおけないな。さっさと立て」

言われたとおりにしないとひどい目にあわされる。それは、もう十分に身に沁みているつもりだった。でも、立てなかった。腰にも膝にも力はいらない。

「手間を掛けさせるんじゃない」

手首と首縄を両手でつかんで、本郷が佐江を立たせた。

操り人形のように立たされた佐江が、はつと顔を上げた。

「むぶうーっ……んーっ！」

猿轡のあいだから抗議の呻きを押し出しながら、佐江は激しくかぶりを振って身をよじった。利行が写真機を構えていたのだ。

「こら。モデルがそっぽを向いちやあ撮影できない。正面を向け」

どんなひどい目にあわされようと、この命令には従えなかった。裸にされて縛られて、恥ずかしいところを隠すこともできずに立たされて。自分が嫌っている相手に罵られて、女中にまで見られて。それでもまだ正気でない

られるのは、身内での出来事だからだ。写真に撮られて、万一にでもそれが人目に触れたら、生きてはいられない。

しかし、『ひどい目』というのは、佐江の想像の埒外にもたくさんあるのだった。

「まったく羨け甲斐のある娘だな」

本郷がポケットから洗濯バサミのような物を取り出した。女のたしなみを磨く女学校でも、理科の実験くらいはする。だから佐江にはそれが―――嘴の部分にギザギザのついたワニグチクリップだということはわかった。わからないのは、本郷の意図だった。

本郷は甥に命じて、佐江を再び羽交い絞めにさせた。自分は正面から近づいて、くびられて突き出た佐江の乳房を左手で掬い取って。さり気ない仕種で、右の乳首にワニグチクリップを噛ませた。

ビクンツと佐江の身体が跳ねた。乳首を噛み千切られたような激痛。ちよつとでも身体を動かすと、乳首にさらなる激痛が走る。じ

つとしていても、ますます深く乳首に食い込んでくるような激痛。

「ぐぶうーっ！ むぐぐ！」

全身を硬直させたまま、佐江の鼻孔から苦悶の悲鳴が迸った。

本郷は薄嗤いを浮かべて、左の乳房を掬い取った。

「ぎひいいいっ!!」

乳首の痛みも忘れて、佐江は必死にかぶりを振った。

「ん？ 言う事を聞く気になったか？」

たずねながら、本郷はゆっくりとワニグチクリップを乳首に近づけていく。

佐江はあわてて、こくこくと何度もうなずいた。

「いい子だ。最初から素直にしていれば、痛い思いをしなくてよかったのにな」

言いながら、左の乳首にもワニグチクリップを噛ませた。

「……………!!」

息を詰まらせて、佐江の身体が痙攣した。

「撮影が終わったら、はずしてあげよう。いい子だから、しばらく我慢なさい」

我慢できる痛みではない。けれど両手の自由を奪われていては、自分では取れない。唯々諾々と本郷の命令に従うしかなかった。

羽交い絞めから解放されて。佐江は自分の意志と気力で立っていなければなかった。

「はい、こつちを向いて」

利行に声をかけられて、仕方なく写真機に顔と身体を向けた。

カシャツとシャッターの落ちる音。

「割れ目が見えるように、もつと脚を開けよ」  
フィルムを巻き上げながら、破廉恥な命令を投げつける腹違いの兄。

乳首の激痛と限界を超えた屈辱で顔を涙で濡らしながら、おそるおそる佐江は脚を開く。

「ほら、写真機をちゃんと見て」

顔をうつむけて、畳に寝そべった利行を覗き込む佐江。シャッターの音が足元から響い

た。

そうして。後ろからも横からも撮影されて。ようやくワニグチクリップが佐江の身体からはなれた。痛みは、すぐには消えない。むしろ。遮られていた血流が戻って、心臓の鼓動に合わせてズキズキと痛んだ。

「では、ぼつぼつ本物の折檻を味わわせてやろう」

これだけ苛めれば気が済んだろうと思つていた佐江は、本郷の言葉に驚愕した。では、これほどの虐めも折檻ではないというつもりなのだろうか。

佐江は座敷から引き出された。廊下を奥へ歩いて、裏口で行き止まる。その裏口をユキが開けはなつた。

「ほら、歩け」

ぴしゃんと尻を叩かれたが、佐江は動けなかった。

（まさか、裸のまま外へ連れ出すつもりじゃないですよね？）

哀れみを乞うように本郷を振り返ったが、ワニグチクリップを乳首に近づけられると、足を動かすしかなかった。

裏庭は裏庭同士で隣家と向き合っている。昔は土塀で区切られていたのだが、明治中頃の大地震で崩れて、生垣に変えられたそうだ。その生垣のこちら側と向こう側とは干された洗濯物があるばかりで、昼前の時刻には人影もない。しかし、誰かが出てこないとも限らない。佐江は本郷に命じられて、土蔵へ向かって小走りに急いだ。その中で折檻されるとわかっていても、自分から飛び込んで行くしかなかった。

土蔵の中は、ほとんど空っぽだった。明治維新で没落した曾祖父が、先祖伝来の家宝も武器も売り払っていた。広い屋敷の中だけで夏物も冬物も同時に収納できるし、捨てるに捨てられないガラクタの類いは、屋敷内の空き部屋に押し込んであった。まるで無用だった土蔵に、今になって使い道ができたのだっ



た。

佐江にとっては不幸なことだが、土蔵ほど折檻に適した建物はない。分厚い壁が悲鳴を遮るし、犠牲者を吊るす十分な高さで鞭を存分に振るえる広さがある。その中に連れ込まれて、佐江は生きた心地もなかった。

嗜虐癖の強い本郷は、幼いながらも肉感的な獲物を前に、すでにズボンの前をはちきれんばかりに膨らませている。この一年間、佐江に疎んじられてきたユキは、復讐のとき来たれりと、憎悪よりは嘲笑の目を義理の娘に向けている。女体への好奇心は旺盛なくせに機会に恵まれにくい年頃の利行は、目玉が飛び出さんばかりにひとつ年下の少女の裸身を凝視している。そして、見学を命じられた二人の女中は——千津は、年齢が佐江に近いせいもあってか、哀れみと同情をたたえた瞳をけっして佐江に向けようとしない。佐江の父である雇い主の立花長利にさえも詳しくは明かしていないが、嫁ぎ先で醜聞を起こして離

縁され、実家からも勘当された二十六歳の正子は、好奇心を丸出しにして見物していた。

土蔵の壁の高い位置に明り取りの小さな格子窓がある。利行が梯子を立て掛けてのぼり、頑丈な木格子から縄を垂らした。小さな踏み台が縄の下に置かれて、そこに佐江が立たされた。窓から垂れている縄が腋の下に通されて嚴重に縛られた。

踏み台を足元からはずされると、佐江は壁に向かって後ろ向きで吊られる形になった。足の裏は床に着いているのだが、膝が震えて立ってられない。

「今日のところは、こいつで勘弁してやる」  
六本に束ねた縄が、佐江の頬をびたびたと叩いた。これで反省しないようなら、竹刀とか革ベルトのように、もっと痛い道具を使うぞと脅される。

「後ろを向いて、いい子にしているんだぞ」  
尻を撫でられても、恐怖で全身を小刻みに震わせている佐江は、ちよつと身をよじった

だけで、されるままになっていた。

本郷は佐江からはなれて、ふたりの女中を呼びつけた。

「おまえたち、これを持っていろ」

佐江の斜め左右に立たせて、電気スタンドを持たせる。薄暗い土蔵がぱあっと明るくなり、血の気が引いた佐江の裸身を浮かび上がらせた。利行が斜め後ろで写真機を構えた。

「ぶばあっ……!!」

佐江は叫んだが、猿轡に阻まれて言葉にならない。

悲鳴を無視して、本郷が佐江のまうしろに立った。

ぶん……バシヤッ!

縄束が空気を切り裂いて、佐江の尻に叩きつけられる。

「ぶばっ……」

お仕置きとして平手でお尻を叩かれるのは別次元の苦痛だった。熱いような痛いような、名状しがたい苦痛だった。叩かれたあと

から痛みがじいんと尻全体に広がっていく。

ぶうん……バシャツ！

「ぐぶう……」

二発目は、悲鳴ではなく呻き声だった。大声で泣き叫ぶのはみつともない——日頃の躰が佐江の反応を抑制していた。

さらに四発が続けざまに打ち込まれた。佐江は禪の結び玉を噛み締めて、痛みを耐えた。汚いなどと考えていられなかった。この惨めな姿を写真に撮られているのだから、シャッターの音を聞き分ける余裕などない。

「ぎびいっ！」

脇腹を打たれて、佐江は身をよじった。縄が揺れて、グキツと肩が鳴った。尻を叩かれるより、はるかに鋭い苦痛だった。

ヒュン……パシッ！

反対の脇腹にも縄が叩き込まれた。

「ぶぶう……」

再び肩にも痛みが走って、佐江は膝を踏ん張った。肩を吊られていては、脱臼するかも

しれない。

両の脇腹に二発ずつのあとは、背中を斜めに打たれた。尻に比べて打撃は軽いのだが、肉が薄いぶん痛みが骨に沁みた。

最後に強く尻を三回叩いてから、本郷はさらに残酷な命令を与えた。

「こつちを向け。乳を大きくしてやる」

縄でくびり出して鞭でなめす。本郷が座敷でうそぶいた言葉を思い出して、佐江は気が遠くなりそうだった。

壁に向かったまま身を固くしている佐江の鼻先を、ワニグチクリップが軽くこすった。

「さつきは乳首だけで勘弁してやったが、今度はひとつ増やすぞ」

どこかわかるかと訊かれて、佐江は首を横に振った。ほんとうにわからなかったのだ。

「やれやれ。世間知らずのお嬢様は扱いにくくて困ったものだ」

背後から抱きすくめられて、佐江の身体がビクツと跳ねた。相手を振りほどこうとはし

ない。これまでの仕打ちで、逆らえばいっそ虐められると理解していた。

本郷の右手が、つうつと腰を撫でて、さらに内側へ滑りこんできた。

「むびい……」

ぴくんと腰を震わせて、佐江の身体から力が抜けた。股間の一点から痺れるような甘い感覚が湧いて、腰全体に突き抜けていったのだ。

「乳首より、ずっと感じるだろうか？」

その甘い感覚の源が、つるんと剥かれる感触。

「ぐぎいいいっ！」

今度は鋭い痛みがそこに走った。

「ちよつと抓っただけで、こうだ。さっきのクリップで挟んでやろうか」

金属の冷たい感触をその一点に感じて、佐江は本郷の腕の中で、あわてて向きを変えた。ワイシャツの襟が目にはいりそうになって、上体を反らせた。

「ふん。すこしは聞き分けがよくなったな」  
本郷は半身になって、縄でくびり出された  
乳房を右手でぎゅむぎゅむと揉んだ。ユキの  
拷問のような揉みかたに比べれば、乱暴な愛  
撫といったところだが、佐江にとっては陵辱  
に変わらない。

本郷が二歩ばかり後ろに下がって、縄束を  
水平にかまえた。

佐江は大きく目を見開いて、その縄束の先  
端を凝視している。打たれる瞬間を知りたく  
はなかったが、いきなり打たれるのもっと  
厭だった。

(……………!!)

本郷の背後で写真機を構えている利行の姿  
が目映った。

「びびや、びやぶ、びやべべ……!!」

佐江が必死に言葉を押し出そうとしている  
のは、本郷にもわかっただろう。しかし彼は  
薄嗤いを浮かべただけだった。焦らすように  
ゆっくりと腕を後ろへ引いていき、不意に前

へ振った。

ビュン……パッシイン！

ぶるるんと双つの乳房が爆ぜた。

「きひいっ……！！」

口を封じられていてさえも、鋭い悲鳴が猿轡の隙間から漏れた。写真機のことなんか、頭から消し飛んだ。

パッシイン！

逆手に振るわれた縄束が、反対側から乳房を薙いだ。

「ひぎいっ……むううう……」

予期していなかった衝撃に、佐江はいつその悲鳴をあげた。

「さて。江戸の昔からお仕置きは百叩きと決まっているから……端数はおまけしてやって、残りは八十発か。」

縄束をしごいて、本郷がにやりと嗤う。

(……殺される！)

本郷の言葉を真に受けて、佐江は絶望で目の前が暗くなった。



「しかし、これは試しだったな。ガキの身体に百発はきついかな？」

乳房を掬い上げて、肌に刻まれた赤い線状を指でなぞる本郷。

「……………」

痛みよりは、肌に触られるおぞまじさが背筋を駆け登る。それを押し隠して、佐江は本郷の言葉を待った。

「わりと素直になってきたことだし。あと一発だけで勘弁してやってもいいが……」

ほっとした思いで、詰めていた息を鼻からこぼす佐江。

「どれだけ言付けを守れるか、試してやろう」  
本郷は縄束を床に置いて、佐江の後頭部に手をまわした。頬をくびっていた禪をゆるめて、結び玉を口から引き出してやる。

「言付けをきちんと守れたら、一発だけおしまいだ。言付けにそむいたら、決まりどおりに八十発だ。わかったかな？」

「はい……わかりました」

いきなりの寛大さを疑わないでもなかったが、いずれにしろ佐江に許されている返事はひとつしかなかった。からからに乾いた喉から声を押し出した。

「よし。言付けは二つきりだ。まず脚を開け」  
びくっと、佐江は目の前の男を見上げた。  
が、強く睨み返されてうなだれる。

性的な知識をほとんど持たず、まして折檻だの拷問だのは講談文庫で読んだことすらもない少女でも、命令に隠された意味は理解できた。

「あ、ああ……」

唇をわななかせながら、体重を縄にあずけながら踵を浮かして両脚を開いていった。ふたりの女中が持つ照明で両脚の付け根がくつきりと浮かび上がっているだろうけれど、羞恥を感じるより先に、佐江は恐怖に打ちのめされている。

股間を縄束で叩かれたら、乳房よりも痛いだろう。けれど、どれだけ痛いかまでは想像

もつかない。もし事前に知っていたら、佐江は股間以外への八十発を懇望していたかもしれない。

「二つ目の言付けも、ごく簡単なことだ。俺がいいというまで声を出すな。言葉も悲鳴も鼻声も、だぞ」

返事をして言付けにそむいたなどと難癖をつけられるのを恐れて、佐江は黙ってうなずいた。

「なるほど。女学校で首席を争うほど賢かったんだな」

本郷が縄束を拾って後ろへ下がった。右手を後ろへぐいと引いて。

「そら、いくぞ……」

と、声をかけて。本郷はためらうそぶりを見せた。目の前の少女をさすがに哀れんだのか、それとも間合いをはずして不意打ちを狙ったのか。どちらにしても、それは束の間のたゆたいだった。

ブン……バッシン！

股間と右の太腿に激しい衝撃が走った。身体を真つ二つにされるような衝撃だった。反射的に腰が後ろへ逃げる。と同時に膝が碎けて、腋の下を吊った縄に引き戻された。

「……………!!」

顔をしかめ歯を食い縛って、佐江は衝撃が薄れるのを待った。

「おっと、狙いが逸れた。やり直した」

ひっと喉の奥に息を吸い込んで、佐江は顔を上げた。本郷と目が合うと、必死でかぶりを振った。

「つぎは割れ目の芯に命中させてやる。しっかりと立って脚を開いている」

わざとすこしだけははずしたのだろうと佐江は疑ったが、反論はできない。一端が狙った箇所当たっていただけとも言返せない。佐江は恨めしげに本郷を見つめてから、がっくりうなだれて、閉じていた脚を開いていった。

「そうそう。素直が一番」

言葉が終わると同時に縄束を振るった。

ブン……バツシイン!

今度は左の鼠蹊部が打ち据えられた。縄束の何本かは股間をえぐっている。

一発目に倍する衝撃だった。痛いという感覚を凌駕している。佐江は腿をきつくよじり合わせてしゃがみ込もうとしたが、吊られているので足が宙に浮いた。

「おっと、今度は行き過ぎた。やり直しだ」

佐江は涙をこぼす余裕すらない。つぎもはずされたら、もうどうなってもかまわない。文句を言おう。思い詰めて、と同時に自分を言いくるめる。足を床に下ろして立ち、再び脚を開いた。

「おまえが逃げ腰だから、うまく当たらんのだ。もっと大きく開け」

言われるままに、三尺ちかくも両脚を広げた。縄に吊られた身体は爪先立ちになった。

「逃げ腰になるな。うんと腰を突き出せ」

それがどんなに破廉恥な格好か、今の佐江には思い及ばない。縄の痛みを肩に感じなが

ら上体を反らして腰を突き出した。

利行が近寄ってきて写真機を構えたが、抗議する気力は失せていた。

「よーし、いい子だぞっ」

それを掛け声に、これまで以上の鋭さで本郷が縄束を振るった。

ビュン……バツシュウン!!

開脚して自然と広げられた大淫唇の中心に、六本の縄が叩きつけられた。

佐江の眼前で火花が爆ぜた。突き出していた腰が、真上に跳ね上がった。宙に浮いた佐江の身体がブランコのように揺れて、電灯に作られたふたつの長い影が佐江を追った。どうんと大きな音がして、佐江の裸身とふたつの影は土蔵の壁でひとつになった。

はあはあはあと荒い息を吐きながら、佐江は本郷を見上げる。

「約束の一発は終わりだ。口を利いてもいいぞ」

ほっとすると膝も腰も砕けて、肩の縄に体

重がかかった。その軽い痛みは、ものの数ではなかった。

「こら。おまえの教育のために、心を鬼にして折檻をしてやったのだ。きちんと礼を言わんか」

佐江は憎悪の炎を目に浮かべて本郷を睨んだが、炎はすぐに消えた。

「……ありがとうございます」

佐江は本郷に向かって首を直角に垂れた。

縄をほどかれて、佐江は床にへたり込んだ。縄束で打たれた乳房がずきずき疼き、それ以上股間は、今も火で焼かれているように熱く痛かった。

それまでは反対側の壁際から見物していたユキと利行が、本郷と一緒にあって佐江を取り囲んだ。忠実に電気スタンドをかかげていた二人の女中も呼び寄せられる。

「最初に言ったとおりに、これからは家事をきちんと仕込んでやるぞ。花嫁修業といったところだな」

チャラチャラした着物では動きづらいでしょうと言つて、ユキが単衣を佐江の前へ放つた。電気スタンドが消されて薄暗くなつた土蔵の中でも、佐江は着物の柄を見分けた。子供の時分に着ていた浴衣だつた。

「これ、もう丈が足りません」

不服を言わずに着てごらんと、ユキが叱りつける。

百聞は一見に如かずと、佐江はあちこちが悲鳴をあげている身体を立たせた。長襦袢はなかつたので、黙つて浴衣を素肌に着た。

(え……?)

丈は思つていたよりもずっと短く、膝から上が六寸ほども裾から出ていた。のも道理。裾がほつれている。わざと切り詰められていた。胴回りは細工するまでもなく、まったく足りなくて、無理に前を合わせても胸元がはだけて乳房が半分ほども見えてしまう。

「ちゃんと着れたじゃないの」

一瞬、佐江は耳を疑つた。が、すぐにユキ



の意図を察した。わざと恥ずかしい格好をさせて鬨ろうという魂胆なのだ。佐江はできるだけきつく付紐を結んで胸元を引き締め、女児用の短い兵児帯を締めた。

それでも、ちよつと動いただけで褌が割れて太腿が付根まであらわになった。前屈みになれば尻が見えてしまうのではないだろうか。「あの……せめて、腰巻くらいは着けさせてください」

「なに馬鹿なことを言ってるの」

古来、浴衣は入浴のときに素肌を隠すものだった。下着はいつさい着けない。文明開化から半世紀を経ても、そういつた着こなしをする婦人はすくなくない。

「でも、これでは……」

「股倉まで見えてしまおうと言いたいのだらう？」

本郷が佐江の抗議に先回りした。

「乳や太腿まではだけるのは我慢するが、割れ目くらいは隠したい。そうだな？」

誰もそんなことは言っていない。胸も腿も、絶対に晒したくない。けれど、佐江を虐め抜くのが目的なのだから……否定すれば、それこそ恥ずかしい所も丸出しで我慢しろと言われかねない。

「それなら、妙案があるぞ」

返事に窮している佐江を置き去りにして、本郷が勝手に話を進める。これはもう、最初から台本が作ってあったのだとしか考えられない。

果たして。本郷は佐江の猿轡に使っていた六尺禪を拾いあげた。唾液を吸って固くなった結び玉をほどいて、同じ箇所には鶏卵くらいの結び玉を作りなおした。

「禪を締めていけば、どんなに裾が乱れても割れ目が見えることはない。どうだ、妙案だろう」

「あら、それは傑作ね。今日から佐江の下着は禪にしましょう」

「厭です！」

たまりかねて、佐江が強い口調で抗議した。  
「女の身で禪なんて、馬鹿にしないでください」

「おいおい。それは海女さんや女力士に失礼な言い草だぞ。禪一本で仕事をする女は、いくらでもいるぞ」

おまえには着物まで着せてやるのだから感謝しなさいと、ユキも口車に乗る。

「それとも、あらためて百叩きで躄けてほしいのか？」

脅されて、佐江は振るえあがった。

「……禪で我慢します」

「我慢とは、どういう言い草だ」

ドスの利いた声に、佐江はビクツと肩を震わせた。

「ごめんなさい。禪を着けさせてください。それから、着物まで着せていただいて、ありがとうございます」

言いなおして、ユキにも頭を下げた。

ふんと鼻であしらってから、また裸になれ

と本郷が命じた。

「まず禪を締めて、それから着物が順序だ」

佐江がつんつるてんの浴衣を脱ぐと、待つてましたとばかりに、利行が禪を手にして背後に立った。本郷に指示されたわけではない。台本で割り振られていた役割なのだろう。

「締め方を教えてやるよ。もつと脚を開け」  
肩に禪の端が掛けられた。

「できるだけ割れ目を広げて、そこに結び玉を埋め込むんだ」

結び玉が金玉の代わりだと、本郷がからかう。

佐江の大淫唇に利行の左手が這い、指をV字形に開いて押し広げる。そこへ鶏卵大の結び瘤が埋め込まれた。

「あ……」

生まれて初めて、性器に異物を圧迫されて。

鳥肌が立つようなおぞましさの奥に、腰が砕けそうになる妖しい感覚がひそんでいた。

結び玉から先が細くよじられて尻の谷間に

通された。

「ここで力いっぱい引き上げるんだ。ユルフンは恥だぞ」

肛門から尾底骨まで圧迫されても、それほど不快感はなかった。けれど、同時に股間の結び玉がさらに食い込んできて淫毛が引っ張られるチリチリする軽い痛みが厭だった。

利行は尾底骨の上で禪を押さえて、残りを腰に巻いた。一周させて、押さえていた縦ミツに通して、さらに引き絞ってから、端をよじりながらに腰の横ミツへ巻きつけていった。佐江の肩に掛けていたほうの端を垂らして、幅を広げたままで股間を包み、尻の谷間を上へ引き絞る。縦ミツと横ミツの重なったところへ通して、最初とは反対方向へグイと引いた。

「あ……ん」

最後のひと絞りで結び玉に強く股間を刺激されて、狼狽の声が佐江の鼻に抜けた。

残りの布も横ミツに絡めつけられて、女禪

のできあがり。しかし、すぐには浴衣を着せてもらえなかった。

さんざん待たされたんだから、僕にもすこし愉しませてよ——と、口に出したわけではないが。利行が身体を密着させてきて、双つの乳房をこねまわし始めた。佐江には区別のつかない事柄だが、利行の玩弄は愛撫でも責めでもなかった。欲しくてたまらなかった玩具を与えられて有頂天になった子供が、玩具の隅々まで弄ぶのと同じことだった。玩具が壊れるかもしれないなんて、考えてもいない。(叩かれるのに比べたら、これくらい平気だわ)

そう思わなければ耐えられないほど、利行の行為は乱暴だった。

利行は身体を密着させて、股間を佐江の尻の谷間に押しつけてくる。

(利行さんも……?)

ぐりぐりと尻を刺激されて、佐江は訝しんだ。本郷さんといい、利行さんといい、何を

ズボンの中に入れていゝるんだらう。佐江は、勃起という現象を知らなかつた。

「ひゃん……！」

乳首を抓られて、佐江は驚愕と苦痛の悲鳴をあげた。

びくつと利行が手をはなしたが、恐怖にすくんでいる佐江はわずかに身をよじつただけだったので、安心して、また指で乳首をつまむ。今度はすこし慎重に。どこで覚えたのか、指の腹で転がしたりもしてみる。

「ん、くう……！」

苦痛の呻きが鼻に抜けたのを、ユキは聞き逃さなかつた。

「おやまあ。この子、乳首をとんがらせてるじゃないか。気持ちいいのかい？ とんだ淫乱娘だね」

乳首が固くしこつたのを、佐江は自覚している。苦痛とは違ふ奇妙な感覚が生じたことも気づいている。けつして快感ではないと思うのだが……性的刺激で受ける快感というの

がどんなものか知らない佐江は、経験豊富な三十女の言葉を真に受けてしまった。羞恥で顔が赤くなつた。

「利行、それくらいにしとけ。淫乱かどうかは、これからおいおい見定めていくとしよう」

佐江は利行の腕からすり抜けて浴衣を拾つた。できるだけ締め付けて着付けたが、やはり太腿と乳房の内側の露出してしまふ。けれど、たしかに。いちばん恥ずかしい部分は嚴重に隠されているという安心感があつた。

利行がまた写真機を向けてくると、佐江は自分からすすんで正面を向いた。恥ずかしい姿を何枚も撮影されている。丈の合わない浴衣姿くらい、なんでもない。



## 二…下女奉公

土蔵から解放されたときには、陽が中天を過ぎていた。本郷はふたりの女中とひとりの下女に、ありあわせの菜で昼食をしつらえるよう命じた。家事全般に長けた正子と千津が女中なら、その見習の佐江は下女だというのが、本郷の理屈だった。

居間の食卓には、ユキ親子と本郷の三人分だけ。佐江は女中と一緒に女中部屋での食事を命じられた。

「これまでのお嬢様気分は捨てることだね」  
ご飯だけは白米だが、おかずは薄い沢庵と朝の残りの味噌汁。天と地が引っくり返るような体験をさせられた直後の佐江は、胸ふさがれて食事に箸をつけないでいた。

「あたいだって、お暇を出されちゃ困るからね。旦那様の方針に従って、あんたを厳しく教育するよ」

「正子さん。なにも今、そんなことを言わないでも」

「何事も最初が肝心さ。きつちり言つとかなくちや」

敵は三人から四人に増えたのだと、佐江は理解した。千津は敵にまわらないかもしれないが、正子にさえ頭が上がらないのだから、頼りにはできない。

「わかりました。どうかよろしくご指導のほどをお願いします」

佐江は畳に両手をついて、ふたりに頭を下げた。

「ところで、佐江ちゃん。さつきからちつとも食べていないじゃないか。食欲がないのかい？」

「え、ええ……」

あんな目にあわされた直後に、食欲のあるはずがない。

「そうかい」

もつたないから、あたしが食べてあげる

よと、正子が佐江の膳を自分の前に引き寄せた。

食事が終わるとすぐに、佐江は風呂の準備を命じられた。浴室には大小の浴槽が置かれている。その大きいほうだと念を押された。

「あの……井戸水ですか？」

「あたりまえじゃないか。水道なんてもっていない」

「わかりました」

佐江は二階へ上がろうとした。

「井戸は、そっちじゃないよ」

「でも、裏庭ですから。着替えてきます」

「その着物で家事をするよう、言っただけですよ」

「こんな姿が人目につけば、わたしだけでなく家の恥です。ユキさんも……」

バシン！

「痛っ……ユキさんだって、継子虐めの悪い噂が立ちます」

「あたしは、おまえの何なんだい？」

「あなたはお父様の後妻でも、わたしにとつ

ては赤の他人です」

本来の負けん気を取り戻して、佐江は言い返した。

「そうかい。裸で縛られて叩かれるのが、そんなに好きかい。母親と一緒にだね」

佐江は、あっとなった。そうだった。この人たちに逆らうと、躰とか折檻の名目で、拷問まがいの目にあわされるのだった。しかし、それ以上に気になるのが、正子の最後の言葉だった。

「なんで、お母様がここに出て来るんですか。あなたは、お母様のことをしらないくせに」

母の花江が健在だったあいだ、ユキは一度たりとも本宅に来たことはない。それとも、父が何かを——たとえば、閨の秘密をユキに話したのだろうか。でも、そうすると……父は母を縛ったり叩いたりしたことがあるのだろうか。まさか！ あの優しいお父様が、そんなことをなさるはずがない。千々に乱れる思考は二発目のビンタに遮られた。

「口で言うのは、これが最後だよ。あたしのことは、これから必ず『お母様』と呼びな。『ユキさん』だの『あなた』だのは、即刻百叩きだからね！」

決め付けられて、佐江は唇を噛んだ。けれど、縄束の打擲に逆らう勇氣はない。

「わかりました……おカアさま」

心の中に『母』の文字を描かないようにするのが、精一杯の反抗だった。

「ついでにいとくとくけど。長三郎さんでなく『伯父様』、利行は『お兄様』だからね」

「……はい」

「わかったら、さっさと仕事しな」

佐江はとぼとぼと廊下を渡って、裏口に向かった。見咎められたら、どう言い訳しようか。まさか、ほんとうのことは言えない。お父様にも迷惑をかける。

お父様に心配をかけないように、家事も頑張ることにしたんです。汚れるかもしれないから洋服は着られないし、着物は訪問着ばかり

で。仕方ないから、子供の頃の着物を引っ張り出したんです。

せっかくひねり出した口実だが、裏庭に出ると、それを使う必要はないとわかった。土蔵へ引き立てられたときは周囲を観察するどころではなかったのだが、隣家とのあいだは満艦飾の洗濯物で遮られていた。客用布団の敷布まで動員されて、隣家の様子はさっぱり見えない。つまり、向こうからもこちらが見えない。

安心する以上に、本郷たちの周到な悪意をひしひしと感じた。洗濯物が、自分を閉じ込める檻にさえ見えてきた。

佐江は釣瓶を手繰って桶に水を汲んだ。裏庭を横切って、浴室の裏戸から運び入れる。そこにユキが立っていた。

「なんだい、そのチマチマした運びかたは。それじゃ夜になっちまう。両手があるだろ。

二杯ずつ運びな」

「……はい」

桶ひとつで四貫(十五キログラム)、ふたつだと八貫にもなる。一回や二回ならともかく、何十回も往復すれば、大の男でもへばってしまっただろう。

この二階建ての屋敷は、中興の祖である祖父が地震の後で建てたものだ。当時は住み込みの書生とか遠縁を頼ってきた食い詰め者とかが、ごろごろしていたらしい。だから一階には十以上の部屋がある。大人数に合わせたのか、祖父の趣味なのか。浴室は六畳もあり、浴槽は一間半(二・七メートル)四方。これに水を張るには、井戸まで二百往復もしなければならぬ。ひとりで汲めば、桶を一度に二つずつでも十時間かかる計算だった。

もっとも、いつもこの大浴槽を使っているのではない。父の代で、ごくふつうの大きさの湯舟が追加された。こちらは十五往復で満杯になる。つまり、この水汲みも佐江を虐める口実だった。

桶を持って引き返そうとすると、呼び戻さ

れた。

「その袖が邪魔そうだねえ」

つんつるてんの浴衣は、袖口が肘にちかい。腕を上げ下げするたびにたくれて、うっとうしいのは事実だった。

「仕事をするときは、ちゃんと襷を掛けるもんだよ」

どうせ襷の掛け方も知らないんだろうとユキは勝手に決め付けて、袖から腰紐を取り出すと、佐江の袖をからげた。このほうが動きやすいさと、肩まで袖を捲くりあげた。ますます裸にちかい格好にされて、佐江の羞恥はつのがつた。

しかし、そんなことは言っていられない。計算では十時間もかかる水汲みを四、五時間で終えなければならぬのだ。佐江は空の桶を持って、井戸端へ小走りに急いだ。活動写真のコマ送りのような速さで釣瓶を手繰って水を桶に空けて、もう一度汲み上げる。それを両手に持つと、走ったりはできない。無理



をしても、揺らしてこぼしてしまう。そのぶん、戻りを急いだ。

急ぎょうとして大股に歩くと禪に巻き込まれた淫毛が擦れて。ピリピリ痛んだが、我慢できなくはなかった。三十分もしないうちに息が切れてきたが、ひと休みもできない。一時間もすると、四月中旬の陽気もあいまって、佐江の全身は汗にまみれていた。それを拭う手間も惜しんで、佐江は水桶を運び続ける。

「まったく、もう。使えないお嬢様だね。そんな調子だと明日までかかっちゃう。あたかも手伝ってやるよ」

正子が浴槽を覗き込んで、わざとらしく溜め息をついた。

「ありがとう」

悪態をつかれても、手伝ってくれることには素直にお礼を言った。風呂の支度が間に合わない、それをつぎの虐めの口実にされかねない。

しかし、感謝は早すぎた。正子は桶を別に

ふたつ持つてきて、それに水を汲んだまま井戸端から動かない。浴槽に水を入れて佐江が戻ってくると、空の桶を取り上げて満杯の桶を運ばせる。たしかに水を汲み上げる手間は省けたが、ひっきりなしに往復しなければならぬ。激しい動きで前がはだけでも、立ち止まってなおしている時間が惜しい。どうせ、すぐにはだけのだし。

じきに千津も出てきたが、彼女は風呂焚きを言い付かっていた。膨大な量の水を沸かすのだから、薪では追いつかない。石炭焚きの小さなボイラーが据えられている。ふだんは使わない石炭を物置小屋から運んではくべるのだから、これもかなりの重労働だ。

陽が沈む直前に、地獄の水汲みが終わった。佐江は自分の部屋で休むことを許されたが、つんつるてんの浴衣と禪は着替えるなど言われた。

「最後に風呂の水を落とす仕事が残っているんだからね」

夜遅くなつてから、あの広大な浴槽と浴室を掃除させられるのだと思うと、気が滅入るより先に途方に暮れた。

（そのときは、そのとき。今から悲しんでも始まらない）

二の腕が痺れて肩までも上げられず、掌は真っ赤に腫れて、あちこちに血がにじんでいた。脚は棒のようで、腰も悲鳴をあげている。

とにかく一分でも早く、横になって休みたかった。

（毎日がこの調子だったら……死んでしま  
う）

まさか毎日ではないだろうと、佐江はまだ高を括っていた。自分の身に突然降りかかってきた悲劇を、世間では珍しくない継子虐めの極端な例だと信じている。

今日は父の船出を見送るので女学校を休んだ。明日は半ドンだし、明後日は日曜。あと二日間だけ我慢をすれば、月曜になる。学校に行っているあいだは折檻も家事も免れられ

る。学校の宿題もあるから、虐められるのはせいぜい二、三時間かしら。

縛られたところ、まだ縄の跡が付いている。朝まで残っていたら、また言い訳を考えないといけない。そんなことが毎日続いたら、困るのはユキさんたちだ。いくら躰でも限度がある。学校から注意してくれるだろう。

写真についても、佐江は諦める事にした。あれは——佐江が苦痛に馴れて、百叩きの脅しが通用しなくなったときの用心だろうか。写真を世間にばら撒くと脅すつもりなのだろう。でも、実際にはできるはずがない。世間に出回って、モデルが佐江だと知られば、では誰が撮影したのか、誰が佐江を縛ったのかという話になる。佐江の一生は台無しになるだろうけれど、本郷もユキも利行も無事ではすまない。そこまで、あのひとたちも馬鹿ではないでしょう。

——そうとでも思わなければ、悲観して首を吊りたくなってしまう。

揺り起こされて、佐江は寝ぼけまなこで本郷を見上げた。起き上がろうとすると、ズキンと腰に痛みが走った。だけでなく、身体の内側が痛かった。

(あれ……?)

どうにか寝台に腰掛けて。自分が裸も同然の姿でいることに気づいた。

「きゃあ……!!」

自分の悲鳴で、完全に目が覚めた。父を見送って屋敷に帰ってから、自分に起きた運命の暗転。厳しい折檻と過酷な労働。そして……

「おはようございます、オジサマ」

佐江は、使い慣れない単語をぎくしゃくと口にしたりした。

「寝ぼけているな。まだ夜だ」

「え……?」

疲労のあまり、眠り込んでしまったらしい。「これから風呂にはいる。背中を流してくれ」

「……はい」

休んだせいかな、あちこちの痛みは耐えられないほどではなかった。

脱衣所の手前で立ち止まろうとすると、本郷に中へ押し込まれた。さっさと服を脱ぎにかかると本郷を、佐江は脱衣所の隅で手持ち無沙汰に眺めていた。

「なにをボケッとしてる。早く脱ぎなさい」  
今朝までの佐江だったら、血のつながりもない男にそんなことを言われたら、悲鳴をあげて脱衣所から逃げ出していただろう。しかし。全裸に剥かれて緊縛され、言い付けにそむくとどうなるかを身体に刻み付けられた今は、不安に身をすくめるだけだった。

「背中を流すだけなのに、裸になる必要があるのですか？」

それが精いっぱい反抗だった。

「詳しくいうと、背中だけじゃない。全身を洗ってもらう。濡れた着物だと部屋を汚して皆に迷惑をかけるだろ」

「……はい」

諦めて、佐江は浴衣を脱いだ。両手を横ミツにかけて、よじられた布の端をほどく。初めて禪を着けた佐江でも、三十秒とかからずにはずせた。が、そこで困った顔になった。

「あの……厠へ行つてきます」

結び玉の圧迫と横ミツの締め付けから解放されると、尿意がこみあげてきた。最後に厠へ行ったのは、父を見送りに家を出る前。午後からは激しい労働で汗をかいたから今も喉が渴いているけれど、膀胱は限界にちかかった。

「小便だな？」

「え……？ あ……はい」

佐江は顔を赤く染めて答えた。折檻を免れることしか頭になかった。

「風呂場ですればよからう」

「な……」

佐江は絶句した。そんな恥ずかしいことができるわけがない。

「そうと決まったら、早くはいれ」  
有無を言わず浴室へ連れ込まれた。

本郷はざっと掛け湯をすると、温泉ほども  
広い浴槽に浸かって、もじもじ突っ立って  
いる佐江を見上げた。

「どうした。早く小便をすませろ。それとも、  
立小便するのか？」

「お風呂から出るまで我慢します」

「俺は、風呂場で小便しろと言いつけたのだ  
ぞ。言い付けに背いて百叩きを食らいたいの  
か？ どうせ途中で小便をちびるぞ」

また、全員が呼び集められるのだろう。皆  
に見られながら小水を漏らすくらいなら、本  
郷ひとりに見られるほうがましかもしれない。  
それに風呂場なら、すぐ洗い流せる。佐江は、  
自分で自分を説得してしまった。覚悟を決め  
て、本郷に背を向けてしゃがんだ。

しかし、出そうと思つて出せるものではな  
い。羞恥心が尿道を固く閉じていた。

ザバツと本郷が浴槽から出る音。佐江はし



やがんだまま、身を縮こめる。

「きゃああっ……！」

しゃがんだ姿のまま、佐江は背後から抱き上げられた。本郷の腰に乗せられて、両脚を大きく割り広げられた。

「シー、トトトト」

幼児におしっこをさせるときそのままだった。違うのは——右の太腿は二の腕に抱えて、掌で佐江の下腹部を圧迫している。そして、鋭く屹立した魔羅を股間にすりつけて腰を揺すり始めた。

「厭あ……下ろして。自分でします」

かぶりを振ったが、赦してもらえないとは佐江にもわかってる。

「自分でできないから、手伝ってやってるんじゃないか」

本郷は左の太腿も二の腕に移してさらに大きく開脚させ、両掌で下腹部を揉んだ。

「厭、いやあ……出る、出ちゃう！」

凄まじい尿意に襲われて、それでも出ない。

佐江は泣き声になった。

「手間のかかる子だ」

本郷の右手がつつと下へ動いて、中指が大淫唇を割った。

「いや、いや、いや……いやあああ」

尿道口を刺激されて、ついに堤防が決壊した。

ぷしゃああああ……噴出した尿が本郷の淫茎にぶち当たって、左右に飛び散る。

「ずいぶん溜めていたな。まだ出ているぞ」  
からかわれても、いまさら止められない。

じよろろろろ……佐江は冷えた全身を桜色に染めながら、放尿を続けた。

「もしかすると、禪が栓になっていたかな？」

佐江を床に下ろして、しゃがんだ腰に湯を勢いよくぶちまけた。

「前を向け」

放心して、羞恥のそぶりも見せずに向きを変え佐江。股間にも湯が叩きつけられた。

「ついでだ。先におまえの股倉から洗ってや

ろう」

本郷は腰掛に腰を落として、佐江を手招きした。さっきと同じ姿で上に乗れと言う。

「いいです。不浄なところをオジサマに洗っていただくなんて、申し訳ないです」

空白になっていた頭を絞って辞退を申し出たが、重ねて命じられると、もう逆らえなかった。後ろ向きになって股を開き、顔を両手でおおって伯父の腰に尻を落としていく。無理やりにはなく自分の意思で恥ずかしい行為をするのだ。心臓がバクバクして、息が苦しい。

「どれどれ」

淫毛を掻き分けて、本郷の手が佐江の股間を探る。年齢相応に発達した大淫唇を、指で抑え気味にして両側からめくられた。

「やっぱりだな」

本郷の指が、大淫唇の内側をなぞった。

「ひゃあっ……」

予想外の行為に恥ずかしさにくすぐったさ

がかさなって、佐江は甲高い悲鳴をあげた。

大淫唇とその内側の花卉の付根あたりを引っ掻くように指を動かされて、くすぐったさとは微妙に違う、むず痒いようなもどかしさを感じた。その感覚は一瞬だけ。

指が股間から抜かれて、鼻先に突きつけられた。豆腐のような白い滓がこびりついていた。甘酸っぱい饅えた臭い。

「ここはちゃんと洗わないと、スマグメが溜まるぞ」

単語はわからなくても、それがなにかはわかる。身体を洗わなければ垢がつくし、歯を磨かなければ歯垢がこびりつく。

「ここが臭くちや嫁の貰い手がないぞ」

もういちどスマグメをこそげ取ってから、本郷は佐江の股間に湯を掛けた。

ぼんと股間を平手で叩かれて、佐江は飛びあがった。

それが終わりの合図だったらしい。本郷は平然と腰掛に座って脚を開いたまま、そこを

指さした。

「おまえが洗う番だ。チ●コから洗ってもらおう」

初めて聞く言葉だったが、意味は明白だった。佐江は放心の表情のまま、本郷の足元にひざまずいた。湯を汲んで、股間に掛け流す。洗面器の中の手拭に手を伸ばそうとすると、そこで叱られた。

「男の大切な部分だ。手洗いしろ」

(え……?)

佐江は当惑した目を本郷に向けた。まだ、性的な連想ははたらいていない。ハンカチや下着ではあるまいに。こんなカチコチの棒では、揉み洗いもできない。

「両手で包んで、そつとこするんだよ」

おそるおそる、淫茎の胴部に両手を伸ばした。上下左右にこすってみる。

「そうだ、うまいぞ。ひよつとして、親父のチ●コを洗ったことがあるんじゃないか？」

「そんなこと、絶対にありません！」

父を冒瀆された思いで、佐江はきつぱりと否定した。

「目鯨を立てるな。しかし、親父のチ●コを見たことくらいは、あるだろう？」

「……はい」

「俺のと比べて、どうだ？ どっちが大きい？」

「……オジサマです。父の……あの、その……ここは、まったく様子が違います」

それは、佐江の疑問であり心配だった。本郷が堂々と見せつけているということは、これが男性のふつうの形なのだろうか。そうだとすると、父は奇形なのだろうか。

「そりゃ、そうだ。娘を相手に勃起したら、そいつは……いや、人それぞれだな。つまり、このチ●コは、おまえの裸を見て興奮しているのさ」

本郷は唐突に、性交の基礎知識を佐江に教え始めた。勃起した淫茎を股間の割れ目の中の膣に挿入すること。射精という現象。運が

良いと(悪いと)それで妊娠するということ。

佐江は、本郷の言葉のいくつかを耳にした記憶もあったが、性の実際をここまで具体的に教えられたのは初めてだった。

「それじゃ、洗い方を変えてくれ」

佐江に人差し指と親指で輪を作らせて、雁首を前後にしごかせた。

「左手は金玉を揉め。茹で卵をつかむより、そつとだ」

「右手の残りの指もチ●コに添えて。輪っかは、もうちつとだけきつく」

「もつと早く動かせ」

奇妙な洗い方だなと思ったが、折檻が怖いのが八割、好奇心が二割で、本郷に言われるままに佐江は両手を動かし続けた。そうして数分。輪の中の肉棒がぐつと太さを増して、ビュクビュクツと痙攣した。と同時に。

「きやあっ……」

熱い液体を顔に浴びせられた。思わず拭うと、それはどろっとした白濁だった。

「それが射精というやつだ。勉強になったろ？」

愉快そうに笑う本郷。

「ありがとうございます」

佐江は、この半日で仕込まれた言葉が無感動に繰り返した。

浴びた白濁を洗い流すと、つぎは腕を洗うように命じられた。

「今度はタワシを使え」

痛くないのだろうかと当惑しながら、タワシを取りに立ち上がると、また叱られた。

「俺を湯舟と一緒にくたにするな。男の身体を洗うのは、女の自前のタワシだ」

「……………」

佐江には本郷の言葉が、まったく理解できなかった。

「そら、股倉に立派なタワシが生えているじゃないか。そいつにシャボンを泡立てるんだよ」

きよとんとして数秒。羞恥ではなく屈辱で



顔が蒼ざめていく佐江。

「そんな馬鹿げたこと、絶対にできません！」  
言葉で脅すかわりに、本郷は実力行使に出た。不意に立ち上がると、佐江の手首を引っ張って浴槽へつれて行った。

「やだ、なにをするんですか？ 怖い！ やめて……」

本郷は首根っ子をつかんで、佐江の上半身を浴槽に浸けた。

ゴボゴボツと泡が佐江の口からあふれた。必死にもがいたが、顔を上げられない。脚をばたつかせ、自由な左手を闇雲に振り回した。急激な運動で余計に酸素を使ったのと、事前の覚悟ができていなかったのとで、三十秒もしないうちに目の前が赤くなってきた。

(殺される……)

縄束での股間打ちを予告されたときをはるかに上まわる恐怖。佐江はゴボゴボゴボツと、盛大に泡を吹いた。と、首への圧迫がやんで、髪をつかんで引き上げられた。

「てめえ……やさしくしてりや、つけあがりやがって。タワシと百叩き、どっちを選ぶかすぐ決める！」

「……タワシを使います」

ゲホゲホ咳き込みながら、佐江が答えた。両目が濡れているのは、湯のせいだけではなかっただろう。

本郷は、なにごとか考えるふうだった。もつと甚振ろうとでも企んだのかもしれない。が、すぐにうなずいた。

「最初から素直にしてりや、苦しい目にあわずにすむんだぜ」

ふたたび大股開きで腰掛けた本郷の目の前で、佐江は石鹸を淫毛に塗りたくった。両手で丹念に揉んで、股間を白い泡で包む。

「始めるときは『失礼します』くらいの挨拶をしろ」

黙って手首を握ろうとした佐江を、本郷が叱りつける。

「あ……はい。失礼します」

佐江は本郷の手首を持ち上げて、腕にまたがった。命じられるままに中腰になって、股間を腕に押しつけ、腰を前後に動かす。

にゆるんにゆるんと、本郷の腕が股間を刺激する。佐江は、おぞましくもはしたない行為を嫌悪しながら、腰が砕けそうになる感覚を覚え始めていた。縛られたときの脱力感にも、すこし似ていた。

その妖しい感覚が高ぶらないうちに、佐江は両腕を洗い終わり、背中に取りかかった。それには、腕を洗う以上に卑猥な仕種を要求された。泡まみれの淫毛を背中に押しつけて、突き出した腰を上下左右にくねらせるといふものだった。西洋の場末の見世物小屋で、同じ仕種が（しかし、最低限の布切れは身に着けて）演じられているなどは、佐江の知るところではなかった。

この背中洗いは、腕よりも鮮烈な感覚を佐江にもたらした。本郷に軽くつままれて甘く痺れ、ちよっと抓られただけで飛び上がるほ

どの痛みを感じた、股間の一点。そこが絶えず刺激されるのだ。妖しい気分が、ずんずん高まっていった。

「はあ……ふう、ふう」

いつか佐江は口を半開きにして、なまめかしい息を吐いていた。下の方を洗うためにぐつと腰を落とすと、本郷が言うところのタワシの毛先がそこを擦りあげて、妖しい感覚がいつそうつのつた。これが快感だということ、佐江は自覚し始めている。

肩から腰まで洗い終わっても、本郷はやめろとは言わない。それをいいことに、佐江は再び肩をこすった。肩甲骨のゴツゴツが、そこを直接に刺激して、腰が砕けそうになる。腰の奥に熱い滾りが生まれて、それが股間にあふれてくるのが、はつきり感じられた。

「はあ、はあ、はああ……ん」

吐息が鼻に抜けて、さらに甘くなっていく。あと五分も続けていたら、佐江は絶頂という感覚を生まれて初めて体験していたかもしれ

ない。

しかし、女にかけては海千山千の本郷。す  
いっと間合いをはずした。

「人の背中でマンズリを搔くのもたいがい  
しとけ」

苦嗤いしながら、桶に汲んであつた湯を背  
中にとりよりは佐江にぶつ掛けた。

佐江はマンズリという言葉を初めて聞いた  
が、それが自分の行為を差しているとは見当  
がつく。湯を浴びせられて我に還つてみると、  
自分がとんでもなく浅ましい真似をしていた  
のだと気づいた。

当時の婦女子は、性に関する事柄はすべか  
らく恥ずかしく浅ましいものだと思えられて  
いる。拷問にかけられる恐怖からやむなくし  
た行為は——裸の写真を撮られようと、自分  
から裸の腰を突き出そうと、半裸で外に出よ  
うと、手洗いもタワシ洗いも、自分に恥じる  
ことはない。けれど、今のマンズリとかいう  
のは——本郷に命令されたこととはいえ、は

つきりと自分の意思があつた。それを認めないほど佐江は自分の心に不正直になれなかつた。

そんな葛藤も、本郷にはお見通しだったかもしれない。

「あとは自分で洗う。おまえは先にあがつていいぞ」

「はい、ありがとうございます」

今度ばかりは本心から感謝の言葉を述べて、佐江はそそくさと浴室から退出した。そして、脱衣所で溜め息をつく。自分の手で禪を締めなければならぬ。本郷の股間を包み、佐江の唾液を吸い取り、汗と、もしかしたら下り物まで沁み込んでいるかもしれない結び玉を自分の股間に埋め込むのは、あまりにもおぞましかった。

けれど、百叩きの恐怖を打ち負かすほどではなかった。利行が締めた手順を思い出しながら、なんとか禪を身に着けた。そして、まだ汗で湿っているつんつるてんの浴衣で、で

きるかぎりは裸身を包んだ。

座敷の前の廊下を渡って二階へ上がろうとしたところで、ユキに呼び止められた。

「どこへ行こうってんだい？」

「オジサマが、もういいとおっしゃられたので、お風呂の湯を落とすまで休んでいます」

「馬鹿！」

ユキの叱声には本気が強かった。

「気の利かない下女だね。手が空いたら、何か御用はありませんかって、自分から聞いてまわるもんだよ。あたしと、利行と、先輩の二人にね。誰からも言いつからなかったら、自分でなにか見つけな」

家事は起きてから眠るまで続くのだと、きつく叱られた。もちろん、半ば以上は佐江を虐める言葉だった。心がけとしては間違っていないにしても、正子も千津も、適当に息を抜いている。

「すみませんでした。気をつけます」

言葉を選んで、佐江は謝った。それでも、

ユキの意にそわなかつた。

「こういうときは、きちんと土下座しな」

佐江はできるだけだけしおらしい顔を作つて、廊下に正座した。

「重ねがさね、不調法で申し訳ありません。これからは気をつけます」

両手をついて、額を廊下にすりつけた。つとユキの立ち上がる気配があつたが、土下座したからには赦されるまで顔を上げられない。

どんと背中を踏まれた。

「おまえ、襷はどこへやったんだい？」

「たもとに入れて持っています」

「立ちな」

佐江を立たせて、浴衣の袖口をつかんだ。

「仕事のたびに襷を掛けたりはずしたりじゃ、面倒だろう」

ビイッと袖を肩から引き千切つた。佐江の向きを変えさせて、反対側も同じようにして両肩を剥き出しにさせた。



「これで、ちっとは働きやすくなったね」

「はい、ありがとうございます」

佐江は誰からも用事を言いつけられなかったが、自分の部屋へは戻れなかった。隣の部屋の利行に呼ばれたのだ。

利行は浴衣を脱がせて、禪の締め具合を検分した。

「ユルフィンだな。これじゃすぐに落ちちやうよ」

締め方の練習をしると、命じられた。一歳しか違わない、佐江の目でさえも女の身体に飢えているとわかる男の前で裸になることは、本郷に対してとも、同性に対してとも違う恥ずかしさと懸念があった。しかし、逆らえないのはもちろんだ。

佐江が案じていたとおり、利行は前から後ろから佐江を抱きしめて、尻も乳房も女陰も好き放題に触りながら、それどころか尻の穴にまで指を伸ばして（我慢を重ねていた佐江も、このときは素っ頓狂な悲鳴をあげてしま

った)、何度も禪を締める練習を繰り返させた。女陰の奥までは指を挿れられなかったのだが、その意味に佐江が気づいたのは、ずっと後になつてからだつた。

練習をさせられて、得をしたこともあつた。禪が一本きりでは洗濯もできないだろうと、真新しい晒し布を二本くれたことだつた。もつとも、自分の手で結び瘡を作らされて、それはすこし屈辱だつた。

午後十時を過ぎてから、佐江は風呂掃除を命じられた。湯を落とすと同時に、残り湯で浴槽を洗い、タイル張の床も磨くのだ。

腰を落とすと結び玉が食い込んでくるので、佐江は禪もはずした真っ裸になつて、床磨きから始めた。なにしろ六畳もある。そのうち二畳半は大小の浴槽だが、それにしても(本物の)タワシでこするには大変な広さだ。大きいほうの浴槽は、さいわいにタイル張なので、床と同じ手入で良い。肌に触れるところだといふので、タワシではなくヘチマを使う

が、手間はそれほど変わらない。

床を半分ほど磨き終わったところに、正子が姿を現わした。彼女も素裸だった。もともと豊満に見える女だが、裸になると『肥っている』という形容のほうがふさわしい。ずん胴とまではいかないにしても、腰には余分な脂肪がまわっている。乳房と尻も大きいのが、年齢のわりに垂れている印象だった。淫毛だけは、佐江よりも薄かった。

「あんたひとりじゃ、真夜中までかかるよ。あたしも手伝ったげる」

またなにか意地悪をされるのかと怯えた佐江だったが、意外にも正子はヘチマを持って浴槽にはいり込んだ。底から一尺までに落としたぬるま湯に尻を浮かべながら、粉石鹸をつけたヘチマでタイルを上から磨いていく。おぼつかない手つきで余計な力ばかりをいれている佐江に比べると、二倍も三倍も早かった。正子の方が先に終わって、床磨きまで手伝ってくれる親切ぶりだった。

「ありがとうございます。ほんとうに助かりました」

脱衣所へ戻って、佐江は繰り返して頭を下げた。この人は味方で、もしかしたら水汲みの意地悪は、どこかから監視しているかもしれない本郷たちの目を恐れての仕打ちだったのかもしれない。そうとしか思えなかった。

「ほんとうに大変な一日だったわねえ。裸にされたり叩かれたり、あげくに下女だなんて。千津ちゃんも引つ込み思案だからね。あたいだけは、あなたの味方になったげる」

ぎゅっと抱きしめられて、佐江は涙をこぼした。が、顎に手をかけて顔を上げさせられ——唇を重ねられて、佐江は狼狽した。顔をそむけようとしたが、片手で頭を押さええられた。

「むううう……いきなり、なにをするんですか？」

「だから、味方になってあげるって言うてるじゃないか」

また分厚い唇を押しつけられた。だけでなく、ぬめぬめした柔らかな物が、歯を割って押し入ってきた。正子の舌が、佐江の口を内側から舐めまわす。

（厭っ……初めての接吻を女の人に奪われるなんて！）

（ううん、違うわ。接吻は異性とするもの。これは接吻なんかじゃない）

男の手で裸にされたのとは異次元の衝撃で、佐江の思考が空回りする。味方になってくれるという正子の言葉にすがりつきたい思いもあつた。

抵抗が弱まったのを勘違いして、正子は背中にまわしていた腕をつうつと下げていった。佐江の背筋に、ぞわあつと悪寒が走った。その身震いが、さらに正子を凶に乗らせる。尻を撫で、尻の谷間に這わせた指が股間をうかがう。

秘裂をなぞられて、佐江は決心がついた。  
「やめてください！」

正子の抱擁から逃れて、胸と股間を両手でかばった。

正子は不服そうに佐江を見つめていたが、すぐに表情をやわらげた。

「ごめんね。佐江ちゃんがあまりに可愛いから、悪戯心が起きちゃった。あんたの味方をするという言葉に、嘘はないのよ」

床の上にたたんであった着物を取り上げると、てきぱきと着付けていった。腰巻、長襦袢、紺緋、半幅帯。使用人は冬でも足袋を許されない。質素だったが、屋敷の格に合ったお仕着せになっている。佐江はあらためて、自分の珍妙で卑猥な着物に恥ずかしさを覚えた。

「それじゃ、お先にね。いつまでも裸だと風邪を引くわよ。まあ、あんたのだと、着ても裸と変わりないわね」

佐江の心を見透かすような言葉を残して、正子が出て行った。

佐江は浴衣だけを身に着けて、自分の部屋

へ戻った。もう家事は終わったのだから、禪を締めていなくても叱られないはずだった。

自分の部屋へ戻って。整理箆笥から下着と寝巻を取り出して、半日ぶりにまともな格好になれた。疲れ果てた身体を寝台に横たえて、不安に胸を震わせる。

いったい、自分はこれからどうなるのだろうか。いや、どうされるのだろうか。月曜まで辛抱すれば、土曜の昼までは元の生活が戻ってくるのではないかと、無理にでも信じようとしたけれど。手首さえ縛らなければ、縄の跡は人目につかないかもしれない。服を着ていては、胸や尻にどれだけ痣があつても外からは見えない。まさか、毎日こんなふうに虐められるとしたら——とても耐えられない。いっそのこと、交番に駆け込んでやろうかしら。いくら躰といつても、これは傷害罪に当たるのではないかしら。でも、絶対に醜聞になる。そして、お父様まで巻き添えにしてしまう。

一年間、我慢するしかないのだろうか。今日のようなことが、あと三百六十四回も繰り返されるのを耐えなければならぬのだろうか。もしもお父様の帰国が延びたら四百回、五百回？

— そうだ。こんなことが続くなら、家出をしようかしら。お父様の帰国まで、どこかに隠れて……いられない。保証人がいなければ、女中にもなれない。悪い人に騙されて、海外へ売られていくか、苦界に沈められるか。

悪いほうへ悪いほうへと考えが向いていて、佐江は声を忍ばせてしゃくり上げ始めた。そして、そのまま寝入ってしまうのだった。



### 三…拷問屋敷

五時前に叩き起こされた。

「誰が勝手に着替えていいって、言ったんだい」

枕元に立って、ユキが険しい顔で睨んでいた。

「でも、家事が終わったから……」

「もう始まっているよ。さつさと着替えて下へ行きな」

まだ半分眠っている頭をぶるんとひとつ振って。ああ、そうだったんだと思い出す。ユキが出て行く気配もないので、諦めて目の前で寝巻を脱いだ。椅子の背に掛けてある白い布を見て、それも思い出した。腰巻をはずして、布の結び玉を股間にあてがう。

「あたしだって、鬼じゃないんだ。今朝のところは、二つばかり見逃してやるよ」

「………？」

にわか仕込みの卑屈な態度を取り戻して、佐江は義母の様子をうかがった。

「勝手にお仕着せを脱いだことと、朝一番から口答えしたことだよ。これが長三郎兄さんだったら、有無を言わさず土蔵へ連れてって、百叩きを二回だよ」

佐江は締めかけていた禪を寝台に置いて、ユキの前に土下座した。

「見逃していただいて、ありがとうございます。金輪際、勝手に着替えたり口答えしたりしません」

「わかりやいいんだよ。支度したら、すぐ下りといで」

ユキはさっさと部屋から出て行った。昨夜とは違って、追い打ちはかけられなかった。つぎの演目が決まっているからだとは、佐江は夢にも思わない。

結び玉を女陰に埋めて禪を渾身の力で締めあげるのは、まったくの本意というわけでもなくなっていた。なんとなく下半身が引き

締まる思いだったし、結び玉の刺激もおどましさの中にはつきりと妖しさがあつた。膝から上が六寸も露出して胸元も内側が隠せず、袖も引き千切られた、もう浴衣とさえ呼べない着物は、いっそ裸でいると言われたほうがましなくらいに恥ずかしかつた。

下へ降りて言いつけられたのは、廊下の拭き掃除だった。屋敷が広いだけに、廊下も長い。玄関から庭に面して伸びる表廊下、両側の三部屋ずつを貫く中廊下、裏口につながる奥廊下。乾拭きだけでなく、週に一度だけの濡れ拭きまでも含めて一時間で終わらせると言いつけられた。風呂の水汲みと同じで、とても時間が足りない。

「拭き掃除の仕方もしらないのかい？」

呆然としてみると、ぴしゃりと尻を竹尺で叩かれた。

「いえ……できます」

風呂場でバケツに水を汲んで来ると、また尻を叩かれた。

「こつちに置いといて倒したら大変だろ。バケツは風呂場へ残して来るんだよ」

バケツを戻して、雑巾は四枚準備した。一枚ずつ洗いに戻っていたら、それだけ手間が増える。

拭き掃除を始めようとすると、今度は肩を打たれた。かなり手加減されているが、いちいち叩かれて注意されることが屈辱だった。

「座り込んでどうしようってんだい。雑巾は両手で持って、四つん這いで膝を伸ばすんだよ」

お寺や道場で修業として行なわれている拭き掃除の姿勢だった。たしかに、このまま身体を前へ進めれば、ふつうに拭くより何倍も早い。

「そら、さっさと始めな」

ビシャツ。尻への三発目は、容赦がなかった。たたたたたと、佐江は尻を上げた四つん這いの姿勢で廊下を拭き始めた。それをユキが追いかけてきて、膝の裏へ竹尺を打ちつ

けた。

「静かにしな。長三郎兄さんは、まだ寝てるんだからね」

佐江は足音を忍ばせながら、小走りの要領で廊下を往復した。

「やればできるじゃないか。できないふりして怠けようたって、そうはいかないよ」

拭き掃除の姿勢を続けている佐江の裾をまくって帯にはしより、尻を剥き出しにしてから、ビシャンと力いっぱい叩いた。

「痛あつ……！」

悲鳴をあげてから、あわてて口を押さえた。縄束は力が何本にも分散されるし、しなつて尻全体を叩くが、竹尺は一点に力が集中する。縄束よりも鋭い、斬られるような痛さだった。

雑巾を四枚使い切ると風呂場へ行つて洗い、それを固く絞つて戻る。濡らし拭きと乾拭きを廊下ごとに片付けて、六時十五分にはすべて終わった。

「十五分の超過だから十五叩きだね」

いちいち土蔵へ連れて行くのも面倒だから  
ここで罰を与えるとユキが宣告して、寝間か  
ら離れた空き部屋へ佐江を追いやった。

「裸になって、自分で猿轡をしな」

佐江が恨めしげな目をユキの顔に向けたの  
は一瞬。命じられたとおりにお仕着せを脱い  
で、禪をほどいた。結び玉をもっと大きくと  
言われて、子供の拳くらの大きさに結びな  
おし、それを頬張った。本郷にされたのと同  
じに、布の両端で頬をくびった。

「まっすぐ立ってるんだよ。姿勢がくずれた  
ら数にいれないからね」

佐江を部屋の真ん中に立たせて。

「いくよっ」

ユキは袂を左手で押さえて竹尺を振り上げ、  
佐江の乳房に叩きつけた。

パチン！

「ぶばあ……」

音からすると手加減されているらしいが、  
焼けるような痛みが乳房に走った。

パチン！

「ぐびい……！」

竹尺の先端が乳房を引つ搔いて佐江の左から右へ抜けた。昨日に打たれて紫色になっている痣のうえに、赤い線条が重なった。

左の乳房に五発をくれてから、佐江に左を向かせた。右の乳房が、ユキの目の前に晒される。そこへも律儀に五発。竹尺が真正面から叩き付けられるので、打たれた瞬間には乳房が二つに割れるほどひしゃげる。痛みもそれだけ大きい。先端に引つ掛かれて肌が破れないのだけが救いだった。

残る五発はどこに——と、佐江は怯えたが四つん這いを命じられて、ほっとした。

ビシャン！　ビシャン！　ビシャン！　ビシャン！  
ビシャン！

手加減のない打擲だったが、佐江は呻き声を漏らしただけで耐え抜いた。女だから本郷ほどの力はない。というなめた心が顔に出たのか。最初からの狙いだったのか。

ビシイッ！

尻の谷間越しに股間を斬られて、脳天まで  
激痛が貫いた。

「ぶばああっ……！！」

息を詰まらせて崩れ落ち、両手で股間を押  
さえてのたうった。竹尺の平面ではなく、峰  
の部分で女陰に叩き込まれたのだった。

「いつまでも寝ていないで、とつとと置きな。  
つぎの仕事だよ」

のたうちまわっている佐江の脇腹に、竹尺  
の先を突きいれるユキ。

「こら、起きろったら」

無理な命令を繰り返して、さらに竹尺で突  
つづく。

痛みをこらえ、歯を食いしばって立ち上が  
るしかなかった。猿轡は吐き出して結び玉を  
作り直し、禪を締めた。お仕着せはまだ着な  
くていいと言われて、裸でユキについて行っ  
た。いっそ着ないほうがましだとさえ思っ  
いた子供浴衣（の残骸）だったが、やはり裸



では心細かった。

「つぎの仕事は靴磨きだよ。長三郎兄さんと利行、今日の分だけでいいからね。これとこれ」

ユキが靴箱から二足を取り出して、玄関の上がり口に並べた。上がり框には黒と茶色の靴墨と、磨き布。

「あの……靴ブラシはどれを使えばいいんでしょうか？」

ユキは黙って佐江の右腕を引き上げた。

「右と左で黒と茶色を使い分けな」

困惑してユキの顔を見つめるうちに理解が生まれて、佐江の両目に涙が盛り上がった。自前のタワシで身体を洗えと言われたときには——直前の暴力に怯えきっていたせいもあるが、性に関する秘め事の雰囲気を感じて、おかしな言い方だが、屈辱に羞恥が重なるのではなく、屈辱と羞恥が互いに薄めあっていたようなところがある。

けれど、腋毛で靴を磨けというのは。そこ

に妖しい雰囲気はない。同性をただひたすらに辱めようという、純粹の悪意が感じられた。それへの抗議が、無言の涙となって表出したのだった。

「泣いたって無駄だよ。七時までに終わらせなければ、朝御飯は抜きだからね」

言い捨てて、ユキは寢間へ戻っていった。朝食までの一時間ほどを二度寝するつもりだろう。

だいたい、ユキが朝早くから起きたのが例にないことだった。朝餉の支度は住み込みの正子にまかせて、自分は夫の起きる直前まで寝ているのがふつうだった。父の寵愛をいいことに、主婦業すら怠ける根っからの妾女。面と向かって、もっと早く起きてはどうかと苦言を呈したこともあったほどだ。低血圧だから早起きすると健康によくないとか、出鱈目な言い訳でかわされてしまったけれど。

それが継子を虐めるためとなると、三時間ちかくも早起きしてくる。自分がユキにどれ

ほど憎まれ疎んじられていたか、佐江はあらためて知ったのだった。

けれど。正子の言うように、泣いていても始まらない。靴を磨いて、その後で身体の汚れも洗わないと叱られるに決まっている。もたもたしている、ほんとうに朝食を取り上げられかねない。と思ったと同時に。グウウとお腹が盛大に鳴った。昨日の昼は食欲がなく、夜は寝過ぎして食べはぐれた。朝まで抜かれてはたまらない。

佐江は長三郎の靴を手にとって、左の腋にこすりつけた。汚れ落としのブラシも靴墨塗りのブラシも一緒くただけど、知ったことはなかった。

七時十分前に靴磨きを終わって。お仕着せを持って浴室へ駆け込んだ。シャボンに手を伸ばしかけて間違いに気づき、女中用の安物石鹸で腋の下を何度もこすった。目を近づけると、とくに茶色の靴墨はかすかにこびりついていたが、お仕着せを着て姿見に移すと、

腋からはみ出た毛だけではわからなくなってくれた。

玄関口へ佐江が戻ったのと、寝間から正子が出てきたのは同時だった。形だけ靴を検分してから、面白くもなさそうに合格点を与えた。

「まあまあね。早々と飢え死にさせちゃ、元も子もないしね」

といっても、すぐ朝食にありつけるわけではない。主人一家（つまり、ユキ親子と本郷の三人）が食べているあいだは、女中の一人が食卓にひかえて、残りの者は、出社なり登校なりの準備にまわる。女中の朝食は朝のどたばたが終わってからだった。そのほうが、女中にも都合が良い。主人一家の食べ残しを自分たちの胃袋で処理できる。かじりかけだろうが、ベーコンはベーコンだ。

「あの……」

佐江が、おそるおそる切り出した。

「わたしも今日は学校があるので、出来れば

先に食事を……」

「学校は、しばらく休め」

本郷が事もなげに言った。

「学校へ通うのは家事に慣れて、下女としての心構えが身についてからだ」

言葉を変えれば。虐待されていることを告げ口しないと見定めるまでは、家から出さなまいということだろう。その程度には、本郷も用心している。

「……はい、わかりました。お許しをいただけるまで、頑張ります」

すこしでも心象をよくしようと言葉に気をつけたが、絶望の表情までは隠しおおせたか、どうか。

●六歳の利行は、●学四年生。母のパトロ  
ン（つまり、佐江の父）のおかげで進学できたが、来年卒業した後は学歴を生かして適当な所に就職するはずだった。しかし、戸籍上も立花家の跡継ぎとなり、ひいては貿易会社『立花国際流通』の次期社長ともなると、も

つと上を卒業しておかなければ箔がつかない。ということ、今日も半ドンの後には家庭教師にしがられる。

それに比べて、本郷は気楽なものだった。ユキが正妻になおると前後して、『立花国際流通』の無任所取締役となった。つまり、運転手付きの専用車に乗って適当に会社へ顔を出して、あとはブラブラしているだけで、ふつうのサラリーマンの十倍くらいの収入が得られるわけだ。

こういった経緯を冷静に分析すれば、佐江の父親である立花長利という人物が平時の能吏でもなければ乱世の英雄でもない、二代目にして勘亭流で『売家』と書きかねない人物だとわかるのだが……世間知らずで、現代風に言えばファザコンの佐江にそれを求めるのは無理かもしれなかった。

もう地獄の底まで叩き墜とされた。そう考えていたとしたら、佐江はまだまだ箱入娘の

思考から抜け出していなかったことになる。

「ちわーす。立花様のお屋敷は、こちらでよござんすね？」

威勢のいい挨拶とともに裏口をくぐったのは、六人の大工たちだった。

「ええ、さっそくですが、お打ち合わせの通りに進めさせていただいて、よござんすか？」

「ああ、ご苦労様です。よろしくお願いしますよ」

本郷が愛想よく出迎えて、ついでに（ではなく、脚本どおりに）愛想の良すぎる命令を佐江に言いつけた。

「職人の皆さんにお茶を出して差し上げなさい」

仕事に来てくれた職人にお茶なり煙草なりを出すのは常識だが……佐江の服装は非常識のきわみだった。

「はい、今すぐに……でも、あの？」  
物陰に隠れて、本郷の顔をうかがう。

「あの……この格好で、ですか？」

「禪を見てもらいたいのなら、お仕着せを脱いでも叱らないぞ」

困惑と羞恥と絶望が緋い交ぜになって、佐江は表情を消した。台所に立って湯を沸かし、日常使う番茶を淹れた。女中用では失礼だし、お客というわけでもない。こちらへんは、内心の動揺とは関係なくテキパキと手が動く。六つの湯飲み茶碗に注ぎ分けて盆に乗せて、それを持ち上げようとする佐江の二の腕が、小さく震えた。

唇を噛み締め、気を取り直して、お茶を裏口へ運んだ。

「一服してから、お仕事にかかってください」  
裏庭で道具を広げている大工たちの視線が、佐江の全身に突き刺さった。

「お、いいねえ」

「お嬢ちゃんは、男に見られるのが好きかい？」

「こいつは女学校なもんだから、男に免疫がないんだ」



本郷が姿を現わして、適当な事を言う。佐江を監視するつもりだろう。

「だから、こういう格好をさせて、男の目に馴らしてやろうと思つてね」

「なるほど、うちにお声を掛けてくださるだけあつて、いい趣味をお持ちですな」

棟梁らしいごま塩頭の男が目を細めた。

「けどよ。これじゃ、観音様まで拝観できるぜ」

「その心配は無用」

「きやああつ……」

佐江は裾を押さえてしゃがみ込んだ。本郷が、いきなり尻をまくつたのだ。

「おおお」

「なある……」

六対の視線が佐江の下半身に集中した。

「さ、座興はおしまい。皆さん、頼みますよ」

「おいさ……」

大工は三人ずつに分かれて、土蔵と屋敷の二階へ散った。

本郷は佐江を裏口から連れ戻して叱った。

「俺に恥をかかせるな。ああいうときは『素敵な禪でしょ』くらい言つて愛想をふりまけ」  
騒いだ罰だと言つて、佐江の裾をたくし上げて帯に挟んだ。へそから下が剥き出しになる。

その姿で佐江は二階へ追い上げられた。当座の物置に使っている部屋の中身を、佐江の部屋へ移せと命じられた。

「あとで、また戻すのですね？」

「自分の部屋を取り上げられるのではないかと、不安だった。女中部屋で雑魚寝をさせられても、おおいに不満はあるけれど我慢する。でも、夜な夜な正子に言い寄られるのではないかと、それを心配した。昨夜の正子は、けつして悪戯心ではなかったと、佐江は直感していた。嫁ぎ先から離縁され実家から勘当された醜聞とは、正子の変態性癖ではなかっただろうかと、そこまで深読みしていた。

「いや。おまえの部屋は奥に移す。そのため

に改装してもらっているのだから、職人にはよくお礼を言っておけよ」

なぜ、そんな面倒なことをするのか疑問に思ったが、思い当たる節がないでもない。今のところ、利行は風呂を覗くくらいだが、血のつながりのない男女。夜這いでも掛けてこないとも限らない。あいだに空き部屋があれば、すこしは違うだろう。佐江の部屋に内鍵を付けてくれるのかもしれない。佐江は、自分の思考が二十四時間前の境遇を前提にしていることに気づいていなかった。

大工たちの好奇の視線を下半身に浴びながら、佐江は部屋の荷物を片っ端から運び出した。整理は後ですればいい。三十分もしないうちに荷物を移し終えたとき、大工仕事は始まってさえないなかった。けれど、大小の板を配置したり、鎖やら太いネジやらが片隅にまとめられたり。内鍵をどうこうという話ではなさそうだった。

荷物を整理した後は、裏庭で薪割りを言い

付かった。物置小屋までの往復にさえ人目をはばかれれば、あとは物陰で作業ができる。とはいえ、下半身丸出しで外の仕事をやらされるのだし、小屋の薪をすべて割れと命じられたのだから、佐江を辱めることが目的の、無理に作られた仕事だった。

昼まで斧を振るい続けて、やっと半分。昨日の水汲みで擦れた掌には、また血がにじんできた。血豆ができなかったのは、厭でもひと休みしなければならぬ時間が何度もあつたからだ。薪割りは物陰でできるとしても、小屋への出し入れは人目につく。洗濯物を干したり庭掃除をしたり、そういう気配があるときは、じつと隠れていなければならなかった。さいわい、仕事の期限を切られていなかった。なので、遅いと叱られても罰までは食わないだろうと、佐江は勝手に思い込んでいた。

女中部屋での昼食をすませて、薪割り仕事に戻ろうとしたところで、佐江は本郷に呼びつけられた。

「おまえの部屋の改装が終わったぞ。見に行こう」

三つある部屋の一番奥。洋風のドアを見て、佐江は最初の疑問を持った。威圧されるほど大きな南京錠が取り付けてあった。内鍵どころか、監禁が目的としか思えない。そして、大工がきれいに片付けていった部屋の中は、おそろしく殺風景で、おどろおどろしかった。

まず、作り付けの寝台。錠と斜木で頑丈に補強されて、マットも布団も取り払われていた。底面のスノコは一本おきに色が違っていた。その上でじかに寝られるよう、板を追加したらしい。そして寝台の左右からは四本ずつの短い鎖が伸びて、半円形に割れた鉄の帯がつながれていた。手枷と足枷。それくらいは佐江にも見当がつく。そういう目で見ると。首元と腰のところには、人間のその部分を固定するための枷があった。

「これは……」

佐江の部屋ではなく、佐江を監禁する部屋

だった。

「勉強机も素敵だぞ」

本郷が得意そうに指さしたのは、幅が一間もありそうな一枚板だった。あちこちに鎖や手枷が取り付けられていて、壁に面した一辺は中央が横長の半円形に削り抜かれている。脚の下には短いレールが敷かれていた。

「ちよつと座つてごらん」

猫撫で声で本郷が、佐江を机と壁のあいだに押し込んだ。半円形の下には、やたらと頑丈そうな無骨な椅子が、これは床に固定されていた。

座りかけて、佐江はためらった。椅子の真ん中に、縦に材木が取り付けられていた。円筒を半割にしたそれは、座れば股間を圧迫する。材木の前と後ろに金属製の大きなネジ穴が埋め込まれているのも謎だった。

「そのネジはな、今のところは使わない。とにかく、座りなさい」

しかたなく、脚を開いて材木を股間に挟む

形で佐江は腰掛けた。

「あう……」

禪の結び玉が材木に押されて、ぐんと食い込んできた。

「勉強中はじっと座っていられるようにしてある」

本郷が押すと、机はレールの上を滑って壁に密着した。割り抜かれた半円に、佐江の胴体がすっぽり嵌まり込んでしまった。

ガチャンガチャンと、机の両端の蝶番を壁のフックに掛けると、机はびくとも動かなくなつた。

「これで勉強に専念できるし、寝相が悪くても寝台から落ちない。素敵な部屋だろう？」

学校から帰って宿題をするあいだも、寝ているときまでも、佐江は虐め続けられるのだ。それでも、佐江が口にできる言葉はひとつしかない。

「とても素敵なお部屋です。オジサマ、ありがとうございます」

無表情の棒読み。本郷はそれを咎めなかった。

「つぎは、土蔵を見せてやろう」

上機嫌で、佐江を拘束から解放する。

「あの……裾を下ろしていいですか？」

裾はまだ帯に挟まれたままで、禪一本の尻が丸出しになっている。

答えはなかった。本郷は先に立って、さつさと部屋を出て行く。佐江は諦めの色を目に浮かべて、悄然とついて行った。

裏口からでるときは、サンダルをつつかけて頭だけ外に出して、入念に周囲をうかがった。隣家に人影がないのを見定めて、一目散に走った。ずんずんと結び玉が突き上げて、きゅつきゅつと淫毛が引っ張られるが、足を緩める勇氣はなかった。

「えええ？」

思わず声になった。土蔵の中は、前にも増して明るくなっていた。吊られた電灯の数が増え、壁にも照明が取り付けられていた。電



気スタンドで光を当てなくても、じゅうぶんに写真を撮れる明るさだった。その光の中に浮かび上がる、かずかずの奇妙な大道具。

「太い丸太が床から生えていた。その隣にはキの字形をした角材が立てられ、反対側には三角形の木材が四尺ほどの高さに水平に横たえられている。二人の大工が、垂直に立てかけられた丸テーブルのような仕掛に取り付いていた。水平にしても、丸テーブルとしては使えそうもない。丸い縁へ放射状に伸びた骨組みがあるきりだから、物に乗せても落ちてしまう。別の二人は、幅広の踏み台を組み立てている。踏み台の真ん中から一本の棒が垂直に突き出して、途中で之の字形に折れ曲がっている。自動車を運転する者なら、その形状をクランクと表現するだろう。」

「ぼけっとしていないで、早く素っ裸にならんか」

本郷の声は、佐江だけでなく六人の大工まで振り向かせた。

「え……？」

「折檻を受けるときは素っ裸になるのが、我が家のしきたりだ」

そんなしきたりがあるわけはないけれど、伯父の言葉は絶対だった。佐江は黙って帯を解いて、つんつるてんのお仕着せを脱いだ。

物問いた気に本郷を見上げ、睨み返されて目を伏せた。手をわななかせながら、禪をほどく。大工たちの視線が、本物の針のような痛さで下半身に突き刺さってくる。

ぐいと肩を押さえられて、佐江がひざまずく。

「あ……縛らないでください」

腕を背中にねじ上げられただけで、縛られると直感してしまう。

「口ごたえするのか？」

「……………」

股間に縄束を打ち込まれた激痛を思い出すと、佐江はうなだれるしかない。佐江の裸身にてきぱきと縄が巻きつけられて、昨日と同

じように乳房をくびり出された。そこで終わらず、腰にも縄が何重にも巻かれた。

チャリチャリチャリ……軽い金属音。振り返ると、天井から垂れた細い鎖を本郷が手繰っている。その隣から、先端にフックを吊るした太い鎖がゆっくり下がってくる。その下へ佐江は引き立てられ、腰と肩を縛った縄の端がまとめてフックに掛けられた。本郷が反対方向に細い鎖を手繰ると、佐江の身体がゆっくりと宙に上がっていく。

「ひいい……」

なにをされるかわからない恐怖に、佐江が細く悲鳴を漏らす。

見上げると、天井板があちこちで剥がされていた。剥き出しにされた太い梁に滑車やら機械仕掛やらが吊るされ、そこから縄や鎖が垂れている。

ゴトゴトという音に、佐江は下に目を向けた。大工に手伝わせて、本郷が三角形の材木を佐江の真下へ動かしているところだった。

「これは江戸時代よりもっと昔から、強情な囚人に使われていた拷問の道具だ。三角木馬という。名前のとおり、この背におまえを乗せてやる」

「厭ですっ……!!」

鋭角に尖った先端を跨がされればどうなるか、容易に想像がついた。

「好き嫌いはよくないな。それに、心配することはない。拷問の道具だが、本物と違つて鉋で三回だけ、慈悲を掛けてある」

言葉の意味はわからなかったが、考えている暇はない。チャリチャリチャリ……軽い鎖の音とともに、佐江の身体がじわじわと下がり始めた。

「厭っ、厭あ……赦してください。なぜ折檻されるんです？ それとも、昨日みたいに『試し』だとしても言うんですか？」

三角形の峰を両脚で踏んで、佐江が抗議した。股間に鋭利な峰を食い込まされる痛さは、想像できない。それよりも、大工たちの目の

前で股を開かされることへの羞恥が佐江を必死にさせていた。

「おまえは薪割りを怠けた。見ていないとも思ったのか？」

「あ……」

けっして怠けたのではない。

「だって……若松さんの奥様とか、柴田のご隠居さんとか……」

「言い訳は罪を重くするだけだぞ」

前後に踏まえている佐江の足を、本郷は本郷が左右に払った。

「ああ……！」

足が宙に浮いて、すとんと身体が一尺ほども落ちた。ぎゅっと胴が締め付けられたが、昨日と違って肩に大きな負担はかからなかった。

チャリチャリチャリ……佐江の身体がさらに沈んでいく。木馬の峰が股に接したところで、いったん鎖が止まった。本郷が片手を股間に伸ばして、花卉を左右に割り広げた。

「ひっ……」

くすぐったさと恥ずかしさで、佐江は息を呑んだ。が、無駄な抗議は諦めていた。いつそのこと、早く下ろしてほしかった。そうすれば、大工たちに奥の奥まではみられなくなる。

チャリ……チャリ……一寸刻みどころか一分刻みで、三角木馬の峰が佐江の割り広げられた花卉の中へ埋没していく。本郷が手をはなしても、もう花卉が閉じることにはなかった。軽い痛みをとまなう違和感が、はつきりとした痛みにも、切っ先を押しこまれる苦痛にも、そして股間を切り裂かれる激痛へと。鎖が軽く鳴るたびに変化していく。

「う……くう……痛い……痛い痛い……もう赦してください！」

佐江の声が切迫してくる。佐江を吊った太い鎖は、まだピンと張っている。本郷がまた鎖を手繰っても、佐江の身体が下がらなくなつた。体重がだんだん木馬へ移っていく。

「痛い痛い！ 厭あ……お願いです、赦して！」

一瞬の痛みなら、股間を打たれるほうが強いかもれない。しかし木馬の痛みは、跨がされているかぎり無限に続く。

「ぐうううう……」

佐江は前のめりになって、すこしでも体重を鎖にあずけようと試みた。が、髪をつかんで引き起こされた。ジャランと太い鎖がたるむ。

「ひいいいっ……！」

全体重が鋭い稜線に乗って、脳天まで鋭い痛みが走り抜けた。

佐江を吊っていたフックがはずされ、長い三つ編みが木馬の後ろから伸びる縄に結ばれた。佐江はのけぞった姿勢で、股間の秘裂の奥で体重を支えなければならなかった。すこしでも負担を減らそうとして、無意識のうちに太腿で木馬を締めつけていた。

「本来なら両脚に十貫ほども錘を吊るすのだ

が、最初だから勘弁してやる」

佐江の体重は十四貫ほど。目方が倍ほどにもなれば、その痛みがどうなるか。佐江は震えあがった。言いつけをきちんと守っているも、折檻をまぬがられない。薪割りで難癖をつけられて、佐江はそれを知った。

「お願いです。もう赦してください。これからは心を入れ替えて、一生懸命働きます。言いつけはきちんと守ります。けっして口ごたえなんかしません……」

頭ではわかっていても、激痛から逃れたい一心で、卑屈に哀願を繰り返してしまふ。

「その言葉を忘れるなよ」

びしゃんと尻を叩かれて、ぎりつと食い込んできた激痛に佐江は絶叫した。

「おとなしくしていれば、あと一時間だけで赦してやる」

「そんな……無理です」

「舌の根も乾かんうちから、もう不平か？」  
「いえ、そんなこと……一時間だけで赦して



くださって、ありがとうございます」

激痛と、自分の卑屈な態度が情けなくなつて、佐江は嗚咽した。

そんな佐江の様子に満足したか、本郷は煙草を取り出してマツチを擦った。うまそうに吸った煙を佐江の顔に吹きかけて咳き込ませ、その振動が股間につたわって悶えるさまを堪能してから出て行つた。

この間、大工たちは知らん顔。まるで日常茶飯の寸劇を見物しているような態度だった。「職人たちは、おまえを愉しませる仕掛をどんどん作ってくれているんだ。お礼を言つておけよ」

「あ、はい……皆さん、ありがとうございます」

「虐められている女から礼を言われたのは、これが初めてさあね」

棟梁が苦笑した。

のけぞりすぎて引っくり返らないようにと、本郷は佐江の首にも縄を巻いて、木馬の前側

へつなぎ止めた。佐江の身体は一定の角度で固定されて、痛みを分散させることもできなくなつた。

本郷が土蔵から出て行って、ひとり佐江が三角木馬の上に放置された。六人の大工たちは、佐江を助けようとも虐めようともしないのだから、いないも同然だつた。彼らの好奇の視線を気にする余裕は、すでに佐江にはない。

激痛に呻吟しながら、佐江は気をまぎらわそうと試みた。顔をあおむけていても、ちよつと首をひねれば土蔵の中は見渡せる。

キの字形の角材は、磔台だろうか。十字架だと足をそろえて磔にするが、あの形だと女の恥ずかしい部分を大開きで固定できる。いかにも本郷らしい趣味だ。

骨組だけの丸テーブルは、心棒の後ろに歯車仕掛と電動機が仕込まれている。放射状の木材に手枷らしい金具が付けてある。あそこに佐江を大の字に張り付けて、ぐるぐる回す

のだらうか。

物掛けに二枚ずつ吊られている板は、拘束のための机を体験させられた後では厭でも見当がついた。手足とか首とかを、あのくぼみで固定するのだらう。

床から生えた丸太や、長い棒が突き出た踏み台は、使い道が想像もつかなかった。どうせそのうちに、この三角木馬と同様、佐江自身の身体で知ることになるのだらう。

ますます絶望が深まり、股間の奥深くを切り裂く激痛が尖鋭に背骨を貫いた。

「ううう、うう……」

佐江の口からふたたび嗚咽が漏れ、まなじりからこぼれた涙が、強制的にあお向かされた顔を伝って耳朶に流れる。

「けどよ。これだけいっぺんにそろえるってのは、さすがに初めてだぜ」

「手間賃十倍、持ち込み材料二十倍。口止め料もいれりや、このお屋敷が建つぜ」

「金に飽かせて、やりたい放題だな」

大工たちの無駄話を聞いてみると、彼らは責め道具を作る玄人らしい。

（お父様の財産を食い散らかすなんて……）

しかも、その財産が自分を虐める道具に使われる。恐怖に加えて義憤もつのつた。

「あの娘だって、そこらの孤児院から引き取ったか、水揚げ前の女郎を買取ったか」

「どうかな。自分から飛び込んだのかもな。縛られる様子を見ただろ。うっとりしてたぜ」

ぎくつとした。彼らは、佐江がこの家のお嬢様だとは夢にも思っていないらしい。なぜか救われた思いになった佐枝だが。

縛られてうっとりしていただなんて……。

縛られてしまえば、なにをされても逆らえない。百叩きだ拷問だと脅されれば、縛られていなくても逆らえないのだけれど。それとこれとは違う。叩かれようと殺されようと、覚悟さえ決めれば抵抗できる。抵抗まで封じられると、生殺与奪の権を握られると、本郷に

従属させられたような気分になって、安心感というと奇妙だけれど、なにをされても仕方がないという諦めで腰が砕けて、じわあっと腰の中心から熱くなってくる……厭だ。あそこを蹴られたときの妙な感覚。あれにそっくりだ。

「違う、絶対に違う！」

佐江は、思わず声に出していた。

大工たちが振り返る。

「違うって、なにがだい？」

「縛られてうっとりなんて、絶対にしていません！」

大工たちはきよとんと顔を見合わせた。

「ああん……？」

「そういや、さっきそんな話をしてたっけ」

「なんだって、今になって言い返すんだよ？」

「あんがい、木馬の上でもうっとりしてたんじゃねえのか？」

大工たちが、どっと笑った。

言い返す気力も失せて、佐江は顔を上に向

けた。

(なにをされても我慢して……すこしでも虐められないようにするしか道はないんだわ)

従順にしていれば、いずれは自分に向けられる憎悪も弱まるだろう。それだけが、佐江に残された希望だった。女を虐めて性的な愉悦に耽る男(そして女)がいるなど、佐江には想像できるはずもなかった。

——激痛に呻吟しながら、大工たちの仕事ぶりと雑談とで、佐江はおよその時間経過を計った。もう十五分は経ったはず。あと十分くらい。半分が過ぎたのだから、きつと我慢できるはず。もう四十分は過ぎたかしら。もうすぐ……もうすぐ、本郷さんが来てくれるはず。そう思ってから実際に本郷が姿を現わすまで十分ほどの遅れはあったが、ともかく約束どおりに本郷は三角木馬から解放してくれた。

極限の苦痛と恐怖を味わった思いの佐江だが、彼女の被虐地獄はまだ一丁目の手前でし

かない。木馬の上でおとなしくしていたから秘裂は傷ついていなかった。錘を追加されたり、腰を揺すぶられたりしたら、きつと裂傷を負っていただろう。そういった物理的な過酷さよりもむしろ――闇に閉ざされて時間経過を知ることでもできず放置される恐怖を、まだ彼女は知らないでいる。

それはともかくとして。

縄をほどかれた佐江が言いつけられたのは、数分前まで自分が乗せられていた責め道具の清掃だった。見れば、白木の肌が太腿の形に脂汗で濡れている。峰のあたりは、はつきりと船形に粘っこい『汗』がにじんでいた。佐江はそれを濡れ雑巾で、とくに船形の部分は丹念に拭き取った。そうしているうちに、三角木馬の稜線は鋭く尖っているのではなく、一分（三ミリ）ほどの平面になっていることに気づいた。斜面と平面の境目も斜めに削られていた。鉋三回分の慈悲と本郷の言った意味を、佐江は理解した。とはいえ、それぞれ

の角はまだ鋭い。すこしでも丸めようとして、佐江は乾拭きの手に力を入れた。

素裸のまま自分の部屋へ連れ戻されて、佐江は椅子と机に拘束された。椅子にも枷が仕掛けられていて、直角に開脚された姿に固定された。縄束で叩かれて赤黒く腫れたままの尻が、クッションのない座面に悲鳴をあげた。そして三角木馬の稜線に痛めつけられた股間は、椅子に取り付けられた半円形の木材に新たな痛みを呼び起こされた。

「雑巾が足りなくなつたから、これで作つておきな」

机の上に、佐江の衣服が山のように積まれた。振袖をはじめとする訪問着から日常の着物、何本もの帯。冬物ツウピースに夏物ワンピース。父を見送ったときの鶯色のスーツもあった。見当たらないのは、ウール仕立のコートくらいだった。

これでは、佐江の着る服がなくなってしまう。まさか、つんつるてんの『お仕着せ』と



称する子供浴衣の残骸だけで一年を過ごさせ  
るつもりだろうか。いや、それよりも。一年  
後に帰国した父に、なんと説明するのだろうか。  
身体の傷は、半月もあれば消える。黙ってい  
るように写真で脅すこともできる。土蔵も、  
元の形に修復できる。けれど、着物は元に戻  
らない。また父の金を湯水のように使って、  
新品を買い揃えでもするのだろうか。

しかし、そういった疑問を口にする蛮勇は、  
縄束と三角木馬で打ち砕かれている。

「わかりました、オカアサマ」

佐江は自分に踏ん切りをつけるように、一  
番お気に入りだった驚色のスーツを手を取っ  
た。脇に置かれたラシヤ鉄で袖を切り落とし、  
一気に背中を切り開いた。そして布切れを長  
方形に切り取って二つに折ると、股間の痛み  
をこらえながら縫い始めた。

それを見届けて、ユキは満足そうに部屋か  
ら出て行った。

およそ雑巾にはふさわしくな生地を縫い終

えて。向こうへどけておいた残りの布を取ろうと身体を前へ傾けて。

「あ……」

椅子の突起が、あまり痛めつけられていない部分を圧迫して、昨夜に知り初めた妖しい感覚が、かすかに呼び覚まされたのだった。

佐江は、拘束された膝が許すかぎり腰を後ろへ引いた。息を吐いておなかをへこませて、上体は前へ傾ける。机に肘をつけて、身体から離れた場所で作業を再開した。

(こうしていれば、痛みが軽くなる)

尻が座面から浮いて、あまり叩かれていない太腿で体重を支えられる。それだけで佐江は満足した。腰を揺すって妖しい感覚を追い求めようとは、考えもしない。

スーツの上衣から四枚の雑巾を縫って、スカートにとりかかる。自分の手で自分の服を切り裂いていく。その悲しさと悔しさとで、佐江は何度目かの涙をこぼした。

股間の痛みも妖しい感覚もできるだけ意識

から追い出して、心の中の悲しみや不安からも目をそむけて、佐江は一心に自分の衣服を切り裂いては雑巾を縫っていった。

「おや。ずいぶんと墓が行ったわね。嫁に出しても恥ずかしくない手際だよ」

部屋が薄暗くなった頃、ユキが様子を見に来た。佐江を拘束から解放すると、先に食事をすませておくようにと言いつけた。これまでに比べると柔らかな、優しいとさえいえる物言いだった。

「利行が風呂から出たら、あたしたちが食事をして、それからおまえに本格的な花嫁修業をさせてやるよ」

不得要領な言葉だが、まさか花嫁修業で縛ったり叩いたりはされないだろう。

「ありがとうございます。よろしくご指導ください」

機嫌を損ねないよう、佐江もできるだけ丁寧な物言いをした。

返してもらった禪で、まだずきずき疼いて

いる股間を自分で痛めつけて。裾も肩口もほつれかけてきた子供浴衣を着付けて。佐江は台所へ行って、お膳を受け取った。女中部屋へ持って行って、ひとりで食べた。鯨の干物に蒲鉾とホウレン草のおひたし。女中の賄いとしては贅沢なほうだった。

お膳を台所へ下げると、風呂場へ行くように言われた。

「今夜は、トシちゃんの背中を流してやりな  
(厭だなあ……)」

それは、百叩きや三角木馬、あるいは水汲みや薪割りを厭だと思うのとは違う『厭』だった。以前から風呂を覗かれそうになっていた延長としての嫌悪感に過ぎなかった。母親や伯父を真似て、佐江に悪戯を仕掛けてくるのではないかと懸念したのだった。逆らえば告げ口されて、土蔵へ引き立てられる。身体を触られるくらいは我慢しようと、佐江は覚悟を決めた。

佐江の懸念は当たった。しかし、覚悟は足

りなかった。

だだっ広い浴室の隅で全裸の身を縮こめて  
いる佐江の顔先に、仁王立ちになった利行の  
魔羅が突きつけられた。まだ薄桃色のそれは  
垂直にそっくり返って腹に密着していた。

「伯父さんに聞いたぞ。チ●コを手洗いして  
くれるんだよな？」

（虎の威を借りて、いい気になって……）

脱衣所に洗濯物を探しに来たふりをしたと  
きは「なにか用なの？」と詰問しただけで飛  
んで逃げたくせに。外でゴソゴソ音がしたと  
きは桶に水を用意しておいて、角刈りの頭が  
窓の向こうに現われるやいなや、ぶっ掛けて  
やったら、派手にすっ転んだくせに。

弱気なくせに助平ったらしい利行が、本郷  
の真似をして傲慢に振舞っているなんて、滑  
稽でしかない。けれど。その男性器を手で洗  
わされるとなると、鼻で笑っている場合では  
なかった。

「それなら、椅子に座ってください」

「このまま洗ってくれよ」

腰全体を佐江の顔に押しつけてくる。

「わかりました。お言いつけのとおりにします」

佐江は顔をそむけて、利行の魔羅に両手を添えた。

(……………?)

父や本郷のそれとは違って、利行の逸物は子供と同じような姿をしていた。

「ちゃんと皮を剥いてあらえよな」

面食らったが、本郷の魔羅を手洗いさせられた経験が理解を助けた。先端に近いあたりを軽くつまんで根元へ押し下げると、赤黒い亀頭が顔を出した。

(うわ…………)

雁首のまわりを分厚く巻いた豆腐のような物の正体は、すでに知っていた。

「すみませんけど、こちらで洗わせてください」

湯が張ってある小さな湯舟のそばへ利行を

案内した。桶で湯を掛けながらスマグメを指の腹でこそげ取った。その作業が終わらないうちに。佐江の手の中で肉茎が小さく痙攣した。

「もういい！」

佐江を突き飛ばすと同時に、天を衝いた魔羅の先端からおびただしい量の白濁が噴出した。ベチベチツと音を立てて白濁が床に落ちてきた。

「あーあ」

利行が天井を睨んで嘆いた。白濁の一部が、そこにこびりついていた。利行が蛇口にホースをつないで、天井へ向けて放水した。

「あとでよく乾かさないと、カビになる。そのときは、僕がお仕置きをしてやる」

「申し訳ありません。でも、どうしてあんなふうに……」

本郷のときは、もっと強く何分もしごいてから射精が起きた。

「うるさい！ 人それぞれだ！」

怒鳴りつけて、掛け湯もろくにせず利行は湯舟に浸かった。それから、猫撫で声で。

「佐江もはいつておいで」

(やっぱり……)

大浴槽を使った昨夜、実は半ば覚悟をしていた。あっさり追い出されて、助かったと思うと同時に、拍子抜けしたのも事実だ。

「湯舟が小さいから、二人では窮屈じゃないですか？」

やんわりと断わったつもりだった。

「佐江が僕の上に座れば大丈夫だ」

利行に気づかれないよう小さく溜め息をついて、佐江は湯舟に近寄った。利行に当てつけるように何度も掛け湯をしてから、湯舟をまたいだ。利行は両脚をそろえて伸ばしている。それを跨いで、利行に背を向けて腰を落とした。やはり、心臓がバクバクする。

佐江の尻が、利行の腿に密着する。と——萎びていた利行の肉棒が、むくむくっと鎌首をもたげた。先程よりは軟らかいが、明らか



に平常とは違う大きさになった。

「ははは。佐江の股からチ●コが生えたね」

佐江の肩越しに湯の中を覗いて、利行がからかった。

「……………」

なんと答えてよいかわからず、佐江は両手で顔をおおった。その腋の下から、利行の両手が乳房をつかんだ。

「ひゃっ……」

その手を引きはがそうとして、脳裡に三角木馬が浮かんた。利行の手に掌を重ねた形で、佐江の手が止まる。

利行の手が動き始めた。もぎゅもぎゅと、乳房が変形するほど強く揉み立てる。佐江は手をはなすきっかけを失い、利行の手を自分の乳房に押しつける形になった。

「痛い……もっと、やさしく揉んでください」

昨日は縄束でぶたれて今朝もユキに竹尺で叩かれた乳房は、まだ腫れていた。強く揉まれれば痛いだけだ。

「そうか。では、望みどおりにしてやろう。僕は伯父貴と違って、女の子には優しいんだ」

利行の掌が双つの乳房をそろつと撫でた。

「あ……」

佐江が声を漏らしたのは、掌の動きに反応したからではない。さっきの言葉は、自分から愛撫をおねだりしたように聞こえると気づいたからだだった。佐江の顔に、ぱあつと血の色が浮かんだ。

しばらく乳房を弄ぶと利行は自分の掌をはずして、佐江に乳房を握らせた。

「そのまま、自分で揉んでいろよ。わかっているとと思うけど、これは命令だからね」

佐江は悲しそうな顔をして佐江は、痛みを与えないようにそつと自分の乳房を揉んだ。

利行の両手は湯の中へ消えて。佐江の尻たぶをつかんだ。

「そこも、優しくしてください」

乳房よりもひどく腫れている尻を気づかずに、佐江は甘えた声を装った。声だけでなく、

わずかに腰を浮かせて利行の手を迎え入れた。  
「あ……はあ」

傷跡をそつと撫でられると、すこしくすぐったかった。それは、けつして不快ではなかった。

佐江の股間で、肉棒が硬さを増した。秘裂に胴部がめり込むほど反りかえった。

「厭あ……」

苦痛がまったくないどころか、妖しい疼きが腰に生じて、佐江は戸惑いの声をあげた。  
なまめかしい声を聞かされて、利行は意馬心猿。両手を佐江の尻からはなして、股間を襲った。左手でますます秘裂に押しつけながら、右手は秘裂の頂点をまさぐる。

「ひいい……」

淫核を探り当てられて、佐江の悲鳴が鼻に抜けた。

「ひゃああっ……ああん……」

つるんと剥かれて、によるんと押し戻される。そのたびに、佐江は甘く啼いた。

利行の指の動きはぎこちなく、乱暴でもあった。土蔵で吊るされていたときに、ちよつとだけ本郷に颯られたときの凄まじい感覚に比べれば、佐江の快感もわずかなものだった。もしも——たとえば昨夜。本格的に快感を味わわされていたら、利行の稚拙な指遣いをもどかしく感じ、腹違いの兄を馬鹿にしたかもしれない。

ぎこちない刺激から生まれるかすかな快感。しかしそれは、昨日の昼までは性器への刺激とは無縁だった少女にとっては、新鮮で羞恥きわまる快感だった。

「ひいい……ああつ……やああ！」

ドンドンと、浴室の扉が叩かれた。

ぎくつと、佐江は我に還った。

「うるさいよ。兄妹で乳繰り合うなんざ、ご近所に知られたらどうするつもりだい」

ユキの声は、本気で怒ってはいない。けれど、浴室の外は裏庭だ。夜は声が遠くまで通る。

「オニイサマ、ごめんなさい。わたし、先に  
出ます」

#### 四…閨房修行

湯舟から飛び出して、身体を拭くのもそこそこに脱衣所へ駆け込んだ。

勝手な行動をしたと、あとで利行から叱られるのではないかと恐れながら。アリバイ作りの心境で、佐江はおそろおそろユキのところへ行った。髪は入浴の前に三つ編みをほどこいて頭の上に巻いた、そのまま。

「先程は申し訳ありませんでした。なにか御用はないでしょうか？」

「わかればいいのさ。座敷へ行って、素っ裸で待ってな」

「お座敷、ですか？」

「そう言ったはずだよ。耳がないのかい？」

「すみません。わたしなんかがお座敷へ上がっていいのかと思ったものですから」

ユキの顔が陰しくなった。

(しまった……)

女中や下女が座敷へ立ち入るのは、お茶を運ぶときくらいのものだ。それを素直に言っただけだが、ユキには皮肉に聞こえたのだと、佐江は悟った。

「……失礼します」

居間から逃げ出して、奥廊下を横切つて表廊下伝いに座敷までひと息に歩いた。

「ええっ……？」

座敷には夜具が延べてあつた。狭い庶民の家ならともかく。客間が空いているのに座敷にお客を泊めるのは、相手に対しても失礼というものだ。

(でも、お客なんて……)

疑問はそこで胸にしまつて。佐江は言いつけられたとおり全裸になつた。昨日からこつち、佐江には想像もできない事柄がつぎつぎと起きた。あれこれ考えても追いつかない。そんな暇があつたら、折檻を逃れる算段をしよう。

佐江は下座に正座した。脱いだ破れ浴衣と

禪は、きちんとたたんで横へ置いた。

十五分ほどもして。屋敷にいる全員——本郷、ユキ、利行、正子の四人が佐江を囲んだ。

「これから、花嫁修業の肝心なところを实地で教えてやる」

なにをするかわかるかと問われて、佐江は首を横に振った。見当もつかなかった。

「いくら気立てが良くて料理がうまくても、床下手じゃあ亭主に愛想を尽かされるよ」

「つまり、閨での構合いを教えると云つてゐるんだ」

ひいっと、佐江は魂消た声をあげた。自分は今、目の前に男に犯されようとしている。とっさには言葉が出てこなかった。

縛られて叩かれて。恥ずかしいところまで蹴られて。家事に名を借りた意地悪をされて。風呂場で破廉恥な真似をさせられて。それでも、まさか犯されるとは夢にも思っていなかった。いくら血のつながりはなくても、本郷は伯父ではないか。



「本末転倒です！」

あれこれの想念の末に、佐江はその言葉に行き着いた。

「なんだと？ 女学校の才媛は、この期に及んでも難しいことを言いやがる」

「だって、そうじゃありませんか」

佐江は両手で身体を隠しながら本郷を睨みすえた。睨み返されても、ひるんではいられない。

「そんなことをされたら、お嫁にいけないります！ こんな花嫁修業なんて、聞いたこともありません！」

「それじゃ、お妾修行にしようぜ」  
「厭ですっ！」

佐江は立ち上がろうとしたが、四人に囲まれていた。逃げられない。いや、逃げたところで捕まって引きずり戻されるだけだ。

「お願いです。これだけは勘弁してください。ほかのことだったら、なんでもします。なにをされても恨みません。百叩きでも三角木馬

でも、ほかのどんなお仕置きでもして下さ  
い……」

佐江は身を折って泣き崩れた。どうせ力  
なくで犯されるだろう。その前に……舌を噛み  
切って死んでやる。本気で、そう思っていた。

「佐江の言い分にも道理はあるわねえ」

意外にも、もっとも佐江を憎んでいるはず  
のユキの口から、同情の言葉が漏れた。

「男を悦ばせるのは、なにも股倉だけじゃな  
い。そうでしょ、兄ちゃん？」

「お、おい。余計なことは……」

本郷が慌ててユキをさえぎる。台本にない  
科白だったようだ。

「つまり、女には穴が三つあるってことだろ  
」  
利行がしたり顔で言う。

(……………！)

佐江は、いっそう戦慄した。腹違いの兄も  
男には違いないと気づいたのだ。

「ふん。ロマ●コとか尻マ●コとも言うな」

「それで勘弁してやっちゃどうだい？」

佐江には、三人の掛け合いがさっぱり理解できない。

「よかったね、佐江ちゃん」

正子がしゃしゃり出たのは、三人への媚びだろう。

「生娘のままでもいいってさ。そのかわり、お口とお尻の穴にオチ●コを嵌めてもらえるわよ」

「厭あああーっ！」

叫んで、佐江は身体を跳ね起こした。ユキと正子のあいだをすり抜けようとした。

「おっと……」

正子が正面に立ちはだかつて、佐江を突き飛ばした。尻餅をついたところを、本郷にねじ伏せられた。

「厭あ！ 厭、厭、厭……赦して、赦してえ！」

半狂乱でもがく佐江。頭の上で巻いてピンで留めただけの黒髪が崩れて、背中に散った。

「やかましい！」

佐江の腕が背中に高々とねじ上げられた。

「ひいひい……縛らないで！」

哀願もむなしく、手首に縄が巻きつく。

「くそ、髪が邪魔だ。トシ、手伝え」

利行が髪の根元を束ねて横へ引つ張った。

「痛い……！」

それでも必死にかぶりを振ってもがき続ける佐江だったが、胸乳に縄を巻かれると、抵抗が弱まった。

「厭、厭……縛らないで、犯さないでください。厭よ……一生、恨みます」

「ふふん。女にしか味わえない法悦境を教えやるんだ。じきに感謝するようになるさ」

「誰が、そんな……ああ……くうう」

下乳も絞られると、佐江はもがくのをやめた。囚われの境遇を噛み締めるように、がっくりとうなだれて横座りになり、縄を足されるがままになった。

上半身への縄掛けが終わると、佐江の膝頭が左右に割られた。

「厭あ……恥ずかしい！」

佐江は厭々をしたが、なにがなんでも抵抗するといったふうではなかった。本郷が佐江の膝頭を押さえつけているあいだに、利行が足首を引き上げて太腿の付根に乗せた。結跏趺坐——座禅のときの本格的な座り方だった。手を使わなくては、簡単には胡坐をほどけない。それなのに、本郷は重なった脛まで縄で縛った。

「へへへ。正面からでも、ぱっくりご開帳が見えるぜ」

からかわれても聞き流していたのは、佐江には意味がわからなかったのかもしれない。

「男女の交際ってやつは、まずは接吻からだな」

本郷の言葉が終わらないうちに、利行はズボンをずり下げて佐江の前に仁王立ちになった。越中禪の前が山のように盛り上がり、横からは金玉まで覗ける。その布切れもかなくり捨てると、佐江の顔の高さに腰を持ってくる。垂直に聳え立っている肉棒を苦勞して押

し下げて、佐江の唇に近づける。

「ほら、あーん」

佐江は顔をそむけたが、本郷に顎をつかまれて正面を向かされた。

「どうにも聞き分けの悪い子だな。こいつの味を思い出させてやろうか？」

本郷がポケットからワニグリップを取り出して、佐江の目の前で開閉させた。

「ひぐっ……」

佐江は息を詰まらせ、それからわずかに唇を開いた。

「もっと、あーんして」

唇に亀頭の先を押しつけられた。風呂で洗ったのに、異臭がこびり付いている。

佐江は目を閉じて息を止め、口を半開きにした。そこへ、グボツと灼けた鉄棒を突っ込まれた。というのが、佐江の感覚だった。

「歯を立てるなよ。噛みでもしたら、サネにクリップだ。サエのサネにか、こりゃあ傑作だ」

ひとり悦にいる本郷。利行は、それどころではない。●五歳になった祝いに遊郭で筆下ろしだけはすませているが、ほかには経験がない。おっぱいをきつくつかむとか、ビラばかりいじくってないでさっさと挿れるとか、年増女に指図されることもなく、好き勝手に女体を弄べる機会を得て、猛りに猛っていた。利行は佐江の後頭部を両手でつかんで、ぐいと腰を突き出した。

「むぶうう……」

口の中どころか喉まで肉棒を突き挿れられて、佐江は目を白黒させた。吐き気がこみあげてきて、目に涙がにじんだ。

「腰の動きに合わせて身体を揺すれ。押されたら押し返せ」

利行の手に添えて頭をつかみ、本郷がサエを揺する。

「むぶ、ぶぶ、ぐぶうう……」

喉を突き破られるのではないかと思うほど、奥まで飲み込まされた。鼻に淫毛が押しつけ

られ、金玉がピタピタと顎を叩いた。

「……………！」

佐江の口の中で肉棒が太さを増して小刻みに痙攣した。喉の奥に滾りが叩きつけられ、鼻腔にいがらつぽい異臭があふれる。

「ぶべえ……」

いっそうの吐き気に襲われたが、肉棒はまだ口の中にとどまっている。利行が指で根元をしごきながら、ゆっくりと肉棒を引き抜いた。粘っこい汁が、佐江の舌になすりつけられる。

「げええ……」

吐き出そうとしたが、本郷に掌で口をふさがれた。

「飲め。せつかく出してもらった子種だ、吐き捨てちゃバチが当たるぜ。お天道様が当てなくても、俺が当ててやる」

電灯に照らされた拷問道具の数々が、頭をよぎった。佐江は吐き気と戦いながら、口にあふれる粘っこい異臭を飲み下した。



「初めてにしては上出来だぞ」

本郷が頭を押さえていた手で、佐江の髪をくしゃくしゃとつかんだ。

「トシ。おまえは落第だ。もつとゆつくり、女にしゃぶらせろ。出そうになつたら休むとか、工夫をしろ」

俺が手本を見せてやる。そう言うと、佐江の身体を布団の上まで抱えて行き、そこへ押し倒した。結跏趺坐はそのままなので、佐江は膝頭を支点にして前へ倒され、両肩が布団についた。

高々と尻を突き出した姿にされて、佐江は羞恥に身悶えた。後ろから見れば、ほんとうになにもかもが晒け出されているはずだ。

利行の嘆声が、佐江の予測を肯定していた。佐江の尻を見下ろしながら、本郷がゆつくりとズボンを脱ぎ六尺禪をはずす。

「いくら可愛い姪のケツ穴でも、生で掘るのは願い下げだぜ」

頭を横にねじまげられた佐江の目の前で、

本郷は小さなブリキ缶から輪ゴムのような物を取り出して、魔羅の先端にかぶせた。

「ふうん……可愛い妹なら、生でも平気なんだ」

「昔のことじゃないか。もう、虐めないでくれよ」

はからずも、兄妹の秘められた過去的一端が明かされたのだが、それを心に留めている余裕など佐江にはない。

（お尻の穴に入れるなんて……無理よ！ 裂けちゃう！）

恐怖に震えあがりながらも、実は大丈夫かもしれないと思う心もあった。本郷は百叩きと脅すが、今のところ実行はしていない。佐江を傷つけるのが目的なら、三角木馬の頂点を丸めたりはしないだろう。生かさず殺さず——ならば、肛門に裂傷を負わせたりはしないだろうと、ぎりぎりのところで本郷を信頼する気持ち芽生えかけていた。

「ひゃあっ……」

肛門に冷たい感触を受けて、佐江は悲鳴をあげた。ぬちゃつぬちゃつと、その冷たい異物が塗り込められる。正体はわからないが、潤滑を良くする目的だろう。

「舶来のバターとはねえ。下女にはもったいなさ過ぎるよ。睡でじゅうぶんなものをさ。やっぱり妹よりは、実の……」

「黙れ！」

本郷がドスの利いた声で妹の言葉を封じた。「今度それを言ったら……」

そこで、ふっと声をやわらげた。

「二十年前と同じ目にあわせるぜ」

「おお、嬉しい。はい、どうぞ」

ユキが手首を重ねて、本郷に背中を向けた。

「……いづれな」

それきり、本郷は取り合わない。バターを佐江の肛門に塗りこめ、入念に襲を揉みほぐした。

佐江にとって、肛門を襲られるのはひどく恥ずかしいことだったが、それほど不快では

なかつた。むしろ、秘裂の頂点をさわられるのとは異質の、安らぐような快感があつた。お通じがすんなりあつたときの気持ちよさと似ていた。

「これくらいで、よかろう。佐江……」

「は、はい」

生理的な心地よさに心を奪われていた佐江は、不意に名前を呼ばれて狼狽した。いよいよ、恥辱の瞬間が訪れるのだと覚悟した。

「いや、ちよつと待て……」

本郷は自分が萎えかけているのに気づいて、右手でしごいた。たちまち怒張が甦る。

「ケツから力を抜け——と言つても、無理か。大きく口を開けて、ゆっくり深呼吸しろ。吸つて……吐いて。吸つて……吐いて」

わけがわからないまま、本郷の言葉に従う佐江。三度目に息を吐き出し始めたとき。

「あがあっ……!!」

今度こそ、真っ赤に焼けた鉄棒を突き挿れられたような衝撃。痛いというよりも、無理

やりに拡張される引き攣れのような感覚。佐江は息を詰まらせ、後ろ手に縛られた手をぎゅつと握り締めた。

「深呼吸を続ける。ほら、吐いて……もっと吐いて」

言いながら、本郷は肉棒を腸の奥深くへ押し進める。

「よし、息を吸って……」

じわつと抜きにかかる。

「じきに馴れる。また、吐いて……」

佐江の深呼吸に合わせて、本郷がゆつくりと挿挿を始めた。

「本気で妬けるわね。もつと乱暴に、カシガシ突いてやりなよ」

およそ女性とは思えない直截的な言い方で、ユキが煽った。

「うるせえな。年の功ってやつだ。●五のときと同じじゃねえんだよ」

言いながらも、腰の動きが大きく早くなる。

「あひっ……ひっ、ひっ、ひっ……」

佐江が途切れ途切れの悲鳴をあげる。しかし表情からすると、それほどの苦痛は感じていないらしい。

それは、本郷にもわかったようだ。浅くせわしない腰の動きをいったん止めると、ずぶうっと奥までゆっくりと貫いた。

「はああ……」

息を吐いて苦痛を逃がそうとする佐江。

ずぶう、ずぶうと、何度か深く貫いてから。

それまでは膝立ちで腰だけを使い、佐江の身体に触れていなかった本郷が、背中に覆いかぶさってきた。

「きついかな？」

耳元に囁かれて、佐江は横にねじ曲げられた首をこくんとうなずかせた。

「すこしばかり楽にしてやるぜ」

本郷の右手が股間に差し入れられた。茂みを掻き分けて淫核を探り当て、包皮の上から指の腹で転がした。

「ひゃんっ……くうう……」

たちまち腰の奥に滾りが生じて、苦痛と快感が緋い交ぜになった。

淫核への愛撫を続けながら、本郷が腰を動かした。始めは、

ずぶう……ずん、ずん、ずん。強弱浅深を交えて、それに応じて淫核への愛撫もメリハリをつける。

「ああっ……そんな……やだ……あうう、あん、あん」

本郷の動きに呼応して佐江がこぼす呻きが、だんだんと甘くなっていく。腰の奥の滾りが、蜜となって花芯から一滴二滴と太腿に伝わる。膣を使わない構合いではあるが、佐江は性の悦びをはつきりと知ったのだった。

本郷は左手も佐江の股間に差し入れた。中指を立てて、秘裂の中を探る。

「厭っ、そこは……」

痛みはごく軽かったが、どこを穿たれたかはわかった。

「心配するな。処女膜までは破らんさ。ちよ

いと味見しただけだ」

痛みは消えて。くりつと包皮をめくられた。中の粘膜に包まれた突起を、指の腹がかすめる。

「あひやあつ……ああん」

佐江の甲高い悲鳴は、そのまま快感の大きさを示していた。

「くはあ……」

これまでになく勢いよく深くまで貫かれて、佐江は大きく息を吐いた。が、苦しげなふうではなかった。

「ああん……はあ、はあ、ふうう……ひやああつ、あん、あん」

佐江の甘い悲鳴が次第に切迫していく。佐江は小高い丘に追い上げられようとしていた。が、その寸前で。腸の奥に脈動を感じた。そうして、丘の手前で放り出されてしまった。

もちろん、まだ逝くという感覚を知らない佐江は、中途半端に放り出されたことを恨んだりはしなかった。自分を虐めている男の手



で、これほどの快感を引き出されことを不思議に思っていた。と同時に。これで今夜は解放されるのだと直感していた。

佐江の直感は、半分だけ当たっていた。

花嫁修業の続きは明日の晩だと告げて、それから本郷は意地悪く嗤った。

「つぎは、お仕置きの時間だ」

(……………!)

座禅転がしにざれたまま、幼い性感の余韻に浸っていた佐江は、絶望という現実に引き戻された。

「はい……お願いします」

犯されそうになつた佐江が抵抗したのは、本郷たちの理屈では折檻に値するのだろう。

おとなしく責められて、罰を増やされないようにするしかないと、佐江は悟っていた。

結跏趺坐をとかれて、さらに上半身の縄もほどかれた。磔にでもされるのだろうかとかと怯えたが、佐江が連れて行かれたのは意外にも二階だった。ユキも利行も、正子までがつい

て来た。

硬いスノコだけの寝台にあお向けに寝かされて、鉄枷で大の字に固定された。

「最後の方は実に素直で、花嫁修業の態度も積極的だったから、お仕置きは軽いものにしてやる」

「はい、ありがとうございます」

機嫌を損ねないよう、佐江は必死に媚びた。しかし、卑屈な努力は無駄だった。本郷がポケットから取り出したのは、三つのワニグチクリップだった。

「ひいっ……！」

佐江の背中に戦慄が走った。けれど、短い悲鳴をあげただけで、抗議はしなかった。

「もう、夜も遅い。大声を出されたら近所迷惑だ。猿轡がほしいか？」

そこに罾がないか、佐江は必死に考えた。

「猿轡無しで静かにしていたら、昨日みたいに少なくしていただけますか？」

百叩きの残り八十発を股間への一発（実際

には三発）で赦してもらったことを、佐江は  
思い出していた。

「厚かましい子だな。が、それも一興か。声  
を出さなかったら一時間で赦してやる。出し  
たら、あらためて猿轡で明日の朝までだ」

どうあっても、股間の突起へのワニグチク  
リップは赦してもらえそうもない。それでも、  
一時間と一晚とでは大違いだ。

「……我慢します」

そうかい——と、本郷は無雑作に左乳首を  
つまんだ。

パチン。音を立てて、クリップが乳首を嘯  
んだ。

「あ………!!」

バネの勢いにまかせて噛みついたワニグチ  
クリップの激痛は、昨日の比ではなかった。  
佐江は悲鳴の形に口を開けたまま、三十秒ほ  
ども硬直していた。硬直がとけると、右の乳  
首にも同様に音を立ててクリップが噛みつい  
た。再びの硬直。気がつけば、全身から汗が

嘔き出ししていた。

「さて、三つ目だ。我慢できるかな？」

本郷が身体の位置をずらして、佐江の股間に顔を近づける。

つるんと包皮を剥かれる感触。

(ひどい……ひど過ぎる！)

皮の上からなら、まだしも。傷つきやすい粘膜にギザギザの金属の嘴をじかに噛まされようとしている。

首まで枷で固定されているから、頭を起こしてそこを見ることもできない。佐江は歯を食い縛ってぎゅつと固く目を閉じ、息を止めて恐怖の瞬間にそなえた。

「く……」

かすかに息を漏らしたのは、剥き出しの粘膜を冷たい金属で撫でられたからだだった。二度三度と、突起を金属に撫でられたり軽く叩かれたり。猫が鼠を躡るような真似はしないでくださいと抗議もできない。

「そうそう、明日の朝だが……」

本郷が誰にもなく話しかけて、佐江の緊張が弛んだ瞬間。

パツチン。ひときわ大きな音が響いた。

「ぎゃわんっ……!!」

それまでの努力もむなしく、佐江は獣のように吼えた。真っ赤な衝撃が突起の頂点から背骨を通って脳天に突き抜けて——佐江は、そのまま気を失った。

——アンモニアの刺激臭にむせて、佐江は意識を取り戻した。正子の顔が覗き込んでいた。

「最後に声を出したから、お仕置きは朝まで続けるってさ」

「……………」

意識がはつきりするにつれて、耐え難い痛みが三点から突き刺さってくる。どうせなら、朝まで気絶したま放っておいてほしかった。

「だけど、あたいは味方だからね。今はずしてあげる」

「でも……見つかったら、もっと罰を受ける

から」

明け方に付けなおしてやるよと、正子が請け合った。

「旦那様も無茶をしなさる。素直にお尻を差し出して、ヨガツてまで見せたのにね。女の敏感な場所を、こんな残酷な道具で挟んで。血が止まって真っ白になってる」

正子が無雑作に淫核からワニグチクリップをはずした。

「くうう……」

血流が甦ったあとの疼きは、昨日の乳首とは比べ物にならなかつた。

「うわ、ギザギザの跡がついて、血が出てる。消毒をしなくちゃ」

準備周到に持ってきていた救急箱から、正子は脱脂綿とアルコールを取り出した。

「沁みるけど、大声を出しちゃ駄目よ。二つ向こうでは利行様が寝てらっしゃるんだから」

アルコールを浸した脱脂綿を指でつまんで、

正子は眼鏡の汚れを拭き取るような調子でゴシゴシこすった。

「くあああ……お願い、もっとそつとしてください」

「親切でしてやってるのに、あれこれ注文をつけるのかい？」

正子が本性を現わして、冷ややかに言う。

「ごめんなさい。そういうつもりじゃなかったんです」

ふんと鼻で答えて、正子はいっそう乱暴にこすった。佐江は歯を食い縛って、新手の拷問に耐えようとした。

そうだ、忘れてたわねと、正子の手が乳首に伸びた。乳首も同じように血がにじんでいく。いそいそと、正子が消毒に取り掛かる。

消毒に名を借りた虐めが終わって。正子が寝台に上がってきた。

「朋輩は相身互い身。眠いのをこらえて助けに来たげたんだから、お礼のひとつもしてほしいわね」

「ありがとうございます。とても助かりました。入り用な物がありましたら、なんでも差し上げます」

「お嬢様に恵んでいただきたくて、危ない橋を渡ったんじゃないよ」

見つかれば自分も折檻されるかもしれないのに、佐江が可愛そうだから助けに来たんじやないか。あたしが身体を張ったんだから、あんたも身体を張りな。

「では、どうすればよろしいの？」

「簡単なことさ」

正子は寝巻の裾をからげて尻をむき出しにすると、佐江の顔をまたいだ。

「旦那様は口マ●コとかおっしやってたけど、舌チ●コってのもあるんだよ」

腰を落として、佐江の口に股間を押しつけた。

「さあ、ペロペロするんだよ。女同士だ、どこをどうすれば気持ち良くなるかくらい、わかるだろ」



男性とは違う、磯の香に腐りかけの牛乳を混ぜたような強烈な臭い。自分のそこも、こんな悪臭を放っているのだろうか、そっちのほうが気になった。

「舐めろったらあ」

ぐっと腰を沈めて声を封じてから、正子は淫核を剥き出しにして、はずしたばかりのワニグチクリップを噛ませた。

「ぐぶううーっ！」

「あたいは、旦那様みたく優しくないよ」  
ぐりっぐりっくとクリップをひねった。

「ぶふうーっ！」

佐江は全身を拘束している鉄枷の中で身悶えた。ふさがれた悲鳴が、正子の股間を震わせる。

「ううっ……いい。凄く感じちゃうよ」

ぎりっとクリップを反対へひねられて、佐江はまた悲鳴にならない息を盛大に吐き出した。それが、正子の股間を直撃する。

「あはあっ……これ、なんて言えばいいんだ

ろ。舌チ●ユより気持ちいい」

正子は腰を揺すって息の当たる位置を調節しながら、しつこくワニグチクリップをひねった。ひねるだけでなく、いったん緩めておいて、パチンと弾けさせた。

「びぎいいいいっ!!」

「いいわああ……」

正子はたしかに性感を得ているだろうが、それ以上に。新しく発見した遊びに得意満面。しかも、虐めている相手は昨日まではお嬢様としてかشيずいてきた少女。同性を虐めて愉しむという悪癖に染まった女にとって、これ以上の愉悦はなかった。

虐められる佐江にとつては、たまったものではない。これに比べれば、本郷の折檻もユキのいびりも、ずいぶんと抑制されていたとさえ思えた。このままでは突起を千切り取られてしまう——本気で怯えた。

正子がまた位置を変えようとして尻を浮かせた瞬間、佐江はおもいきり首をひねって股

間から口をはずした。

「待ってください。舌チ●コというのを教えてください。わたし、一生懸命にやります！」

悲鳴混じりに叫ばれて、正子はすこし正気を取り戻したようだった。佐江の実核は血にまみれて、粘膜が剥がれかけている箇所さえあった。

「もういいよ」

正子はおどおどした様子で、今度はていねいに佐江の淫核を消毒して血止めらしい軟膏も塗った。朝になつてもワニグチクリップを付けなおさなくてすむよう、あたしから旦那様にお願ひしてあげる。恩着せがましく言って、そそくさと部屋を出て行った。

南京錠の掛かる音を聞いて、佐江は真相を悟ったと思った。最初から鍵が開いていたのなら、そのままにするはずだ。つまり正子は、鍵を開けてはいつて来たということになる。

鍵を持っているのは本郷だ。ユキも持っているかもしれない。そのどちらかから鍵を預か

ったということは——正子はグルだったのだ。  
「陰険だわ……」

淫核の激痛に圧倒されながら、それでも指弾しなければ気がすまなかった。こんな茶番劇なんかよして、お仕置きだの花嫁修業だの理屈をつけずに。土蔵に閉じ込めて、死ぬまで折檻すればいいじゃないの。好きなだけ犯せばいいじゃないの。

ずきんと、股間の激痛が脳天を貫く。

(あと一年……たった二日で、もう身も心もボロボロ。耐えられるだろうか……?)

父の帰国という希望にすがって、佐江は自棄的な考えを捨てた。身体を自由を奪われて三角木馬に乗せられれば、とても耐えられない激痛を耐えるしなくなる。同じことだと、佐江は自分を励ました。耐えられなくても、生きてさえいれば日は過ぎていく。

そう決心して心を落ち着かせると。眠るといふよりは失神のように意識が薄れていった。

翌朝。起こしに来たのは利行だった。

「昨日、あれから伯父貴と相談してさ。佐江の口マ●コの教育係は僕に決まったからね」

数学を教えてやるとでも言った気軽な口ぶりを装っていたが、声が震えていた。

「そのうち、伯父貴が試験をするって。合格できなければ、僕の恥だからね」

これから毎朝レッスンだと、聞きかじりの英語を使って宣告する。佐江の枷を解放して、部屋の真ん中で腰に手を当てて仁王立ち。いきり立ってはいいても、色といい形といい少年らしさの残る肉棒を誇示している。

佐江は溜め息を飲み込んで、利行の前に膝立ちになった。この人を腹違いの兄だとか、気弱な少年だとか内心で侮ってはいけない。佐江は自分に言い聞かせた。彼の機嫌を損ねれば、それは本郷を怒らせるのと同じことなのだ。

「それでは失礼します」

一昨日の風呂場での出来事を思い返しなが

ら、佐江は利行の肉棒を右手でつかんだ。にゆるっと包皮を剥いて、ひときわ尿の臭いが残るそれを口に含んだ。左手で金玉を揉みながら、ゆっくりと頭を前後に動かした。速くすれば射精をうながす。早々の射精は男の自尊心を傷つけるらしいと、すでに佐江は気づいていた。

「舌を使えよ。半分くらいのところを唇で啜えて、雁首を舌で舐めるんだ」

「……？」

上目づかいに、佐江は利行の顔をうかがった。

利行も馬鹿ではない。●五歳の少女が性の知識を持ち合わせていないことは承知している。

「チンポの剥けた根元が、松茸みたいな筈になってるだろ。その裏側のくびれた部分だ」

噛んで含めるように教えた。

「べろべろじゃない。舌の先で、ちろちろ…

…ううっ、そうだ。うまいぞ」

言いながら、すぼんと佐江の唇を鳴らして  
抜去した。暴発寸前だったのだろう。

「それとな。鈴口——小便の出る穴だ。ここ  
を舌の先で割るようにして舐めてみる」

佐江は右手で茎膣を握って伸び上がった。  
真上から見下ろすと、のっぺら坊の中心にあ  
る穴は、まるで一つ目小僧のように見えた。  
いや、握る力と向きを変えるとひしやげたり  
伸びたり。なにかを話しかけられているよう  
にも見えた。

その目だか口だかに、佐江は舌先を押しつ  
けた。塩辛い味がした。それはおそらく、起  
きてすぐに放尿した名残だろう。けれど、不  
潔だとは感じなかった。佐江自身も、このレ  
ッスンに興味を持ち始めていたのかもしれない。  
い。あるいは、その気になれば（あとで折檻  
はされるかもしれないけれど）いつでもこの  
少年を暴発させてやれるという、自分が優位  
に立っている錯覚があったのかもしれない。  
「それから——いや、なんでもない。突っ込

むぞ」

もっといろいろな技巧を教えようとしたの  
だろうが、女性経験に乏しい少年はおのれの  
欲望を抑えられなかった。佐江の口腔深くま  
で怒張を押し込むと、頭をつかんで乱暴に揺  
すった。性に無知なだけに、そして元来が聡  
明なだけに、少女は海綿のように性の技術を  
吸収していた。むしろ自分から頭を前後に振  
りたて、歯を立てないように唇で巻き込んで、  
ちろちろと肉棒を舐めた。

「出すぞ……！」

びゅくびゅくつと肉棒が痙攣して、佐江の  
喉に青臭い液体をぶちまける。佐江はいつた  
んそれを舌の上に集めて。龟头だけを啜えて  
口の中を自由にして、ごくんと飲み干した。

「まだ終わりじゃないぞ。太いストローで飲  
む要領で、チンポの中の精液を吸い取れ」

ずぞぞーっ……いびつなストローは唇との  
あいだに隙間ができて、佐江が吸い込むと卑  
猥な音を立てた。口の中に吸い出された、少



量だがいっそうどろっとした液を、佐江は無感動に嚥下した。

「レックスン終わりだ。今日は廊下の拭き掃除はしなくていいってさ。その代わり、僕と伯父貴の靴を全部磨いておけよ」

利行の姿が消えると、佐江は何度も口元を手の甲で拭った。あと一年、耐え抜けるかもしれないと、かすかな希望が胸に灯った。男なんて、欲望を吐き出せばしばらくは女に興味がなくなるみたい。ユキさんだって、わざわざ早起きまでしたのは三日坊主どころか一日だけ。

「お父様……佐江が、はしたない真似をするのを赦してくださいましね」

天を仰いで、本気で祈った。自殺なんかして父を悲しませたくない。どれだけ肉体を傷つけられようと、必ず治癒する。心さえしっかり保っていれば、純潔さえ守っていれば、どんな恥辱だろうと虐待だろうと、それはひと時の悪夢に過ぎない。

と、固く決意したものの。新しい晒し布に自分で結び玉を作って禪にして締めて。結び玉の上に、じわっと鮮血がひどく傷ついているのを、股間の突起と乳首がひどく傷ついているのを、あらためて自覚した。もしも、また今日もここを虐められたら……ふるんと頭を振って。腋毛で靴を磨くという屈辱きわまりない仕事を、するために、佐江は部屋から出て階段を下りていった。

靴磨きには一時間半もかかった。革靴は本郷が五足、利行が二足。本郷は白のエナメル靴なんかを持っているので、茶色と黒を磨き終わった後で、腋毛を洗ってからでないと磨けなかった。

靴磨きの途中から台所と居間が騒がしくなった。本郷たちがいつもより早く朝食を始めたようだ。その後で女中たちの食事。

「たんと精をつけて、今夜も花嫁修業に励むってことかしら」

佐江の膳にだけ生卵が追加されているのを

見て、正子が嗤った。

かならずお通じをすませて、そこを水で洗うよう言いつけられていたので、食事の後で佐江は十五分ほど厠にこもった。

そうして二階の部屋へ戻ると、ユキが待っていた。雑巾の材料が増えていた。そして、机の端に小さな目覚まし時計が置かれていた。振り子のないドイツ製の高価な品で、進学祝に父からもらって、ずっと愛用してきた。幸せだった日々が、ちよっぴり甦った気分になった。けれど、すぐ地獄へ呼び戻される。

「禪は、はずすんだよ」

材木に秘裂を食い込ませるのは厭だったが、黙って禪をほどいた。結び玉のすぐ上が真っ赤に染まっていた。それを見ると、麻痺しかけていた感覚が甦って、突起をすぎすぎ疼かせた。

机の窪みに身体を入れ、椅子に座ろうとして佐江は息を呑んだ。半円形の材木の前後に設けられた金属製のネジ穴。そのひとつに直

径一寸ほどの丸棒が植えられてた。長さは三寸ほど。先端が丸められている。

「とつとと腰を下ろしな」

すでに肛姦を体験させられている佐江は、棒の意味を理解した。あまりにむごい仕打ちだった。

「裁縫と閨修行をいっぺんにさせてあげようっていう親心だよ。ありがたく思いな」

「はい、ありがとうございます」

佐江は涙をこらえて腰を落とし、丸棒の先端に肛門をあてがった。さらに腰を沈めようとして——激痛に襲われた。

「ひいひい……」

無理に押し込もうとしても、肛門が内側へめくれて丸棒を押し返す。

「馬鹿だね。滑りを良くしなくっちゃ。バタ——なんか、ここにはないけど、啞え方も教わっただろ」

佐江は、ずっとうつぶんでいる。ユキと目が合えば、瞳の中の怨嗟の色を見て取られる

に決まっていた。腰を椅子からはずして、佐江はうつむいた顔を机の下に沈めた。

自分の肛門をあてがっていた丸棒の先端を、顔をしかめながら啜える。口に唾をためて、舌で舐めた。

クチュクチュという音が、ひどく卑猥に聞こえた。

あらためて椅子に座ろうとすると、自分で足枷を嵌めろと言われた。両脚を開いて、椅子の脚に脛脛を当てて足首と膝下とを固定した。枷には鍵がついていないが、机に挟まれれば手が届かないのだから、同じことだ。

「自分の穴も唾で濡らしときな」

指をたっぷり濡らして、昨夜の感触を思い出しながら肛門を揉んだ。

あらためて丸棒の先端に肛門をあてがい、内側に巻き込まれないよう。両手で尻たぶをつかんで外側へ引っ張りながら、直角に開いた脚を曲げていった。ぐうっと肛門が変形する痛み。それが耐えられないほど大きくなっ

たとき。ズブツと音を立てて丸棒が肛門を貫いた。

「ぐうう……」

引き攣れる熱い痛みは、それ以上は大きくならない。佐江はゆっくりと尻を座板へつけた。机が押しつけられて、佐江の腰が壁に縫いつけられる。

「あたしたちは東京へ遊びに出るからね。帰りは五時頃になる。それまでに、雑巾作りを片付けとくんだよ」

ユキは隣の部屋から、佐江の下着類を抱えてきた。襦袢、腰巻、シュミーズ、ズロース、冬物肌着。洗いざらいだった。それを机の端に積み上げて、ユキは出て行った。

（ほんとうに……ずっと、こんな恥ずかしい格好を続けさせられるんだ）

唯一の救いは、積まれた衣類の中に学校の制服だけはないことだった。できるだけ卑屈に従順に振る舞って、閨修行も喜んで受けて、一日も早く学校へ行かせてもらおう。佐江は

あらためて心に決めるのだった。

正午に正子が来て、一時的に拘束を解いてくれた。女中部屋で千津を交えて二人で食事。千津はお膳に顔を落としたまま、いつにない早さで食事を終えて洗い物に立った。下女どころか、奴隸や囚人も同然の扱いを受けている佐江を見るに忍びなかったのだろう。

「食事が終わったら、すぐ仕事に戻るのよ」  
立ち上がって奥へ向かおうとする佐江を、正子が呼び止めた。

「階段は、そっちじゃないよ」

「ちよつと廁へ」

「あたいが言い付かったのは、おまえの食事だけよ。廁へ行かせろとは聞いていない」

「そんな意地悪を言わないでよ」

「誰に向かって口を利いてるんだい？」

あつと、気づいて。あわてて言いなおした。

「お願いですから、廁へ行かせてください」

「おまえの勝手にさせて、叱られるのはあつただからね」

正子も腰を上げて、佐江の正面に立ちはだかつた。

「あたいは、おまえの味方のつもりだったのにさ。親切にしてやっても、お礼の気持ちも示さない。言ってることは、わかるね？」

ついと手を伸ばして、佐江の胸元をはだけた。佐江はとっさに身をかわけかけて思いとどまった。やっと腫れが引いてきた乳房を、わしづかみにして揉みしだく正子。

佐江は痛いのを我慢しながら、懸命に考えた。これだけではすまないにきまっている。舌チ●コとかいう女性器への口淫をさせられるだろう。たかが小水のために、そんな屈辱に甘んじられるわけが……あった。もしも午後五時（もっと遅くなるかもしれない）まで辛抱できずにお漏らしなんかしたら、きつと折檻される。

「夕べみたいにひどくしないでください」

佐江は答えを先取りした。そして、思い切つて短い裾をまくつた。



「ここ、まだ血が出ています。あれだけは赦してください」

「こりゃあ、ひどいねえ」

他人事のように言って、そこを指でなぞった。

「でも、それほど痛くはなさそうだね？」

息を詰めて痛みをこらえているのは百も承知でからかってから、指についた血を佐江の乳房で拭った。

「いいよ。廁へ行つといで。黙つといてやるよ」

「ありがとうございます」

廁の扉に門を落としてから。佐江は両手で顔をおおって忍び泣いた。けれど、いつまでもそうしてはいられない。まくる必要のないほど短い裾をまくって、便器をまたいだ。

部屋へ連れ戻されて、椅子に座ろうとして失敗に気づいた。お通じの後で洗っても、腸には内容物が少しは残っている。それが棒にこびりついて、半乾きになっていた。雑巾を

作った残りの端切れでそれを拭き取って。とうてい口に含む気にはなれないので、肛門を入念に湿して揉みほぐしてから挿入を試みた。

「くう……」

腰を落としていく加減もわかってきたので、朝よりも辛くはなかった。

なにを企んでいるのか、正子は扉を開け放したまま下へ降りていった。いちいち考えるのはやめて（どうせ、そのときになればわかる）佐江は自虐の裁縫に取り組んだ。

午後三時になって、千津がおやつを運んできてくれた。番茶と煎餅。顔をそむけたまま、それを机に置くと、意を決したように佐江の顔を覗き込んだ。

「こんな仕打ち、躰なんかじゃありません。継子いびりですむ話でもないです。警察に訴えましょう。お嬢様は監禁されてるから、千津が駆け込みます」

「やめて！」

反射的に佐江は叫んでいた。醜聞になれば

父の面目は潰れるし、自分も外を歩けなくなる。そればかりでなく、父の会社も危うくなりかねないと、気づいていた。家人も取り締まれない男を相手に、誰が取引をしてくれるだろうか。息子が芸者と心中をして半年後に店をたたんだ呉服店が、町内にあった。女学校でも去年、妊娠騒ぎがあった。退学はもちろんだが、彼女の実家は爵位を返上している。

聡明なだけに佐江は、いちど悪い方向へ物事を考え始めると、つぎからつぎへと先々の悲運を連想してしまふ。それを千津に語って、誰にもしやべらないと約束させた。

「わたしが一年だけ我慢すれば、すべて丸く収まるわ。だから、千津さんも我慢してね」

被害者が唯一の味方に口止めをする矛盾に、佐江は気づいていない。

午後五時半に帰宅して、佐江が縫い物を終えていないのを知っても、ユキはきつく咎めなかった。

「まだ、前の折檻の傷が残ってるし、正子が

ちよいとやり過ぎたしね。土蔵はしばらく勘弁してやるよ」

「ありがとうございます、オカアサマ」

「だからって、いい気になるんじゃないよ。ちちゃんと閻魔帳には付けとくからね。罪を三つ犯したら、罰も三つだよ」

「はい、肝に銘じておきます」

風呂も免除されて、ひたすら自分の着物を破って雑巾を作り続けた。午後七時にユキが様子を見に来たときも、まだ下着が何枚か残っていた。

「愚図だね。晩御飯は抜きだよ」

「……はい、頑張ります」

午後八時にユキが来る直前に、佐江は仕事を終えていた。

今日は本郷の背中を流す番だと告げられて、とぼとぼと階段を下りる。

魔羅の手洗いは、雁首のまわりを指で拭うだけで、しごかされまではしなかった。

本郷が湯に浸かると、彼に向かってしやが

んで、自分の秘裂と肛門を指で洗わされた。

「ううう……」

恥ずかしさは表に出さなかったが、傷ついた淫核に湯が沁みる痛みを佐江は隠さなかった。もしかすると、手心を加えてもらえるかもしれないと期待した。

甘い期待は報われることなく、毛ダワシ洗いを入念に仕込まれた。中腰で背中を上から下までこするのはもちろん、前側まで洗わされた。淫毛だけでなく、乳房にも泡を塗りたくって正面から抱きつく。臍から魔羅の上までは腰をくねらせて毛ダワシで、胸は押しつけた乳房を上下左右に揺るようにして洗う。それが対面座位と同じ動きであるとは、佐江にはわからない。

風呂からあがると、夜具が敷かれた座敷に素裸で正座して、閨教育が始まるまで待つていなければならなかった。すこしでも先へ延びてほしいという思いと、どうせならさっさとすませてほしいという葛藤。

待たされたのは十五分くらいだったろうか。佐江が先に風呂を出て、その後から本郷があがつて、それから利行の番になったのだが。

●六歳の少年が、裸の女体を待たせてのんびりと湯に浸かっていられるはずもない。

「今夜は、一度に二人を相手にするやり方を教えてやろう」

「はい……でも？」

従順を装うにも限度があつた。

「夫は一人しかいません。なぜ、二人を相手にしなければならぬのですか？」

「黙って言われたとおりにしなさい！」

「いやいや。納得できずに練習しても、身につかんぞ」

本郷は妙にやさしかった。

「地方によつてはな、大切な客人には自分の女房を差し出す風習がある。客人が二人も三人もいるとき、待たせちゃ失礼だろ？」

「そんな……」

そんな野蛮な地方にはお嫁に行きませんと

言いかけたが——娘の嫁ぎ先を決めるのは家長だ。理屈の上では、本郷の言うようなことが佐江の身に起きないとは断言できない。

「……はい、わかりました」

本郷がうなずいた。しかつめらしい顔を作っているが、唇の端が好色そうにゆるんでいる。

「それじゃ、布団の上で四つん這いになりなさい」

深く考えずに両手両膝をついて、あつと思ひ出した。牝犬に牡が背後からのしかかつて腰を激しく振っているのを見たのは、幼稚園の頃だったか。女学校へ上がる前には、その行為の意味も知っていたのだが。あれと同じ格好で、お尻に挿れるつもりだろうか？

「毎度バターを使っているは、しまり屋のユキに叱られるからな」

本郷が背後から佐江の長い髪をつかんであお向けせ、唇を二本の指でなぞった。

意図を察して、佐江は素直に口を開けた。

頬をすぼませて唾を出し、クチュクチュと指を舐めた。本郷の唾でほぐされるくらいなら、このほうがいい。

しかし……どうにも恥ずかしくて身の置き所がなかった。身体を奪われて淫らに扱われるのではなく、自分からすすんで浅ましい真似をしなければならぬ。どうして縛ってくれないのだろうか、本郷を恨んだ。

肛門を揉みほぐされて、中まで指を挿れられて掻きまわされて。それでいよいよ貫かれるのかと思っていると、本郷が正面に立った。腰を落として、すでに固く聳えている魔羅を佐江の鼻先に突きつけた。

「こっちも濡らしてくれ」

佐江は泣きそうな顔になったが、従順に口を開けて、自分から魔羅を咥えにいった。すでに利行に犯されている。腹違いの兄よりは、義理の伯父のほうが抵抗がすくなかった。それに、精液を口に出されるわけでもない。

本郷がふたたび背後にまわった。腰を両手



でつかまれたと思つた直後、一気に貫かれた。

「痛い……！」

犯されるのは二度目。しかも朝からずつと、丸棒を突つ込まれていた。すこしは慣れているかと自分では思っていたが、昨夜よりも痛いほどだった。

「つぎはトシの番だ」

髪を引つ張られた。佐江は両手を突つ張つて背中を反らして顔を上げた。すでに禪をほどこしていた利行が仁王立ちになって、伯父に負けない乱暴さで佐江の口に突つ込んだ。

「むぶう……」

前後から貫かれて、佐江は苦しさよりも痛みよりも、屈辱を大きく感じた。玩具にされるとは、このことだと思つた。

「実核がこんなじゃ、啼かせてやるのは無理だな」

正子に手ひどく傷つけられていることを、本郷が指摘した。

「早いとこ拉致を明けてやるのが慈悲っても

のだ」

ザツシ、ザツシ、ザツシと、本郷はいきなり荒腰を使い始めた。唾を塗っただけの粘膜が激しい摩擦で引きずられる。

「むうううう……」

苦痛に顔をしかめた佐江の頭を両手で抱え込んで、利行も容赦なく腰を振った。

「ぶふうう……んんんっ、んんー！」

佐江の両目に涙があふれる。

「うおおおーっ」

野獣のように利行が叫んで、佐江の口の中に奔流をぶちまけた。

佐江はまだ尻を揺すられながら、懸命に青臭い分泌物を飲み込んだ。すぐに利行が身体をはなしたので、淫茎を吸う跡始末まではないですんだ。

「俺も、そろそろだ」

ずんと深く突き挿れられると同時に、腸の奥に小さな衝撃があつた。

本郷はゴムサックをはずすと、きちんと佐

江に吸茎掃除をさせた。

早々と終わった今夜の閨教育は、佐江にとつてただ辛く苦しく恥ずかしいだけだった。

腰の奥が砕けるような脱力感も、突起から放射される妖しい快感も、まったくなかった。

風呂場で下半身を洗って口を漱いであら、お仕着せを身にまとって、居間の入口で正座した。

「なにか御用はありませんか？」

「ないよ。とつとと寝な。明日も早いんだから」

「では、失礼します。お休みなさいませ」

今夜は枷を掛けられなくてすみそうな気配に、佐江はいそいそと立ち上がった。すると、朝の準備で台所に立っていた正子が、当然のように後を追ってきた。

(ああ……とんだ約束をしてしまった)

とたんに佐江の足取りが重くなった。

「おまえを寝かせる役目は、あたいがおおせつかったんだ」

佐江を裸で大の字にあお向けにさせて、手、足、腰と枷を嵌めていく。

もしかすると、昼間の約束を忘れているのかと安心しかけた佐江だったが、正子は忘れていなかった。首枷はわざと外したまま、自分も真っ裸になって寝台に上がってくる。

風呂場で見た正子の裸は肥っていたが、閨の上では妖しい生気を帯びていた。小ぶりの西瓜ほどもありそうな乳房。腰のまわりはだぶついているが、下腹部は意外と引き締まっている。立っているときは垂れ気味の尻も、四つん這いになると豊満さだけが際立っていた。

その尻を佐江の顔にすんと落とした。動物的な異臭が佐江の鼻腔を刺激する。

「さあて、と。舌チ●コを頑張ってもらおうよ」

正子を満足させなければ、この苦行は終わらない。怒らせれば、昨夜のように突起を虐められる。同性の汚い部分を舐めるというお

ぞましさをこらえながら、佐江は頭をのけぞらせて口を正子の秘裂に近づけ、舌をうんと突き出した。

佐江よりもずっと繁茂している淫毛を分け入って、舌先が大淫唇に触れた。

「内側を舐めてよ」

正子がわずかに腰をずらした。佐江は舌先を尖らすようにしてさらに伸ばし、大淫唇と小淫唇の合わせ目あたりで動かした。数回繰り返してから首をひねって反対側。

正子が中腰になつて足を踏み替え、佐江に正面を向けてしゃがんだ。前かがみになると、佐江の鼻先に突起が来た。

佐江は自分の器官の大きさを知らない。が、正子のそれが落花生とあまり変わらないのは、肉体との均衡が欠けているように感じられた。

佐江は顔を起こして、その突起に舌を這わせた。

びくんつと、正子の腰が跳ねた。佐江の舌

が触れるたびに、ぴくんぴくんと腰が揺れる。  
と——正子が右手を股間に添えて、つるんと包皮を剥いた。真つ赤に充血した肉芽が姿を現わす。

「そつとだよ。そつと、裏側を根元から先つぼへ」

言われたとおりに舌先を這わせると、ぶるぶるつと正子の全身が痙攣した。

「やめろと言うまで続けてよ……ああつ、いい。いいいい……」

あまりの悶えように、佐江は腹が立つてきた。自分はちつとも気持ちよくない。舌が痺れて顎も疲れてきた。無理に起こしている首が、開いた枷の縁にすれて痛い。

佐江はもつと頭を起こすと、真紅の突起を口に含んだ。カリツと、根元を軽く噛んでやっつた。

「ぎゃあああああーっ!!」

正子は野太い声で吼えて腰を浮かせ、がくがくつと腰を痙攣させてから、佐江の胸に尻

餅をついた。

「ぐぶっ……」

肋骨が折れたかと思うほどの衝撃だった。

「なにすんのさ、この阿婆擦れがっ！」

正子は股間を押さえて、佐江の乳房を尻でつぶしながら悪態をついている。

正子の身勝手さに呆れて。謝らなければひどい目にあわされるとわかっていても、佐江はどうていそんな気にはなれなかった。

本気で噛んだのではない。ふざけ半分の甘噛みだった。それでも、正子はそのうちまわっている。それほど敏感で苦痛に弱い器官をワニグチクリップで虐めた本郷も憎いが、あの人は男性だ。金玉を蹴られた男の人の痛みを女が理解できないのと同じかもしれない。けれど、正子は女性だ。佐江と同じ器官を持っている。それなのに、嘴がギザギザのクリップでそこを虐めて、こねくり回しさえした。佐江が本気で正子に殺意を抱かなかったのは——勝気ぶってはいても、本質は気弱で内

気な彼女の気質のゆえだったかもしれない。

「うるさいなあ……」

利行が、まだ昼着姿で部屋を覗き込んだ。

「え……？ 正子、どうして裸で？」

佐江も正子も止める暇がなかった。利行は階下へ走って、二人のことを母親に言いつけた。

「どういふことなんだい？ 説明してくれ」

前後の状況を考えれば、正子が佐江を甚振るのを黙認していたに違いないユキが、尖った声で正子を詰問した。けれど、所詮は台本どおり。予想外の展開を即興で埋めるだけだった。

「昨夜、傷の手当をしてあげたんです。そして、是非ともお礼をしたいと言われたので……」

「それで、素っ裸での女同士の乳繰り合いかい？」

ユキの詰問は佐江に向けられていたのだが、



正子がかばうように返事をした。

「すみません。悪ふざけが過ぎました」

寝台から下りて、しおらしく床に土下座した。

「まあ、いいんじゃないかな」

真打登場とばかりに、ガウン姿の本郷が姿を現わした。

「嫁ぎ先には姑もいれば小姑もいる。岩清水だろうが貝合わせだろうが、覚えておいて損はない。これも花嫁修業だ」

話が、だんだん佐江を追い詰める方向へ流れていく。果たして。

「いい機会だ。先輩にたっぷりと教えてもらえ」

それには身体の自由が利かなくてはいけな  
いだろうと、本郷が枷をはずした。

自由になった身を起こして正子と向かい合  
い、佐江は観念した。正子だけでなく本郷、  
ユキ、利行までが納得するまで淫らな行為を  
演じなければ、今夜は終わらないのだ。終着

点を土蔵にだけはしたくなかった。

「正子オネエさん、どうかよろしく教えてく  
ださい」

佐江も寝台から下りて、正子と向き合って  
土下座した。

## 五…幼虐教師

手足が自由になると、いつものことだが羞恥心がつのった。自分から進んで恥ずかしいことをしなければならぬ。苦痛が減って快感が増えるならまだしも。粘膜が剥がれかけるほど痛めつけられた淫核は、刺激されても激痛しか感じない。

たがいに反対向きにかぶさり合って女性器を舐めあう『合い舐め』も、開いた脚をたがいに交差させて女性器をこすり合わせる『貝合わせ』も、佐江にとっては新手の拷問でしかなかった。

一時間以上に及ぶ苦行の後、佐江は寝台に磔にされた。佐江にとっては、それが実質的な解放だった。

月曜の朝には縄束で叩かれた腫れも引き、淫核から大量のスマグメが剥げ落ちて薄皮が張っていた。まだ成長期が終わっていない少

女の回復力には、目をみはるものがあつた。

そうして、一日が平穩に過ぎた。起き抜けに利行から口淫教育を施され、午前十時から午後五時まで、満艦飾の洗濯物に囲まれながら、今度こそほんとうに一人で大浴槽に水を張って、物置小屋から石炭を運んでは千津に教わりながらボイラーを焚き、二人一緒にはいった本郷と利行の全身を毛ダワシと乳スポンジで洗わされ、その場で口淫と肛淫とを強いられ（同時に淫核を刺激されて、佐江はあからさまなよがり声をあげてしまった）、寝る前には正子に口チ●コを強要されたのだが――竹尺で尻と乳房を何発か叩かれただけなのだから、それまでの三日間に比べれば平穩といえるだろう。

火曜日はしくじった。腋毛ブラシでの靴磨きをしているとき、あまりの惨めさに嗚咽しているところをユキに見咎められたのだ。

「そんなに、靴磨きが厭かい？」

「違います。ただ……」

佐江は言いよんだ。泣いていた理由を、うまくこじつけられない。

「あたしは絶対に叱らないから、ほんとうのことを言っごらん」

「……………」

「いやいや磨いた靴じゃあ、長三郎兄さんも気持ちよく履けないだろ。どうしても厭なら、やめさせるように言っごらんから」

佐江は素早く考えをめぐらせた。あたしは叱らない——ユキは、そう言った。告げ口して本郷に叱らせるかもしれない。けれど……厭だと言わせるように仕向けている感じだ。喜んで続けると答えたら、かえってユキの機嫌を損じないだろうか？

「もし赦していただけるのでしたら……靴磨きは、身体の毛を使う靴磨きだけは、やめたいです」

「わかった。長三郎兄さんに言っごよ」

それきり、ユキは寝間へ戻った。

ほっとして、とりあえずは靴磨きを続けな

がら、佐江はだんだん怖くなってきた。靴磨きが厭なら便所掃除でもしろ——そんなことにもなりかねない。

そして、その夜。佐江は土蔵へ引き立てられた。

雑巾を縫うのが遅れた罰として百叩き。床に立てられた丸太を抱く形に縛りつけられ、縄束で尻を中心に背中と太腿も叩かれた。尻に四十、背中と太腿が十発ずつ。それから後ろ抱きに縛りなおされて、乳房に二十発とお腹に十発。最後は股間への十発だった。

佐江は呻き声さえ漏らさずに耐え抜いた。声を立てた分は数えないと脅されていたせいもあるが、尻以外への打撃には手心が加えられていた。とくに股間への鞭打ちは、縄束の先端が丸太に当たって勢いをそがれるので、派手な音のわりには痛くなかった。もちろん、佐江が痛みに慣れてきたせいもある。佐江の同級生の誰ひとりとして、百叩きどころか十分の一の鞭打ちにも耐えられなかったろう。

百叩きだけで折檻が終わったのではない。正子の淫核を嚙んで傷つけた罰として、三角木馬に一時乗せられた。ほんとうに一時間きっかりだったかは、佐江にはわからない。土蔵には時計がなく、本郷の言葉信じられないが、予告されていた錘は使われず、髪の毛と首縄で姿勢を固定もされなかったので、微妙に体重を移動させて痛みを分散して耐え抜いた。

もつとも厳しかったのは——約束どおり、靴磨きを厭がったことは咎められなかったが——磨いた靴を涙で汚した罰だった。座禅転がしの形に縛られてから、重ねた脹脛と首とを縄でつながれて、身体が二つに折れるまで曲げられた。縛られた瞬間から息が詰まり、鬱血で顔が膨れた感じがする。

「笞打ちや石抱きで白状しない罪人に加えられる海老責めという拷問だと、本郷が妹と甥に解説した。もちろん、佐江にも聞こえてい

る。江戸時代の法度で認められていた拷問のうちでは厳しい部類に属するだけあって、二十分もすると目の前が赤くなつて全身に脂汗がにじんできた。すると身体を起こされて丸太に縛りつけられた。頭から血が下がってすこし楽になつたけれど、そのかわり大股開きの中心が正面に晒される。その正面に写真機をかまえた利行が陣取つてシャツターを切り、佐江は羞恥に悶えさせられた。

一時間で解放されると、すぐキの字架に張り付けられた。これには体重を預けられる場所が三点あつた。両足の踏み台と正三角形の股木。いずれも着脱できるようになつている。踏み台は取り外され、股木だけが残された。けれど、手首と足首だけでなく、太腿や二の腕もきつちり縛られたので、股間への負担は小さくてすんだ。

その姿も写真におさめられると、照明は消されて朝まで放置された。海老責めとは比べ物にならない、軽い折檻だった。いつか、佐



江は眠りに落ちていった。それがいけなかった。磔にされたまま寝ているところを見つけて、反省が足りないかと叱られた。

佐江は磔から下ろされて、厳しく縄を掛けられた。膝の後ろに二寸四方の角材を挟まれて正座させられ、太腿を縛られた。

解放されたとき時間は告げられなかったが、一時間から二時間といったところだろうか。

この時代の女性は、半日くらいは正座を続けられるよう躡けられているが、膝の後ろに異物を挟まれては、そもいかなない。佐江は横座りになって、足に感覚が甦るのを待った。

その目の前に、セーラー服が投げ与えられた。

「……………？」

物問いた気にユキを見上げる佐江。

「行きたけりや、学校へ行かせてやるよ。どうするんだい？」

これだけ痛めつけられては、まともに歩けない。けれど——と、佐江は思いなおした。

行かないと答えれば、恰好の口実を与えてしまふ。一週間二週間、へたをすると一学期まるごと休学させられるかもしれない。ここは、這つてでも学校へ行かなくてはならないと、佐江は判断した。

「行きたいです。行かせてください」

まだ痺れている足を踏ん張って、佐江は立ち上がった。

「ちゃんと下着も着けてくんだよ」

六尺の晒しが投げつけられた。床に落ちてゐるのはセーラー服の上下だけで、ズロースもシュミーズも見当たらない。佐江は溜め息を押し殺して、いつものように結び玉を作った。

「学校へ行くんだから、もつと気合を入れな  
悲しいことに、言葉の意味を正しく理解でき  
きるまでに佐江は責めに馴らされていた。結  
び玉をゆるめて、あと三回布をくぐらせた。

いつもより大きな結び玉を股間に埋めて、  
そこでも注文がついた。肛門に当たる箇所

も小さな結び玉をひとつ。それを渾身の力で締めあげねばならなかった。

本郷たちが食べ残した食パンの耳と水だけの朝食をすませて。

学校へ行かないとは絶対に言わないと、見透かされていたのだろう。いつもどおりに父の会社の車が迎えに来た。

学校までの三十分。いつもなら、とぼとぼと歩く生徒やサラリーマンを尻目にお嬢様気分を味わっているところだが、今日はそれどころではなかった。東京市でさえ舗装率は一割に満たない。穴ポコだらけの土道、小さな凸凹が絶えず座席を突き上げる砂利道。その大小の振動が腫れた尻に伝わって、座ってられないほどの痛みを生み出す。と同時に、結び玉に刺激されて、佐江は妖しい感覚にも悩まされた。じわっと股間が濡れてきて、淫らな蜜が結び玉に堰き止められているのが自分でわかった。

家にいるあいだは、時間がもったいないと

言われて髪を編んでいなかった。きちんと三つ編みにしたいのだけれど、苦痛と快感に翻弄されて、その余裕さえなかった。

校門の手前で自動車を降りて。気を引き締めようとするのだが、足取りがおぼつかない。

「おはようございます」

「はい、おはよう」

他人には気づかれない程度にはしゃんとして、佐江は正門をくぐった。

「お風邪は、もう大丈夫？」

「季節はずれの風邪は、こじらせたら大変よ。無理はなさらないでね」

「田端様ったら、あんなことをおっしゃって。首席を奪い返すおつもりよねえ」

「お見舞いは無用ってうかがっていたから、見合わせたのですけど。ごめんなさいね」

級友たちの労わりにひとつひとつ受け答えしながら、佐江は一刻も早く以前の自分に戻ろうとしていた。

けれど。座っているだけでさきさき痛む臀

部。セーラー服の粗い生地にこすられて悲鳴をあげている乳首。まだヒリヒリしている手首の縄跡。意識から締め出そうとすればするほど、その存在を頑なに主張する結び玉。家にいるときは当面の屈辱に心を奪われ、本郷たちの内心を推し量るのに懸命で、いちいちかまけてはいられなかった事柄が、日常の中に置かれた佐江にのしかかってくる。

佐江は授業のほとんどを聴いていなかった。先生の声が耳には聞こえているのだが、そのまま通りすぎてしまう。板書を書き写すときも、心は別のことを考えている。

「立花クン、この方程式の解は？」

「あ、はい……すみません、ぼーっとしていました」

「先生、立花さんは病み上がりなんです」

「お、そうだったな。きつければ保健室へ行きなさい」

そんな調子で午前が過ぎて。佐江は弁当を持たされなかったのを思い出した。そっと教

室を抜け出して。誰も来ない今のうちにと、  
厠へはいった。スカートをまくりあげて裾を  
からげ、褌をほどいて便器にしゃがむ。昨夜  
から口に入れた水の量はごく少なかったし、  
折檻でさんざんに汗を絞られていたから、出  
た量もわずかだった。褌は緩めたかったが、  
落としては一大事なので、自分で自分を虐め  
ない程度には引き締めた。

午後の授業も同じように終わって。帰り支  
度をしているところに、小使いの山田小父さ  
んから伝言があつた。保健室へすぐ来るよう  
にとのことだった。

行ってみると、校医の姉小路先生と体育の  
三田島先生が待っていた。

「月曜の身体測定を、立花さんは休んだわね」

(あ……)

まずい。こんな身体を見られるわけにはい  
かない。

「まだなのは、立花さんだけよ。これから計  
ります」

「あの……今日は月の障りなんです。三日ほど延ばしていただけませんか？」

「メンスバンドまで脱げとは言わない。ちょっとちゃんと済ませよう」

三田島先生は、生徒に嫌われている。倒立の補助ではお尻と太腿をつかむし、姿勢をおすときは胸を触る。そして身体計測ではかならず補助を努める。

「あの……でも……」

必死に頭を回転させる佐江。生徒が恥ずかしがるのを悦ぶ先生のことだ。もう見逃してもらえない。メンスバンドくらい見られても（今の佐江なら）へっちゃらだ。けれど……  
禪は言い訳のしようがない。

「先生たちは、ほかにも仕事があるんだぞ。」

立花ひとりに時間を取られていては困るんだ  
「だ」

「わかりました！」

覚悟を決めて、佐江はセーラー服のホックをはずした。

「おおっ……!」

「まあ、なんてこと……」

剥き出しになった佐江の乳房に二人の視線が突き刺さる。

「スカートも取りなさい」

三田島が冷静を装う。身体計測は下穿きだけで受けるのが決まりだった。

裸の尻を突き出す恥ずかしさをこらえて、スカートを脚から抜いた。

「風邪って届け出てありますけれど、ほんとうは違うんです」

質問される前に、佐江は考えついた言い訳を口にした。

「父が洋行して、わたし淋しくなつて……学校へ行く気になれなかつたんです。ずる休みを続けたので、母に叱られて……折檻されたんです」

厳しすぎる折檻ということで押し通すしかない。

「縄の跡が残るほど厳しく縛って、腫れあが



るほど叩いてか……まあ、家庭それぞれに教育方針があるから、学業に差し支えなければ口出しはしないが」

「たしか、立花さんの血液型はO型だったわね。前年度の血液型相関調査では、O型の人は大雑把で成績にもムラがあるから、たまには厳しい折檻が必要かしらね」

血液型と性格との関係が人口に膾炙するのは後年のことだが、すでに先見的な研究は始められていた。帝大医学部の某研究室では、生徒の成績と血液型との相関が調べられていた。この女学校でも二月に、生徒全員の血液型が検査されたばかりだった。

「傷の理由はわかったが、その禰はなにごとだ？」

「学校に行きたくない理由のひとつですけど、得体の知れない人に後をつけられたことが、何度かあったんです。襲われたりしたら、お嫁に行けなくなってしまいます」

「禰をしていても、男には見えんぞ」

「でも、ズロースを脱がすよりも禪をほどこ  
ほうが手間です。口を手でふさがれても、禪  
をほどくときは両手を使いますから……助け  
を呼ぶ隙ができます」

三田島が苦笑した。

「それにしても、ずいふんと盛り上がって  
るわね。まるで、男の人みたい」

「そう言えば、そうだな。盛りマンどころじ  
やない」

三田島が素早く佐江の背後にまわった。左  
手で二の腕ごと身体を抱いて、右手を禪に這  
わせた。

「うん……？ ゴツゴツしてるな。なんだ、  
これは？」

「あの……あの、これは……用心のためです」  
三田島先生のことだ。触られるかもしれない  
いとは予想していた。言い訳も考えてある。

「結び玉を作って、埋めているんです。そう  
すれば、指を挿れられて傷つくことも防げま  
すから……」

「そうか、どれどれ……」

「厭あ……!!」

三田島が、ほんとうに指を挿れようとしたが、結び玉が邪魔をしてうまくいかなかった。

「なるほど。御利益はたしかにあるな。どうです、姉小路先生。いつそ結び玉付き禪を女学校で推奨しては？」

「馬鹿をおっしゃってないで。早く計測をすませましょう」

それきり——下着を着けていない理由まで問いただされることもなく、身体計測は速やかに終わった。迎えの車をあまり待たせることもなく、佐江は生き地獄の屋敷へ戻った。

禪を緩めに締めたままだったので、それをユキに咎められて、ビンタを張られた。

毛ダワシ洗いと入浴そのものも免除されて。「俺も、そんなに若くはない。今夜のところは銃弾補給だ」

閨修行も取りやめになった。ただし、淫らなことをされなかったわけではない。座敷で

はなく佐江の監禁部屋へ連れ込まれて、利行に口淫された。それから、利行の目の前で正子と乳繰らねばならなかった。前日の折檻が女性器をほとんど傷つけていなかったせいもあって、佐江は女同士の交わりで初めて気が逝かされた。それは淫核への刺激による鋭いが瞬間的な淡いものではあったが——最初の背中洗いで感じかけていた快感の頂上には違いなかった。

木曜日も登校を許された。前日に比べると痛みも引いて、わずかに日常を取り戻した心地になった。しかし、安息は三田島の介入で崩壊した。

「土曜の午後は、伯父さんも家にいるな？」

「はい……多分ですけど」

「家庭訪問するぞ」

「先生が……ですか？」

三田島は佐江の学級の担任ではない。

「立花の教育方針について、家の人と相談したいことがある」

「わたし、なんとも思っていないから」

「ん……？」

「折檻が厳しいのはつらいですけど、悪いのはわたしですから。今の母親には、お腹を痛めたわけでもない娘のことを、これほど真剣に心配してもらって、感謝しています」

「先取りし過ぎるのが、立花の悪いところだな。心配するな、そういうことじゃない」

「………？」

三田島の意図を量りかねて、佐江は困惑した。

「ともかく、土曜の午後には伯父さんとお母さんに会いたいのだと伝えてくれ」

——三田島の言葉を伝えると、ユキが狼狽した。

「だから……もっと、手順を踏んでって言ったじゃない。醜聞は困るわよ」

「なんとでもなるさ」

本郷は悠然とかまえている。

「その三田島とかいう野郎が、どれだけ教育

熱心で生徒を大切に思っていたところで、寄付金を百口も申し出れば、学校が善処してくれる」

（それは、お父様の財産なのよ！）

とは、口に出せない佐江。

「佐江の話じゃ、そんな四角四面でもなさそうだし。案外と瓢箪から駒かもしれないぞ」

「あんたが撒いた種なんだからね、いろんな意味で。あんたがうまくやってよ」

「まかせとけて」

とは言うものの。さすがに用心したのだろうか。土曜日まで佐江が虐められることはなかった。利行も正子も本郷から釘を刺されて、佐江にちよっかいを出さなかった。

寝るときは裸だったが、起きている間はずつとセーラー服で過ごせた。敷布と毛布も与えられた。机が掛け金で固定されることはなくなり、ネジ穴から丸棒も取り除かれた。

正子は意地悪でも淫らな真似でもなく、まともに傷の手当をしてくれた。食事は女中部

屋で取らされたが、おかずはぐんと良くなつて、本気で正子に感謝されたほどだった。

おかげで土曜日の朝には、佐江の肌はかつての輝きを取り戻していた。そして、それは——佐江が、ふつうの意味で幸せだった最後の残照となったのだ。

土曜日の午後一時ちょうどに、三田島が訪れた。右手に黒い鞆と、左手にみすばらしい着物の女兒の手を引いて。

「さっそくですが、用件にはいらさせていただきます」

座敷の床柱を背にした三田島に正対して、本郷、ユキ、佐江がかしこまっている。

「小生は、お宅の教育方針に感服いたしました。よろしければ学校でも、お嬢さんをほかの生徒よりは厳しく指導してみたいと考えて、お伺いした次第です」

「……………？」

佐江はもちろん、ユキもぼかんとしている。本郷はなにかを感じたようだが、まだ疑り

深く三田島をうかがっていた。

「いきなりの申し出に戸惑われるのは、ごもつとも。論より証拠といきましょう。おい、カナ」

名前を呼ばれて、少女の肩がピクツと震えた。

「こいつは遠縁の娘でしてね。家がどうにも立ち行かなくて、身売りされるところだったのです。しかしねえ。いくら抜け道はあるといっても、●二歳の少女を廓に売り飛ばすとなると穏やかじゃない」

都会住まいなら顔も広かろうと身売りの伝手をたずねられた三田島が、少女を引き取ったのだという。

「礼儀知らずの田舎娘ですから、厳しく躰けてやらなければなりません。おい、皆さんにお見せしなさい」

少女は前に座っている三人に怯えた視線を巡らせ、おどおどと三田島の顔色をうかがっているから、泣きそうな表情で立ち上がった。



「早くしなさい」

厳しい声に、またピクツと肩を震わせて。

少女はべそをかきながら帯を解いた。前をはだけて、はらりと着物を落とす。佐江と同様、下着は着けていなかった。そのかわりというか——二本の太腿が幅四寸ほどのゴムバンドでひとつにまとめられていた。

「こうすれば、いやでも女らしい歩き方になりますからね」

佐江は、少女の裸身に違和感を抱いていた。年齢は三田島先生の言うとおりのだろう。股間はまったくの無毛。胸はわずかに膨らんできているが、乳房というにはあまりに小さやかだ。

「あ……」

三田島が佐江を見て、その視線の先を追った。三田島が少女の横に立って、かすかな乳房にふさわしくない大粒の乳首をつまんだ。

「成長を促進してやっているのです」

少女に横を向かせた。乳首の根元を絞って

いる黒い輪ゴムが皆の目に映った。

「昼間ははずしていているのですがね。今日は皆さんに見ていただきたくて着けさせました」

少女の下半身にも異変を発見して、佐江は目を見張った。同じような黒い輪ゴムが、三つも少女の突起をくびっている。

「ここも、できるだけ発達させてやります。リングをはずしても、男の赤ん坊くらいにはなっていますよ」

いずれば、ここで女と媾合えるまで大きくしてやりたいと、空恐ろしいことを三田島は平然と言った。

「リングというのですか？」  
本郷は新奇な責め道具に関心を持ったようだ。

「工業製品です。軸の油漏れをふせぐ部品で、オーリングといいます」

説明しながら、三田島は少女の下半身に装着したオーリングをはずしていった。きつく締め付けているのだろう。三田島が指でつま

んで力まかせに引つ張ると、剥き出しの実核が長く伸びて先端が膨れる。

「ひゃあんっ……！」

悲鳴とともにオーリングがスポンと抜けて、少女が股間を押さえてへたり込んだ。

「こいつ、けっこう感じているんですよ。痛みと快感を同時に与えるように心がけていますから」

三田島は少女を立たせて、さらに二回、悲鳴を上げさせた。

「これを装着するときはですね」

三田島は持つてきた鞆から、スポイトの親分のような器具を取り出した。先細りになったガラス管にオーリングを嵌めて、胴のゴム球を握りつぶしたまま、片手で少女の包皮をめぐりながら筒先を実核に押しつけた。ゴム球を握る力を緩めると、にゅうーつと実核が吸い出される。オーリングを転がすようにガラス管の先端へ移動させて。ピチツという小さな音とともに、オーリングが少女の根元に

食い込んだ。

「きひい……」

苦痛しか感じていないとわかる、小さな悲鳴。

あつという間に、少女の実核は元のように引き伸ばされてくびられた。

「よろしければ、一式進呈いたしましょう」

「それはありがたい。さっそく、佐江も成長させてやります」

生きた心地もなく、佐江は二人の会話を聞いている。

「交換条件と言つては厚かましいかもしれませんが……」

太腿を巻いているゴムバンドをすこし引き下ろして膝を開けなくしてから、三田島は少女を正座させた。

「先日、お嬢さんの裸身を見て、つくづく感服いたしました。整然とした縄の跡が、くつきり浮かんでいました。小生もいろいろ工夫してみるのですが、とても、ああはいきませ

ん。縛り方を伝授していただくと、とてもありがたいのですが」

「ちよっと、お待ちください」

本郷が立って、中廊下の向かい側の客間へ姿を消した。彼が居室にしている部屋だ。一冊の本を手に戻ってきて、三田島の前へ押し出した。

『実践捕縛術2／古武術研究会編』と、表紙にあった。

三田島は本をばらばらとめくって、ほうと嘆声を発した。全裸の女性をモデルにした写真入りで、さまざまな縛り方が詳しく解説されている。

「同じ内容で1の本もありますが、こちらは囚衣を着ています」

雑誌にひっそりと広告を出して1の本を売り、これと目をつけた顧客には2の本を売り込むのだと、本郷が説明した。

「あれこれ書いてはありますが、言葉では説明できないコツもあります。それこそ、よろ

しければ、佐江かカナをモデルにして実地で伝授してさしあげましょうか」

「おお、願ってもないことです。お師匠、どうぞよろしく」

佐江は厭な予感にとらわれていた。話がだんだん広がっていく。お師匠などと持ち上げられて、本郷も満更ではない顔つきだ。

「三田島先生は独自の工夫を凝らしておられますな。こっちは、古人の真似をするのが関の山です」

「ははあ……」

「それでは、こっちも論より証拠といきましよう。佐江、土蔵へ行くぞ」

厭な予感が当たった。

本郷は利行と正子も呼びつけて、総勢七名で、ぞろぞろと裏庭へ出た。屋敷に残されたのは千津だけだった。カナは人目をおもんぱかって、どうせすぐ脱がされる着物をきちんと着付けさせられている。

「おお、これは……!!」

土蔵にひしめく大小の拷問器具を見て、三田島が絶句する。

「三角木馬、水車、往生柱、磔柱、引き伸ばし梯子、吊り滑車……なんとも素晴らしい眺めです。これで遊んでもらえるお嬢さんが羨ましい」

「いやあ……」

本郷が頭を搔いた。

「まだ作ったばかりでしてね。ほとんどの道具は、柿落としがすんでいません」

「それは、もったいない。しかし、先が愉しみではありますねえ」

とここで——と、三田島が棒の突き出た踏み台を指さした。

「不勉強で申し訳ありませんが、あんな道具は見たことがありません」

「あれは洋の東西を問わず、拷問に使われた記録はありません。亜米利加のその手の雑誌にあったポンチ絵から、道具作りの大工が考案した物です」

「これも、論より証拠といきたいのですが……佐江とは、生娘を守ってやる約束を交わしていますのでね」

「ええっ！　なんと、まだ処女ですか!？」  
（女学校の先生が、生徒が処女だからって、驚くの？）

激しいいきどおりで、佐江は拳を握り締め  
た。

「というと……その子は、もう？」

「当然です。買ってきたその夜に引導を渡してやりました」

「では、カナちゃんを使わせていただいてよろしいですか？」

「どうぞ、どうぞ。あ、壊さないでくださいよ。まだ何年も可愛がってやるのですから」

「ああ、それは大丈夫……でしょう。それよりも、先生で満足できなくなっても責任は持てませんぞ」

「では、お手並み拝見。脱がせましょうか？」  
「そうしてください。あの大きなゴム輪も邪



魔です。オーリングは、どちらでもかまいません。ところで、佐江」

「え？ あ、はい！」

突然に矛先を向けられて、あわてた。

「土蔵の中で服を着ているとは、礼儀知らずにもほどがあるぞ」

「も、申し訳ありません」

あわてて、佐江はセーラー服を脱ぎ捨て、禪もほどいた。そして、土間に正座した。

「ほう……教育方針を変えたのは、立花氏の洋行後と思っていました。短期間に、よく教育されたものですね」

「鉄は熱いうちに打てといえます」

着物を脱がされて怯えるカナの両手が頭上で縛られた。チャリチャリチャリと鎖が下りてきて、カナを宙吊りにした。その真下へ踏み台が置かれる。

「背丈からすると、こんなものかな」

つぶやきながら、本郷が棒の長さを調節した。根元が伸縮して、口金で固定する仕組み

なっている。

「あの先端を突っ込むんですが、いきなりでかまいませんか？　慈悲を掛けてやりますか？」

棒はカナの膝のすこし上で之の字に折れ曲がっている。折れ曲がった先は八角形になっていて、先端だけは丸まっている。その太さを指でたしかめて、三田島はうなずいた。

「だんだんわかってきましたよ。先に暖めてやったほうがよさそうです」

「やさしい先生でよかったですね、カナちゃん」

カナの身体が棒の横に吊り下ろされる。爪先立ちになったカナの股間を、三田島の指が無雑作にえぐった。

「あ……あん、ん」

年齢にふさわしくない声が、少女の小さな唇から漏れた。腰をくねらせて、指から逃れるのではなく、指を深く受け挿れにいった。

佐江は、自分より三つも年下の少女の痴態を呆然と眺めた。最初からではないだろう。

厭がれば佐江と同じように叩かれ、無理強いに躡けられた結果だとは思うけれど——三田島のがさつな指使いに少女が快感を得ているのはたしかだった。なによりの証拠に、少女の薄い秘裂から透明な蜜があふれ出ている。

「こんなところですかね」

三田島が身を引くと、ふたたび少女の身体が吊り上げられた。踏み台がずらされて、屹立した木の棒が少女の秘裂に触れた。

「え……？ 厭あ、怖い……！」

身悶えする少女の腰を三田島が押さえて、木の棒を秘裂に割り挿れた。チャリチャリと鎖が下がって、木の棒がずぶずぶと少女をえぐった。足の裏が踏み台について、膝がすこし曲げられるところまで吊り下ろされた。

「では、腰振りダンスの始まり、始まり」

本郷が節をつけながら、踏み台の横にあるツマミをひねった。

ウイイイイ……ン。モーターの唸りとともに、木の棒がゆっくりと回転を始めた。之の

字の先からは、円運動になる。棒の回転につれて、少女の腰も円を描いた。

「ひいひい……怖い。止めて、とめてえ！」

少女の悲鳴が土蔵の土壁に吸い込まれていく。

ウイイイイ……ン。ぐるうり、ぐるうりと腰で円を描き続ける少女。

「いや、いや、いや……」

少女の手が鎖をつかんで、自分を引き上げようとした。

「ひゃああつ！」

脇腹を本郷にくすぐられて、力が抜ける。

少女の膝が折れて、さらに奥まで木の棒に貫かれた。

「あぎゃあつ……！！」

がくつと首を垂れて、それきり少女は機械から逃れる試みを諦めたようだった。

三分、五分と腰振りダンスが続けられて。

「はあ、はあ、はあ……ひいんっ」

だんだん息が早くなると同時に、感極まつ

た甘い悲鳴が混じり始める。そうして、ついに。

「はああ……やああ……逝くよ、逝っちゃう！」

少女をえぐる胴部は八角形をしている。膣の中のあらゆる部分を稜線で刺激されて、ついに少女は絶頂に達してしまった。

佐江はひたすらに少女の痴態を凝視している。淫核を刺激することなく絶叫するほどの快感を得られるとは、考えたこともなかった。夫となる人と構合ったとき、自分もあんなふうになるのだろうか。ごくりと、佐江の喉が鳴った。

「ここからが本番でしてね」

本郷がツマミをさらにひねった。

ヴィイイイン！ モーターの音が甲高くなり、棒の回転が速くなった。少女の腰が、台風に翻弄される木の葉のように激しくくねった。

「ひゃああ……やめ、やめて。休ませてよ

う！」

絶頂の余韻に浸っている贅沢を、少女は許されなかった。ぶんぶんと腰を振って、つぎの絶頂へ追い立てられる。

「このまま続けると、どうなるか——俺も怖くなってきたぜ」

教師に遠慮していた言葉遣いが、いつもの調子に戻った。

「あと一回逝ったら、すこし休ませてやってください。もちろん、あの台の上で」

「承知しました。しかし、先生の手駒ばかり使わせてもらっちゃ、申し訳ない」

本郷は、佐江を骨組みだけの丸テーブルの前へ連れて行った。間近に見て初めて気がついたのだが、垂直に立てられた円い枠を長方形の浅い箱が囲んでいた。

その縁に立つと、佐江のへそが枠の中心軸あたりに来た。腰を頑丈な鉄枷で固定され、大の字に開かされた手足も枷につながれた。手首と肩の付け根、足首と太腿の付根、そし

て首まで固定されて、佐江はぴくりとも身体を動かさなくなった。

本郷が外からホースを引いてきて、箱に水を満たし始めた。

佐江の顔が恐怖にこわばった。三田島は、この仕掛を水車と言っていた。その意味を理解したのだ。

「オジサマ……」

佐江は声を震わせながらたずねた。

「まさか、溺れたりとは……しないですよね？」

「息を止めていればな」

「……………！」

佐江は言葉を失った。

「心配するな。溺れたら助けてやる。三田島先生と同じで、末永くおまえを可愛がってやるさ」

「ありがとうございます……」

いつもの棒読みより、ちよつとだけ感情がこもっていた。殺される恐れはないと安堵したせいだったろうか。

「さて、カナちゃんはひと休みだ。佐江お姉ちゃんは悪い子だから、お置きさされるんだよ」

腰振りダンス台と同じ形のツمامミが、カチツとひねられると、水車がゆっくりと回り始めた。時計の秒針よりは、すこし速いくらいか。佐江の足が水から引き上げられて、ゆっくりと横倒しになり、それから頭が下がって……乱れた長い髪が最初に水に浸かって、即頭部から沈んでいく。

目が水に没した瞬間、佐江は息を止めた。鼻の穴に水がはいってきて、ツーンと痛い。逆さになった顎の先まで水に没してから数秒……口が水の上に出て、やがて鼻も空気に触れた。

「ゲボッ……がはっ！」

口の中の水を吐いて息をした瞬間、鼻の穴の水を奥まで吸い込んで、水に浸けられているとき以上の苦しみを味わった。

「はあ、はあ、はあ……」



安心して息ができるようになったのは、身体が水平になってからだだった。小さい頃の水遊びは別として、ものごころついてからは泳いだこともない佐江には、水責めは身の毛もよだつ恐怖以外のなものでもない。

それでも。二度三度と浸けられているうちに、苦しさを軽くする方法が身についてきた。息をうんと吸っておいて、水の中ではすこしずつ鼻から息を吐く。水から顔が出たら、まづ鼻から強く息を吐ききって水を吹き飛ばす。それから心を落ち着けて深呼吸。

六度目くらいから、回転がいつそう遅くなった。それだけ顔が浸かっている時間が長引く。腰振りダンスとは逆で、これは回転が遅いほど苦しい。

ゆっくりとした回転にもなんとか耐えられるようになって。細々と鼻から息を吐き続いていたとき。ガクンと小さな衝撃があった。

(……………?)

何秒か息を吐き続けてから気づいた。回転

のせいで、つねに水流が顔にあたる感覚があったのに。それが消えていた。

(故障……?)

まっ先に考えたのは、それだった。けれど故障なら、枷をはずしてくれば、逆さに投げ出されたって溺れるよりはmalıdır。

(あ……!?)

腰振りダンスと違って、この責めには一片の快感の要素もない。ひたすら佐江を苦しめるだけの仕掛だ。それを楽々と(では、けっしてないのだが)耐えてみせたものだから、不興を買ったのかもしれない。佐江は鼻から息を抜くのをやめた。肺に残っている空気だけで、水車が動き出すまで持ちこたえなければならぬ。鼻が痛いなどと言っていられない。

三十秒。それとも一分だろうか。水車は止まったままだ。苦しさをわかってもらおうとして、佐江は手を握ったり開いたりした。がっつちりと鉄枷に固定された身体をくねらせて

もみた。息がますます苦しくなるだけで、水車は動いてくれない。

目の前が真っ赤になった。頭がガンガンする。水でもいいから、胸いっぱい吸い込みたい誘惑に駆られた。魚は水の中で生きていく。人間だって、すこしは……。ゴボツと口から大きな泡を吹いて。それで佐江は正気を取り戻した。溺れたら助けてくれるという本郷の言葉を信じるしかない。

赤かった視界が、すうっと昏くなっていく。

(もう……駄目)

気力が尽きて。ゴボツと口から盛大に泡を吹いた。苦しさと息を吸う寸前に。

ぐるんと、凄い勢いで身体が回転した。ザバアツと水をはね散らかして、佐江の身体が垂直に立った。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

佐江は全身で空気をむさぼった。

「クラッチを切れば、重心が不均衡に作つてあるから、自然とこうなる」

本郷の言葉は理解できなかったが、佐江にもわかつていることがあった。

「約束を守ってください、ほんとうにありがとうございます」

苦しい息の下から、佐江は礼を述べた。本気で本郷に感謝したのは、これが初めてだった。それは声色にもはっきり表われていた。

ただうなずいただけの本郷だったが、内心はどうだったろうか。佐江の馴致が一段階進んだと、ほくそ笑んでいたかもしれない。

さらに十分ほど。今度は二人同時に責められて。それでお披露目は終わった。土曜の昼から夕方まで、本郷が三田島に緊縛の手ほどきをして、ついでに拷問道具も順繰りに試そうと二人が約束を交わすのを、佐江もカナも絶望の表情で聞いていた。

家に帰ってからも、カナがさらに虐められるのか可愛がられるのかは、佐江にはわからない。けれど、自分への折檻が終わっていない。

いことは明白だった。まだ水車に縛りつけられたままだったのだ。

三田島を送ってから土蔵へ戻って来たのは、本郷とユキだけだった。正子は女中本来の仕事があつたし、利行は友達と遊ぶ約束をしていたので、後ろ髪を引かれながら外出したようだった。本郷は洗面器を抱えていたが、いきなり叱りつけられて詮索する暇はなかった。

「あんな小さな子に負けて、俺は恥ずかしい」

「……すみません」

「どこが負けているか、わかっているな？」

「……乳首とか？」

カナがああの年齢で一人前の『女』になっていることではないかと思つたのだが、それを話題にされるのが怖くて、佐江はとぼけたのだ。ところが、正鶴を射ていた。

「乳首も実核もだ。今日から、おまえもオーリングで成長を促進させる」

「……はい、そうします」

何秒かためらってから、佐江はそう答えた。

厭だといっても無理強いされる。それに……もう成長が止まりかけている自分は、あんなに大きくはならないのではないだろうか。そこに一縷の望みを託したのだ。

「よし。立派な実核に育ててやるぞ……ん？立花佐江、リツパなサネ。こりゃあいい。名は体を現わすとはよく言ったものだ」

「いっそ、これからはサネって名前にしてやろうよ」

ユキも尻馬に乗って笑い転げた。

「カナはつるつるだから問題はないが……おまえ、いやサネは、毛を巻き込みそうだな。ときどき、禪に巻き込まれて気持ち悪そうにしているな？」

「いえ、そんなには……」

「俺が、面倒だと言ってるんだ。おまえの意見は聞いていない」

「はい。出しゃばって申し訳ありませんでした」

「では、決まりだ」

本郷が土蔵の入口から洗面器を持ってきた。中には、髭剃り道具がはいっていた。父が使っていた舶来のシェービングカップでシャボンをお立てして、佐江の股間に塗りたくる。

「く……」

ブラシの毛先にくすぐられて、佐江の腰がくねった。

「ここからは動くなよ。怪我をするぞ」

大ぶりの剃刀が股間に当てられた。佐江は観念して、目を閉じている。下の毛を剃られるなんて、恥ずかしくて気持ちを表現できない。けれど、もっと恥ずかしいことをたくさんされてきた。痛くないだけでした。それに……禪に毛が巻き込まれてわずらわしいのは事実だった。恥ずかしいのを我慢すれば、これからはすこし楽になる。

肌の上で冷たい感触が滑った。剃られる音は、まったく聞こえない。ただ、いつもは暖かい空気におおわれていた肌が剥き出しになって、ひどく心細い。

冷たい感触が下腹部を何度も往復して。その毛は剃られてしまったのだろう。股間の花弁をぎゅっと秘裂へ押しつけられた。その襞の谷間を剃刀が滑った。

「そうそ。サネは靴磨きをしたくないんだって」

ユキが思い出したように行った。

「それなら、腋もカナと同じにしてやろう。大人びた身体につるつるの肌だ。それも面白いな。おまえもそう思うだろ、サネ？」

「オジサマのお好きなようにしてください。わたしは……くうっ」

剥き出しにされたばかりの淫核を、ピシッと弾かれた。

「いつまでもお嬢様気取りでワタシなんて言ってるんじゃない。サネと見え」

「はい……サネは、オジサマとオカアサマのおっしやるとおりにいたします」

「ふん。カマトトぶりやがって」

それ以上は追求せず、本郷はいそいそと剃



毛に取り掛かった。女を無毛にするというのは、ある種の男にとつては無常の愉悦である。本郷の顔が怒っているように見えるのは、最初からそれを思いつかなかつた自分に腹を立てていたのかもしれない。

## 六・女虐学校

佐江の運命が急転直下してから、ひと月あまりが過ぎた。どこまでも転落していく境遇を、佐江は淡い悲しみの中で甘受していた。

セーラー服も衣替えで上下とも白になった。雨や汗で濡れると、乳首に装着された黒いオーリングがくつきりと透けて見える。乳房や尻が肌色に透けるのだから、佐江が下着をつけていないことは、誰の目にも明白だった。しかも月の障りのあいだ、佐江は脱脂綿を詰めた上に赤褌を締めさせられた。こうなると、衣服が乾いていてさえ透ける。加えて。夏服は半袖だった。手首も二の腕も剥き出し。縄跡を衆目に晒さねばならなかった。

級友は、それに好奇と侮蔑の視線を向けるだけだった。というのも。

本郷と三田島が意気投合してまもなく。体育の授業がある日に、佐江はブルマを持たさ

れずに登校した。やむなく他学級の友達から借りて、授業に出席した。よくあることだった。ところが。名前を呼ばれて、列から引き出された。

「立花、そのブルマには他人の名前が書いてあるな。どういうわけだ？」

「すみません。忘れたので友達に借りました」  
「馬鹿者！」

全員が、ビクツとした。雷が凄まじかったせいもあるが、どうして怒られなければならないのか、それがわからない。

「生徒間での金銭や物品の貸借は校則で禁じてあるぞ」

「でも、それはレコードとか雑誌のことです。授業の後で必ず返すのだから、問題はないと思います」

佐江と首席を争っている田端早苗が、異議を申し立てた。

「そういう安易な考えがいかんのだ。立花、ブルマをすぐ返しに……行っても、授業の妨

げだな。先生が預かっておく。すぐに脱げ」

「えええーっ!？」

「やだあ。先生の変態!」

生徒たちから黄色い悲鳴があがる。深刻な響きはない。冗談だと思っっているのだ。

「立花、先生の言うことが聞けんのか？」

穏やかな声だったが、佐江にはそれがいつそう不気味に聞こえた。●二歳の少女を囲って虐待し、佐江が水責めで苦しむ姿を嗤いながら見物していた男。佐江だけが、三田島の正体を知っていた。彼の言葉に逆らえばどうなるかも、わかっていた。

「はい……」

つぶやいて、佐江はブルマを両手で引き下げ、足から抜き取った。

「やめなさいよ。先生だって本気じゃ……ええっ!？」

「なに、あれ？」

「うわあ、おフンドシよ!」

「立花さんって、変態だったの？」

取り乱した声がひとしきり飛び交い、やがて生徒たちの声は低く小さくなっていった。

「ねえ、あのお尻……」

「真っ赤に腫れて。あの筋、鞭で叩かれたのかしら？」

「太腿の紫色の筋は、縄で縛られた跡かしら？」

教鞭という単語が示すように、この時代の生徒たちにとって鞭は身近な存在だった。縄で縛られて押入れに閉じ込められた経験のある者も、少なくはない。それだけに、佐江の肌がちりばめられた刻印の意味を正しく理解した。

「これは……どういふことだ。説明しなさい」

保健室で三田島と姉小路先生にした言い訳を、この場で繰り返せという意味だった。おとな二人を相手に、なんとか言い逃れようと必死だったあのときとは違う。なにもかも知った三田島の前で、純真な級友を騙さなければならぬ。罪悪感があったし、羞恥の感情

もひとしおだった。

「この傷は……」

学校をずる休みした罰が、今まで残っているはずがない。家のお金を勝手に持ち出して遊び歩いていたら、自分を不良娘に擬するしかなかった。

禪は、前と同じ説明で通した。佐江自身、自分の嘘を半分信じかけた。学校への行き帰り、とくに下校時。門から玄関まで庭を歩いているとき、佐江の様子をうかがっている男の姿に何度も気づいている。

「ふうむ、暴漢封じか。どれどれ？」

ひゃあつと、生徒たちがまた悲鳴をあげる。

三田島が禪の横から手を入れようとしたのだ。「なるほど、これでは悪戯ができんな。ほう、結び玉を作って股に埋めているのか。二重の予防策だな」

先生は納得した。授業を始めるから列へ戻れ。ぴしゃんと佐江の尻を叩いた。そんなことには慣れっこになっている佐江は、黙って

生徒たちの列へ戻った。

それがいけなかったのかもしれない。先生にお尻を（しかも肌に直接）触られても、けろりとしていた。それがいつのまにか、触ってほしくてあんな格好をしていたのじゃないかしらというところまで尾鰭がついた。

そしてつぎの体育の授業で。佐江は体操服とブルマの両方を忘れさせられた。休み時間にそれを三田島に言うと、予想どおりの答えが返ってきた。

「禪一本で授業を受けろ」

そうして授業開始を告げる鐘が鳴って。運動場にならんだ二学級七十人の生徒たちは、私語をする者もなく、前に呼び出された佐江と三田島の遣り取りに耳を澄ませていた。

「性懲りもなく、今度は体操服まで忘れおつて」

「ごめんなさい……」

「それにしても、乳首に妙な物を嵌めているな」

「わたしは、乳首が陥没しているんです」

これは、本郷に仕込まれた言い訳だった。

「だから、常にこうやって引き出しておけば、人並みの形になるって、お医者様から言われました」

「なるほど。それにしては、人並み以上に大きいな。充血しているんじゃないか」

三田島が乳首をつまんで、くりくりとひねった。佐江にとっては日常茶飯でも、ほかの生徒たちには驚天動地の光景だった。

「はい。じんじんするくらいに固くなっています」

心の中では泣きべそをかきながら、佐江はにっこり笑った。これで、佐江は男に身体を触られて悦ぶ変態だと決まったのだった。

以来、佐江に話しかける者はいなくなつた。それどころか、佐江が近づくとキャアキャア言いながら逃げていく。席替えのときは、学級の総意でいちばん後ろにひとつだけ、ぼつんと席が置かれた。



学校も安息の場ではなくなった。肉体への虐待は、たまに体操用具の整理を口実に呼び出されて三田島に口淫を求められるのと、物陰に連れ込まれて折檻の跡を調べられるくらいだった。しかし、級友たちに誤解され蔑まれるのは、どんな拷問よりもつらかった。

休憩時間も昼食時も、佐江は図書館に逃げ込んだ。閲覧室でも好奇と蔑みの目に晒されるので、ふだんは人の来ない書庫にこもった。そうして、父に窮状を訴える手紙を書くこともあった。

手紙は書いても、投函できない。理由は三つ。だいいちに、父から手紙が来なかった。滞在先がわからなければ、どうにもならない。そして、切手代がない。佐江は一銭の小遣いも与えられなかったし、貯金箱は取り上げられていた。いずれは父から手紙が来るだろうし、ユキの財布から小銭をくすねることも不可能ではない。それでも、やはり手紙は出せない。

事実をありのままに書けば、父は取引を放り出してでもすぐに帰国してくれるだろう。おそらく、それは父の破滅につながる。父の会社が苦しいらしいとは、本郷やユキの話の端々からうかがうことができた。どうせ、この二人が会社を傾かせた原因に決まっているけれど、それはともかく。社長じきじきにアフリカまで象牙を買付に行くという山師まがいの賭けに出なければならなかったのだから、ほんとうに切羽詰っているのかもしれない。かといって、控えめに書けば、継母との確執くらいにしか受け取ってもらえない。あわてて帰国するのではなく、手紙で本郷に厳しく注意してくれるくらいの書き方。それが難しかった。あれこれ書いてみては破り捨て、これならと思うものは通学鞆の底に隠して、翌日読み返しては添削して……その繰り返しだった。

そして、事件が起きた。

梅雨の合間の晴れた日。いつものように表

門につけた車から降りて庭を横切りかけたとき。

「立花佐江さん……！」

継ぎの当たった紺緋に裾のほつれた茶色の袴、頭には白線入りの帽子。高等学校生徒の標準的な服装だった。

「これを……読んでください！」

佐江の手に封筒を押しつけて、脱兎のごとく走り去った。

首をかしげて後ろ姿を眺めているうちに、恋文を渡されたのだと思いついた。佐江はあたりをうかがった。自動車はとつくに走り去り、庭には誰もいなかった。佐江は鞆に封筒を入れて、なにごともしなかつたように玄関へ歩いた。玄関からははいらず、屋敷の横から裏口へまわる。

引き戸を開けてはいると、ぴったり閉ざしてから靴を脱ぎ、セーラー服を脱いだ。それをたたんで鞆と一緒に上がり口へ置いて、土間に正座。

「サネが、ただいま戻りました」

大声で呼ばわる。しばらくすると、ユキが正子が姿を見せて、雑用を言いつけるか、部屋で勉強するのを許すか。

しかし、今日は二人そろっていた。ユキは険悪な表情、正子は薄嗔い。

「学生から付け文されたる？ 正子が見ていたよ」

「はい、もらいました」

「どうして、すぐに言わないんだい？」

「でも、いま帰ったばかり……」

「口ごたえするんじゃない！ 手紙を出しな」

（そうか。わたしが誰かと連絡をとるのを恐れているんだ）

やましいところのない佐江は、平然と封筒を取り出した。

「読んでごらん」

ぴっちり封緘された封筒。見知らぬ青年に心の中で詫びながら、端を千切って便箋を取

り出した。

「梅雨に緑洗われる候、立花佐江様は如何にお過ごしでしょうか。このような手紙を突然差し上げます無礼をお許しください。小生、第一高等学校高等科二年生の吉田明継と申します」

正月に帰省したおりに佐江を見初めたこと。恥ずかしくも落第したので、一学期のあいだは家業を手伝いながら身の振り方を考えていること。そのお陰で、佐江の姿をしばしば目にする好機を得たこと――などが、連綿と綴られていた。

付文をされたのが自分ではなく佐江だったことへの嫉妬からか、害虫を噛みつぶしたような顔で聞いていたユキの目が光ったのは、つぎのくだりだった。

「以前はご活発だった貴女が、最近は生氣もなく、何事か鬱屈した御様子なのが、心配になりません。いささかおやつれになったようにも見受けられます。渡航された御父上を案

じておられるのでしょうか。あるいは（他家の事情に踏み込む御無礼はお赦してください）生さぬ仲の御母上との軋轢でもあるのでしょうか。もしよろしければ、心配事の一端でも御相談ください。青二才の小生ではお力になれることは限られています。誰かに悩みを打ち明けるだけでも、心が軽くなるのではないかと愚考いたします」

「余計なことを言ったら承知しないよッ！」

ヒステリックに叫んで、はっとなにごとかに思い当たった様子ユキ。

「正子さん、その鞆を調べなさい。ほかにも手紙を隠しているかもしれない」

「あっ……！」

佐江が伸ばした手を振り払って、正子が鞆をひったくった。口を開けて、逆さにした。バサバサツと教科書やノートが床に散乱する。父に宛てた手紙は、その中になかった。

佐江がホツとしたのは一瞬。正子は鞆の中に手をつっ込んで中敷を引き出した。

「あら、まあ……！」

切り取って折りたたんだノートの頁をつかみ出した。それに目を通して、ユキの形相が鬼のようになった。

「自分で読みな！」

一枚が佐江の手に突きつけられた。いっそ破り捨てようかと思つた。そうすれば、すくなくとも本郷には読まれないですむ。けれど、ユキに読まれていては同じことだ。佐江は震える手で紙を受け取つた。

「御仕事で忙しいお父様を煩わせてごめんなさい」

手紙を読む唇が震えて、発音がはつきりしなかつた。

「本郷伯父様とユキお母様に、注意のお手紙を出していただけないでしょうか。」

「お仕置きと称して、佐江は毎日のように叩かれていきます。ひどいときは、縄の束でぶたれて、何日も傷が残りました。縛られたこともあります。」

「お父様がいらっしやったときの何倍も家事を手伝わされています。何時間も薪割りをさせられたり、あの大きな浴槽にひとり水を汲まされたりしました。

「ひと言、お手紙で注意をしていただければ、伯父様もユキお母様も考えを改めてくださることでしよう。

「どうか、どうか、佐江を助けてくださいませ。かしこ」

読み終えて。佐江は手紙を胸に抱いて、わああつと泣き崩れた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……もう、しません」

ユキは、土間にうずくまっている佐江の裸身を冷ややかに見下ろしている。

「どうすればいいか、わかってるね？」

「……………？」

佐江は無言で首を横に振った。正子が佐江をまたいで土間へ下りて、裏口を開けた。土蔵へ行けという意味だ。



「あら、菊池の若奥様。もう、洗濯物を取り込まれますか？」

「ええ。久しぶりの晴れ間で、乾きが違いますわ」

ユキが顎でセーラー服を示した。佐江は、しゃくり上げながらセーラー服を着た。袖で涙を拭いて、サンダルを突っかけた。

「あら、佐江ちゃん。お久しぶり」

「こんにちは」

「どうしたの？ 目が真っ赤じゃない」

「いえね。この子、付け文をされて。それを正子さんからかわれたものだから」

「まあまあ……若い子は純でいいわね」

「それでは、失礼いたします。娘が土蔵で調べ物をしますので。なんでも、学校でご先祖様の系譜がどうか、宿題らしくて」

「ごきげんよう」

佐江も女学生らしい挨拶をして頭を下げながら。口から出まかせのユキに呆れていた。とっさにあれだけの嘘を思いつくなんて。

この場合は、こう。これをしくじつたら、ああする。事前に何通りもの台本が作られていただけなのだが、佐江にはユキが自分よりよほど賢く思えるのだった。

土蔵の中で、佐江は言われる前にセーラー服を脱いだ。禪に手をかけて、いちおうはユキをうかがう。顎をしゃくられて、禪もほどこいた。

「こんな大仰な道具、長三郎兄さんじゃなきゃ扱えないねえ」

大道具に背を向けて、ユキは作り付けの棚から二枚の板を持ってきた。大きな半円の両側に小さな半円が二つずつ。

佐江は両足を投げ出して座り、いちばん外の半円に足首を乗せた。身体を二つに折られて、内側の二つに手首。背中に馬乗りになられて、乳房が床に触れるほど深く上体を曲げられると、中央の大きな半円に首がすっぽり嵌まった。

上から同じ形の板で挟まれて、二枚の板が

留め金で密着した。

「ぐううう……」

背中と腰が軋む。息がほとんどできない。けれど、苦しさで言えば、身体に縄が掛けられていないせいか、海老責めほどではなかった。

「長三郎兄さんが帰るまで、そこで反省してな」

「ま、待って……!」

ズウンと土蔵の分厚い扉が閉じられた。

電灯は消されているので、午後三時過ぎでも暗い。

（オジサマが帰るのは五時過ぎ。ふらふら遊び歩いて七時、八時になることもある）

それまでずっと、この姿勢でいなければならぬ。そして、それからがほんとうの折檻だろう。磔くらいではすまない。三角木馬だろうか、水車だろうか、引き伸ばし梯子だろうか、それとも手加減なしの百叩きだろうか。腰振りダンスを除く責め具のひと通りを、す

でに佐江は体験させられていた。

馬鹿なことをした……黒光りする床板を間近に見つめて、佐江は心の底から後悔していた。あの手紙でも、父は慌てて帰国しただろう。もっと上手に書いて、ほんとうに手紙で注意してくれたとしても……実は、なんの役にも立たない。これまでに撮影された恥ずかしい写真。あれをばら撒くと脅されたら、手も足も出ない。お父様が不在で淋しくなつて、大仰なことを書きました。ごめんなさい。それで、真相は闇の中。それに気づいて。佐江は自分の考えのなさを思い知って涙をこぼした。

(でも、学校での評判は……?)

いずれは、帰国した父の耳にもはいる。やはり自分が悪者になつて、色情狂を演じて……お父様を嘆かせることになる。もし、お父様に愛想を尽かされたら……

(あつ……!)

佐江の背筋が凍った。最初から、それが本

郷の狙いだっただのかもしれない。佐江が勘当されれば、お嫁入りの支度も持参金も不要になつて、利行が受け取る遺産が増える。

もちろん、勘当されたらお嫁にもらつてくれる人なんかいない。保証人がいなければ、どこも雇つてくれない。ほんとうに、人知れず本郷に囲われるか、女郎にでも身をやつすしかなくなる。

(そんなのつて……そんなのつて……)

「あんまりよ。ひど過ぎるわ！」

土蔵に響き渡るほどの大声で、佐江は泣いた。どれだけ泣いても涙は枯れず、佐江の目の前に大きな水溜りが広がっていった。

——泣き疲れて。目の前の水溜りに息が起こす波紋を無感動に眺めていると。土蔵の扉が開く重々しい音が響いた。電球が点されて、目が痛くなつた。

佐江の肩に本郷のつま先がこじ入れられて身体を起こされ、仰向けにされた。

「オジサマ、ごめんなさい」

本郷は無言で片足を上げ、佐江の股間をド  
ンと踏みつけた。

「ひぎゃっ……」

パチン、パチンと留め金はずされて、佐江は枷から解放された。その場にひざまずかされると、手首を背中高くねじられて、いつもと同じ手順で縄が掛けられていった。いつもと違うのは、本郷が、そしてユキも利行も正子も無言を通してのことだった。

佐江の身体が宙に吊り上げられ、三角木馬の上へ下ろされる。佐江は抵抗を放棄して、両脚を小さく開いて木馬を受け入れた。

あと一尺半ほどのところで、鎖を手繰る本郷の手が止まった。佐江を見上げて、本郷はふっと表情を揺らした。それは憐憫の情なのだろうか。頭をひとつ振ってから、本郷は思い切り鎖を引いた。

ガララララ……佐江は木馬の背へ、下ろされるのではなく落とされた。

「うぎゃあああああーっ!!」

少女の喉から発せられたとは思えない、野太い悲鳴。

「ひいひい……い、痛い……」

斧で股間から脳天まで真つ二つにされたような激痛に、佐江の身体が木馬の上でのたうった。

本郷たちは、まだ口を開かない。佐江の足首に縄を巻きつけ、脚をくの字に折り曲げてから首に縄を巻き、反対側の脚も同じように折り曲げた。思い切り身体を反らせていなければ息ができない。

身体を縛ったよりずっと太い縄が折り曲げた膝に巻かれた。台に乗せられた鉄の錘が、その先に結ばれた。その台を本郷が蹴り飛ばした。

ガクンと錘が落ちる。

「ぎゃわあっ……んん！」

佐江の背中がさらに反りかえり、数秒の後、がくと首が前に折れた。佐江は、まだ意識を鮮明に保っていた。凄まじい激痛が、失神

さえ許してくれない。佐江の首が後ろへ反らされるのを待つて、反対側の錘の台も蹴り飛ばされた。

「がはあっ……!! ひいい……」

佐江は必死に息を整えて無理に頭を起こし、本郷の姿を探した。

「サネが悪うございました。もう二度としません。お慈悲ですから、赦してください！」

本郷に代わって利行が佐江の前に立った。

横から正子が、洗濯バサミを何十個も乗せた盆を差し出す。利行は佐江の乳房の底部をつまんで、そこに洗濯バサミを噛ませた。

（悲鳴をあげようか？）

股間の激痛に比べれば、痛みはないに等しかった。息がでなくなるのを承知で佐江はときおり頭を起こして、利行のすることを見守っていた。

利行は円周の反対側の底部にも同じように洗濯バサミを噛ませた。それから、九十度離れた両側に。あとは、乳首を中心とした点



対称の位置にびっしりと洗濯バサミを付けていく。ほどなくして佐江の片方の乳房は、大輪の花のようになつた。基底部がつまみ上げられて縁になり、その内側は陥没して、乳首の周辺がまた盛り上がっている。

もう一方の乳房にも大輪の花が咲いた。

利行が斜め前にはなれて立って、写真機をかまえた。

撮影が終わると、三つのワニグチクリップが盆に乗せられた。

「ああ……それだけは赦してください。許してくださいなら、百叩きでも水車でも、両方でもいいです。それでサネを折檻してください。ワニグチクリップだけは赦してください！」

必死の哀訴も、利行たちの耳には届かないようだった。利行はワニグチクリップをひよいと取り上げて、もう一方の手で淫核の包皮をめくった。本郷と同じように無雑作な手つきで、パチンとクリップを噛ませた。

「ぎゃはあああつ……!!」

膝を折り曲げて縛られ、錘まで吊るされてい  
て、どうすればそんな動きができるのか。佐  
江の身体が宙に浮き、どすんと木馬の上に落  
ちた。

「……あああつ！」

前編・後編に分かれた悲鳴になった。

パチン、パチンと、双つの乳首にもワニグ  
チクリップが噛みついた。それは、大輪の花  
の中央に突出した雌しべにも似ていた。

あたしにも虐めさせるとばかりに、ユキが  
交替した。無言のまま佐江のまぶたを指で引  
き下げて、そこへ絆創膏を重ねて張った。そ  
れだけで佐江はまったく目が見えなくなった  
のに、その上からさらに布で目隠しをされた。

そして、四人の足音が次第に遠ざかる。光  
を感じていたまぶたの裏が真っ暗になった。

暗闇の中に置き去りにされようとしている。  
しかも、この一分でもたえられない激痛をそ  
のままにして。

「待ってえ！」

佐江はあらんかぎりの大声で叫んだ。

土蔵の扉が開く短い音。

「お願い！ もう、赦して！ 伯父様！ お母様！ お兄様！ 正子さん！」

もう、なんの音もしなかった。叫んでいるあいだに、四人は素早く外へ出て扉を閉めたのだろう。

「ああ……あああ……くうう……痛い、痛いよう……」

佐江の半開きの口から、もう無駄な懇願は叫ばれなかった。絶望の喘ぎと、苦痛の呻吟と。そして。

「ううう……助けて、お父様。痛いよ……お父様、助けてよう……」

父を呼ぶ細い声が、いつまでも土蔵に響き続けた。

——一時間、二時間、それとも一晩も経つただろうか。土蔵の扉の開く音を、佐江は聞いた。赦してもらえるのだろうか。それとも、

もつとひどいことをされるのだろうか。それでも、暗闇の中に放置されるよりはましかもしれない。佐江の思考は混乱していた。

電球が点されて、目の裏が明るくなった。本郷らしい足音が近づいてくる。佐江の真横で止まって。

シュボツ……硫黄の臭い。マッチが擦られて。目蓋の裏で光が揺れた。

「ひいっ……!!？」

乳房に苦痛とは異なる衝撃を感じて、佐江は悲鳴をあげた。なにをされたのかわからない恐怖に怯えた。

ポタポタツ……と、乳房になにかが滴って。再び衝撃。

「熱いっ……!!？」

衝撃の正体は熱だった。

「なに……？ 厭……なにをなさってるの？ 怖い……赦して」

ポタツ……ポタツ……ポタツ……間隔を空けて、反対側の乳房に熱の塊が落とされた。

そのたびに、熱さよりも恐怖に、佐江は悲鳴をあげた。

と……熱の塊が落ちる場所が双つの乳房の谷間に移動して、のけぞった姿勢で無防備に晒している喉にまで上がってきた。蠟燭の燃える臭いが鼻をついた。

(あ……)

溶けた蠟燭を垂らされているのだと、ようやく理解した。

ポタポタ……ポタ……喉から肩に。すつとまぶたの裏が暗くなって、太腿に蠟が垂らされた。

「く……」

熱いが、焼かれるほどではない。火傷をしたかどうかまでもわからないが、正体さえ知れば怖くはなかった。

乳首からワニグチクリップがはずされた。

「ふう……」

安堵の息を漏らす佐江。実核からも激痛が去った。のは、一瞬。

「ひぎいっ……！」

もつとも敏感な器官の粘膜を熱蠟に直撃されて、佐江の身体が跳ねた。ふだんでさえ、文字通りに飛びあがるような痛さと熱さだろう。ワニグチクリップに噛まれて傷ついた今は、形容のしようもない凄まじい衝撃だった。唯一の救いは、衝撃は一瞬で、蠟が冷えて固まるにつれて苦痛が速やかに薄れてくれることだが……

ポタ、ポタ、ポタ……同じ点に間断なく垂らされては、一瞬の衝撃が無限に続く。

「うあああ……熱い、熱い。赦してください。

もう二度としません」

依然として返事はなかった。ただ熱蠟だけが実核を直撃し続ける。

「お願い、なにか言って。悪い子だと、叱ってください。黙っていると命令してください。もつと虐めてやる——それでも、いい。なにか言って！ 気が狂いそう！」

実核への熱蠟が止まって。左右の乳首に、

同時に垂らされた。

「ひいいい……やめて！ 熱い、怖い、厭だあ  
あ！」

なにも見ええず。聞こえるのは自分の悲鳴だ  
け。

百叩きを懇願しても水車責めをお願いして  
も、聞いてもらえなかった。もし、赦しても  
らえるとすれば……脳裏に閃いた交換条件を、  
佐江はぐっと喉の奥に押し込んだ。

本郷たちの目には、佐江の裸身が白い蠟に  
埋め尽くされたのが見えている。利行が何度  
かシャッターを切っているあいだに縄束をふ  
た巻き持つてきて、ひとつを利行に持たせた。  
手真似で合図して左右両側に分かれ、三角木  
馬の上で上体をのけぞらて苦痛と恐怖に気も  
狂わんばかりの佐江を囲んだ。

二人の縄束が同時に振り上げられ、本郷が  
乳房を、利行が下腹部を力いっぱい叩いた。  
ヒュンツ……風切り音を耳にして、はっと  
全身をこわばらせる佐江。

「ぶぎゃああつ、あああつ！」

身体の正面全体を鞭打たれて、佐江は吼えた。激しく身体が揺れて……ピチツと股間に鋭い痛みが走った。ついに会陰が木馬の稜線に切り裂かれたのだった。

つうーっと鮮血が太腿を流れた。利行がぎくつと手を止めたが、本郷が縄束を振りかぶるのを見て、それにならった。

ヒュンツ……バシ、バツシイン！

「あがあああつ……！」

三発、四発と鞭打たれた。佐江に言葉をつむぐ余裕も気力もない。鞭打たれるたびに絶叫し、その合間に荒い息を吐く。その繰り返しだった。

佐江の裸身から蠟がすっかり剥がれて。乳首と実核に血をにじませ、左右の太腿に細く鮮血を伝わせて。

佐江の目隠しがはずされた。まぶたから絆創膏が剥がされて、佐江はあまりのまぶしさに目をしばたたかせた。



「これが、今夜の大トリだ」

初めて口を開いて、本郷が五寸釘と金槌を佐江に見せつけた。

「これで実核を木馬に串刺しにしてやる」

ひぐつと、しゃっくりのような音を立てて息を飲み込み、カチカチと歯を鳴らす佐江。

「それでも足りなければ……」

利行が乳首をつまんで内側へ引つ張って重ね合わせ、その下へ短い角材をあてがった。

「こつちも串刺しだ」

「いやあああつ！」

喉が破れるほどの絶叫。

「もう、厭あ！ 赦してください。ほかの罰だったら、なんでも受けます。赦してくださいるのでしたら……ゆ、赦してくださいさるなら……」

言いよどんだが、これが自分に与えられた赦免嘆願の最後の機会だった。

「花嫁修業も、きちんとします。お、お、お……オマ●コの使い方も教えてください！」

本郷がちらつと苦笑したのを、佐江は気づかなかつた。極限まで追い詰めて、さんざん脅して、これから持ち出そうとしていた交換条件に先回りして答えられたからだつた。

「その言葉を忘れるなよ」

佐江の膝から錘が下ろされ、木馬から吊り下ろされて縄をほどかれた。

しかし、佐江は立てなかつた。上体を起こすのさえきつい。

「まさか、戸板に乗せて運ぶわけにもいかんしなあ」

夜とはいえ、人目につけば説明できない。

「今夜は、その隅にでも寝ている。それからな、正子。こいつの手当てをしてやれ。救急箱は、そのの棚にある」

ひぐつと、佐江が肩を震わせた。手当てに名を借りて、何度虐められたことか。

「まっとうな手当てだぞ。アルコールでなくオキシドールで消毒して、水道水で洗ってやれ。血止め軟膏を塗ってガーゼで包むのだぞ」

本郷もそこは心得ていて、事細かく指図する。

こうして、これまででもっともつらい佐江の一日は、ようやく終わったのだった。もつとつらい日がいずれ訪れるかどうかは、本郷しか知らないことだった。

## 七・処女接待

犯されることをみずから申し出てしまった佐江を、なぜか本郷は抱こうとしなかった。身体の傷が癒えかけると、甥とふたりがかりの肛虐と口虐で佐江を弄んだが、肝心の穴を未開のままに残していた。

そうこうするうちに、待ち焦がれていた父の手紙が届いた。いつもなら、佐江への気遣いから始まって、滞在先の名所やら風習をおもしろおかしく紹介して、絵葉書や写真をお枚も同封してくれるのだが、今度の手紙は実にそっけなかった。何事につけ、伯父と継母の言いつけに従い、兄とも仲良くするように。要約すれば、ただそれだけの手紙だった。

その三日後に、今度は本郷宛の電報が届いた。

T U I K A Y U U S I T A N O M U .  
T A N P O N A S I . T O U D O R I N

I S O U D A N S A R E T A S I .

象牙の値段が高騰して、資金が足りないのだと本郷が説明した。すでにこの屋敷の根抵当権まで担保にはいつているので、銀行が貸し渋っているのだという。

「俺は明日の朝に経理担当専務（つまり、ユキのことだ）と銀行へ掛け合いに行くが……難しいな。社長の個人的信用だけが頼みの綱だ」

女学校では経済の仕組みなんか教えてくれないけれど、だいたいのところは佐江にもわかる。追加融資を受けられなければ、取引が破談になって大損害をこうむる。そうなると、これまでの融資分も返済できなくなつて、会社は倒産する。この屋敷も人手にわたるのだ。（あんなヤクザまがいの伯父さんと家計簿さえつけられないユキさんとで、まともに銀行と交渉できるんだらうか？）

不安な気持ちをかかえたまま登校して、居心地の悪い一日を過ごして戻ってみると、本

郷もユキもにこにこ笑っていた。

「いやあ、俺たちは担保になるものをひとつ、見落としていたよ。交渉成立だ」

「よかったですね」

佐江は心の底から喜んだのだが。

「おいおい、他人事みたいなことを言ってくれちゃ困るぜ」

「え……？ お屋敷が人手に渡ったら、住むところもなくなるのですから、わたしだって当事者ですよ？」

「いや、そういう意味じゃなくてね。担保と  
いうのは、サネのことなんだよ」

「え……わたし？」

「あそこの頭取、昨年の年賀の挨拶のときから、おまえに惚れていたんだとさ。俺の言葉の意味は、わかるだろう？」

佐江の顔が蒼白になった。わかるもなにも

……

「厭です！」

●五歳の処女としては、当然の反応だった。

「お父さんの会社がつぶれてもいいのか？  
助けられるのは、おまえだけなんだぞ」

「でも……でも……」

「マ●コの使い方を教えてくれってねだった  
のは誰だ？ 俺でなく、頭取に教えてもらっ  
ちゃ、不都合があるのか？」

硬軟両面からの攻撃だった。頭取に処女を  
差し出さないと父の会社がつぶれる。処女を  
奪ってくれと（心ならずも）本郷に懇願した  
のは佐江だった。

「わかりました……オジサマのおっしゃると  
おりにいたします」

佐江は、ちいさくつぶやいた。どうせ、本  
郷はまともな交渉もしないで、わたしを人身  
御供に差し出したのだろうけれど。それで父  
を窮地から救えるのなら、けっして後悔しな  
い。本郷なんかに奪われるよりは、何億倍も  
意義がある。佐江は、そう考えて自分を納得  
させた。

「なにも、頭取に囲われると言ってるんじゃない

ない。お酒の席に侍って、朝までつき合つてやれば、それでいいんだ」

いっそ、妾にされたほうがましかもしれないと、佐江は思った。そうすれば、土蔵で拷問にかけられずにすむ。

でも、やっぱり。父が無事に帰って来て、なにもなかったかのように皆が口を閉ざして。自分も過去のこととは忘れて、偽りの幸福を取り戻して——最新の医術で処女膜も甦らせることができる。聞いた記憶がある。もしかすると、お嫁に行く望みは捨てずにすむのかもしれない。

その週の土曜日。三田島への緊縛法伝授は実施されたが、拷問道具の試用は取りやめになつて。夕方ひととき、佐江は本郷から接待の心得を教え込まれた。

そして夜になつてから。佐江は通学のとて同じ服装——三点のオーリングと結び玉禪とセーラー服上下だけで、本郷に伴なわれて



裏口から料亭の門をくぐった。

「科白は覚えてるな？」

佐江は、むっつりとうなずいた。

「あとは、学校と同じに振る舞えばいいんだからな。まあ、オーリングについてちゃあ、三田島先生のご高説に従っとけ」

意味を理解して、佐江はもう一度、硬い表情でうなずいた。

場違いな女学生に向けられる好奇の視線を感じながら、佐江は本郷の背中を追って離れ座敷に着いた。

「おお、これはこれは。立花国際通商の社長令嬢にご招待賜り、光栄の行ったり来たりじやわい。先に始めておるぞ」

侮辱されていると感じながら、佐江は廊下に正座して三つ指をついた。

「久保田様、今日は小娘のお招きに応じていただき、ありがとうございます。誠心誠意、おもてなしさせていただきます」

本郷に教えられた科白を、できるだけ情感

を込めて口にした。この男の機嫌を損ねると父の破滅につながるという危機感があつた。

「堅苦しい挨拶は、女学生には似合わない。ここへ来なさい」

佐江は座敷にあがつて端に座り、さらに手招きされて本郷にならぼうとしたところを軽く尻を叩かれて、頭取の横に居流れている芸妓ふたりの反対側へ座つた。

「まずは一献差し上げろ。すみませんね、お嬢様育ちなもんで。碎けた場の礼儀をわきまえておりません」

お大尽に芸妓と女郎（佐江）。本郷の役どころは幫間といったところか。

佐江は、膳の徳利を手にして、膝で頭取ににじり寄つた。

「どうぞ……」

手が震えていた。頭取が差し出した盃に酒を注ごうとすると、徳利が触れてカチカチ鳴つた。

「あ………！」

酒がこぼれて、頭取のズボンを濡らした。

「馬鹿！」

本郷が怒鳴った。

「不調法にも程がある」

「ごめんなさい！」

佐江がおしぼりで拭こうとした、その手を頭取がつかんだ。

「なに、安物の服だ。気にすることはない」

佐江は日頃、父の洋服と学校の先生の洋服とを見比べて目が肥えている。舶来の生地を一流の洋服店で仕立てたものだからいはわかる。

「お酌に慣れていないのなら、こぼさないですむ酒の注ぎ方を教えてあげよう」

頭取に腕をつかんで引き寄せられても、申し訳なさで抗えなかった。

「まずは、自分の口に酒を含みなさい」

「あの……わたし、お酒は」

「自分で飲むんじゃない。いいから、頭取のお指図に従え」

本郷が立って徳利を佐江の手から奪い、口に押し当てた。口いっぱい酒が注がれる。

「頭取に向かい合つて、接吻しろ」

(……………!)

だいたい、わかつてきた。そんなはしたない真似が、できるはずもない——というのは、良家の子女の考えだ。口中に勃起した魔羅を啣えさせられて、射精されたものを飲まされた娘なら、どうということもない。と割り切つて、佐江は頭取に抱きついて唇を合わせた。半開きにして、口移しで酒を押し出した。

頭取は喜んで酒を飲み干したが。幾分か佐江も呑んでしまった。

「もう一献、願おうか？」

佐江はやけくそ。自分から徳利を喇叭飲みして、頭取に唇を押しつけた。今度は頭取も心得たもので、片手で佐江を抱きながら、片手で尻を撫でる。

(……………)

ぞわつと……佐江の背中に怪しい感覚が走

った。迂闊に飲み込んだ酒の酔いがまわってきたのかもしれない。頭取の機嫌をとることは父の助けになるという免罪符が、佐江の道徳観念を解き放っていたのかもしれない。ともかく。男に尻を撫でられて嫌悪感が薄かったのは事実だった。

気がつくと。佐江は大股を開いて頭取の腰に座り、相互に唇を——どころか、舌をむさぼり合っていた。

不意に、頭取が佐江を突き放した。

(……………?)

頭取が、セーラー服の襟を引き下げた。

「これは……縄の跡なのか？」

昨夜、佐江は短時間だが海老責めに掛けられていた。手首の縄跡は自分で揉んで消していたのだが、首までは気が回らなかった。別に、縄跡を消せと命じられていたわけではないし。

「……………」

佐江はうつむいて、本郷の助け舟を待った。

「こいつ、生娘の癖に縄が好きでしてね」  
本郷の助け舟は、佐江を溺れさせようとしていた。

「わざと悪戯をしては、折檻されたがるんで、俺も持て余しています」

「ほう……？」

「論より証拠ってやつで——サネ、禰を御披露しろ」

説明されなくても、だいたいの筋書きは読めていた。佐江は黙って立ち上がり、セーラー服を脱ぎ捨てた。

「あら、まあ……」

「へええ……？」

場数を踏んだ芸者のふたり。女学生みたいに黄色い悲鳴はあげなかった。そのかわり。どこまでが真実で、どこからが脚本かを見定めようとしている。

佐江の裸身には、くつきりと縄跡が刻まれている。注意深く見れば、腫れの引いた乳房にも尻にも、薄く鞭跡が残っていた。

「ふうむ……」

頭取が唸った。好色の響きが、そこにはない。

「こんな年端もいかない小娘を、縛ったり叩いたり。本郷クン、悪ふざけが過ぎるんじゃないかね？」

頭取は、まともな神経の持ち主のようだった。

「いえいえ。サネにとっては、鞭が飴でしてね」

蛙の面に小便の格言を絵にすれば、こんな感じになるのだろう。本郷には悪びれたふうもない。

「まずは、これをご覧ください」

頭取の前に突っ立ったままの佐江から禪を剥ぎ取ると、片足を持ち上げて無毛の股間を頭取の前に開陳させた。

「んむ……？　なんだ、濡れておるのか？」  
頭取の口調が微妙に変わった。

「男に見られるだけで濡らす、好色女ですが

ね……」

(違う……！ ただ、わたしは……)

内心の反論が、そこで途切れてしまった。お酒に寄ったら濡らしてしまふなんて、そんなことがあるはずもないとは、本能的にわかってしまう。せめてもの救いは……濡れているといつても、ごくかすかなだけだ。結び玉に刺激されれば、誰だつてすこしは妙な気分になつてしまふ(よね?)。

佐江の葛藤にはおかまいなく、本郷が縄を取り出した。

「厭あ……」

佐江は戦慄した。縄で縛られるとどうなるか、十分に思い知らされている。

「厭じゃねえんだよ。いつもどおりにしろと、言つてあるだろ」

もう、どうにでもなれ。初めて飲んだ酒の酔いにまかせて、佐江は両手を後ろに組んだ。どうなろうと、オジサマが取り繕ってくれる。手首を重ねて縛られ、ぐいと引き上げられ



る。

(ああ……ん)

それだけで腰の奥が熱くなるところまで、佐江は馴致されていた。

胸乳の上下を絞られると、もういけない。熱いしたたりが溢れるのを、はつきりと自覚した。

「まあ、いやなこと……」

「縛られ好きって、話にはきいたことがあるけど。まさか、こんなお嬢様がねえ？」

太腿を熱い滴りが伝い落ちていった。首縄を掛けられて乳房を内外から絞られると、腰が砕けてしまう。

「ああ……あん。サネは縄好きの淫乱娘ですう……」

前もって教え込まれていた科白だが、いざ口にしてみると——微妙に実感を伴っていた。

「ふうむう……幻滅したな」

ぎくつと、佐江と本郷の表情が同時にこわ

ばった。

「深窓の年端も行かぬ令嬢と違って焦がれておったのに、これほどの淫乱娘だったとはなあ」

「あ……しかしですね。縄好きの生娘というのも……」

「それはそれで、愉しみようがあるな」  
にやりと頭取が嗤った。

「は、はい……恐れ入ります」

家を何十軒も買えるほどの金を扱いつけている男に、歳がひと回りは違おうかという本郷が太刀打ちできるはずもなかった。

「ところで……なにやら、奇妙な飾りを付けておるな？」

わかったうえで若造に花を持たせようと思つたのか、ほんとうに興味を持ったのか。

「久保田様は、さすがにお目が高い。サネ、おまえから説明して差し上げなさい」

話を振られて。ここが正念場とばかりに、佐江は頭取の前で膝立ちになった。どうしよ

うかと、ちよつと迷つて。今さら深窓の令嬢を気取つてもはじまらないと、開脚した。

「乳首とか淫核は、大きいほうが男の人は喜ぶそうですし、女としても感じやすいそうです。そういう身体になろうと思つて、できるだけ根元からくびり出すようにしています」

とは言つても。佐江の三点は、成長の兆しがない。三田島は、寝るときに装着させると言つていた。身体は寝るときに成長するというから、理にかなつている。ところが佐江は、寝ているあいだはオーリングをはずされて、昼間に装着されていた。

「まあ……程度にもよるがな」

頭取がきな臭い顔で言葉を濁した。この人は、オーリングで成長を促進させる前のカナちゃんを喜ぶのではないか。佐江の直感が告げていた。けれど、頭取に差し出す担保は、今の佐江の肉体しかない。

「あの……もし、お厭なのでしたら、すぐにオーリングをはずします」

「それよりも。儂は、女を縛って虐める趣味は持ち合わせておらん。本郷クン、ほどいやれ」

「あ、はい……今すぐ」

縛る手際も鮮やかだが、ほどくのもあつという間だった。

それでも、頭取の機嫌は芳しくない。このままでは——恥を忍んで、処女さえ差し出そうとしている努力が無駄になってしまう。佐江は、なんとか場を取り繕おうと必死に考えた。

「あのう……サネは、●三の歳まで踊りを習っていました」

たどりついた結論が、それだった。およそ他人にお披露目できる芸ではないけれど、素っ裸なら話が違うのではないか。

「ふむ……？」

「よろしければ、お目を汚させていただきますいと存じます」

皇国の興廃、コノ一戦ニアリ——必死の思

いで頭を下げた。

「いいだろう。やってみなさい」

「ありがとうございます！」

佐江は立ち上がって後ろに下がり、両手を軽く開いた。

「あの……お姐さん、とお呼びすればいいんでしょうか。『菊づくし』をお願いできますか？」

「は……？」

年上格の芸妓が、ぽかんと口を開けた。その音曲を知らないのではない。五つか六つの子供が踊る曲を指定されて、呆れただけだった。

佐江にしてみれば。これで踊りをしくじつたら、後がない。絶対に間違えようのない踊り。それに……この歳で子供じみた踊りというのは、あんがい頭取の眼鏡にかなうのではないかという、奇妙な確信があった。現代風にいえば、頭取のロリコン趣味を少女特有の嗅覚で察知したというところか。

「それじゃ、まあ……」

三味線の調子を合わせて。ふたりの芸妓が『菊づくし』を奏で始めた。

サクラ、サクラ……の音程から始まる単純な音程に乗せて、佐江の裸身が舞い始めた。『舞』というには、あまりに単純な動きだった。左右に広げた両手をひねり、軽く足を踏み出して、イナイイナイバアそっくりの所作から、トンと足を踏む。幼稚園のお遊戯もかくやという踊りだった。

踊りながら、佐江は頭取を盗み見た。

(やった……！)

頭取は、佐江の踊りを食い入るように見つめていた。どうかすると、その視線は無毛の股間にとどまっているけれど。

自分の肉体が、芸が、男を虜にするという。

それは、佐江がまったく知らなかった快感だった。肉体的なものではない。●五歳の小娘が、五十ちかい男を翻弄するという、日常ではありえない精神の愉悦だった。

しかし、佐江が得意の絶頂にあったのは、その一瞬だけだった。

「お粗末様でして」

踊り終えて畳に座り、深々とお辞儀した。

「たいした度胸じゃの。しかしおまえ、ほんまに生娘か？」

「ええ、それはもう……」

「儂は本人に聞いておる」

「はい、生娘です。男の人どころか、張形も挿れたことはありません！」

きっぱりと言ってから、佐江は顔を赤くした。頭がくらくらしていた。お酒のせいだろうか。それとも、父を援けようという必死の思いだろうか。

「では、処女膜は綺麗なのじゃな？」

「……自分で見たことは、ありません」

それもそうだと、頭取が豪快に嗤った。

「では、儂が調べてやろう」

頭取は、佐江に仰臥するように言った。

「足を上げて、膝を手で抱えろ。肩に引きつ

けて、脚を開け」

佐江は、天井に向かって秘部を開陳する姿勢をとった。顔が真っ赤なのは、頭に血が下がったせいだけではないし、膝が震えているのは無理な姿勢で筋肉が痙攣しているのではない。

「どうれ……」

中腰になって、頭取が佐江の股間を覗きこんだ。

「小さな膣口だが……」

小淫唇の内側へ指を二本挿れて、膣口を左右に押し広げた。半月形の薄桃色の膜が、穴を塞いでいた。

「医学書で見たとおりだな」

頭取は箸をつかんで、先端を膣に挿入した。つんつんと、膜をつついた。

「ひゃ……」

くすぐったさと恥ずかしさで、佐江は小さな悲鳴を漏らした。

「おまえたちも、後学のために見ておけ」



けしかけられて、ふたりの芸妓も興味津々、  
代わり番こに佐江の股間を覗いた。

「へええ。たしかに膜だわ」

「おいらも、ン年前までは、こうだったのか」  
手鏡で自分の性器を観察する女はたまに  
いるが、処女膜までは覗き込む女はいない。頭  
取がしたように膣口を開けて明かりで照らさ  
なければ見えない。

「まったく、たいした生娘だ」

頭取が、わざとらしく首を横に振った。

「こんな真似をさせようとしたら、相手がケ  
コロでも叩き出されるわい」

蹴飛ばして抱くという意味の最下級の娼婦。  
佐江にそんな知識はないが、自分が手ひどく  
侮辱されたことはわかった。

「色々と仕込んだようだな？」

本郷が頭を搔きながら、ぺこぺこ恐縮の  
意を示した。

「まあ、たまにはこういう娘も面白いかな。  
木偶人形や泣き人形には食傷しておる」

それから酒宴が再開されたが、頭取は後々のことを考えて酒食を控えたので、早々にお開きとなった。芸妓も引き上げ、膳も片付けられ。

「では、あとはご存分に」

本郷も姿を消して。座敷に残ったのは、ワイシャツの前をはだけた頭取と、酔いも手伝って、必死のご機嫌取りで裸身を絡めている佐江のふたりきり。

「ふう……」

水差しから注いだ氷水をひと口飲んで、頭取が隣の部屋との仕切りになっている襖を引き開けた。

ドキン。佐江の心臓が調子はずれに脈打った。

襖の向こうには、豪華絢爛な夜具が二組。絹羽二重だろうが、筵だろうが。そこで佐江の純潔が散らされることに変わりはない。肛門を貫かれながら実核をくじられて喜悅の声をあげ、頬をすぼめて魔羅を吸う娘に、純潔

もあつたものではないのだが。

「では、やってみてもらおうかな？」

頭取は下着まで脱ぎ捨てると、掛け布団をめぐってゴロンと仰向けになった。

佐江は頭取の腰から払い落とされたまま、裸身を縮こませて途方に暮れている。

「なにをどこに突っ込むか、おまえが知らぬわけもなからう。それをしろと言つておるのだ」

(……………)

予想とは、まるで違つていた。組み敷かれて、股を開かされて、有無を言わせず貫かれる——のではなく。それをすべて、佐江がしなければならぬ。

それはもちろん……椅子にネジ込まれた木の棒で毎日やらされていたことを、ほんのちよつと前にずらせるだけのことだ。

でも、それは。女にとつては生涯一度の神聖な儀式だ。たとえ不本意に犯されるのだとしても。色欲にまみれ金銭にまみれていても、

それでも……女は、男によつてオンナにされるべきではないのか。女がみずから辱めるなんて。佐江は涙ぐんでいた。あまりに惨めだった。

けれど、頭取の言うとおりにしなければならぬ。気を奮い立たせて、佐江は夜具の裾へ膝行して三つ指をついた。幼い頃から仕込まれた礼儀作法が、この期に及んでも自然と出てくる。

「では……失礼いたします」

佐江は男の腰に顔を近づけて、まだでろんと転がっている肉茎を横啜えにした。チュパチュパと音を立てて先端へ舐めていき、雁首にチロチロと舌を這わせた。左手はゆつくりと玉袋を揉んでいる。

鈴口を舌先で刺激して。グボツと根元まで丸呑みにした。肉茎の反応は乏しい。ならばと——佐江は頬をすぼめて肉茎を吸い込みながら、唇を閉じる力はゆるめて顔を引き上げていった。

ヂュズズーツという大きな音が座敷に響いた。唇の振動に刺激されて、肉茎がすこしずつ太く硬くなつていく。佐江は本郷と利行に仕込まれた技巧を総動員して、男を刺激した。五分も刺激を続けると、ふたりみたいにかチコチではないが、じゆうぶんな硬さになつたと佐江は判断した。

佐江は後ろ向きに頭取をまたいだ。椅子に腰掛ける感覚だつたし、男の顔を見たくもなかった。

肛門棒付きの椅子に座るときよりも腰を引いて。花弁にあてがった左手の指をV字形に広げて。後ろにまわした右手で怒張の付根を軽く握つて。こと思われる位置へ、佐江は腰を落としていった。

落としながら、怒張を小さく動かして肉壁を探つた。つるつと……凹凸が嵌まり合う感触があつた。腰をすこし沈めると、引き攣れるような痛みが走つた。肛門を初めて貫かれたときと似た痛みだつた。

もうすこしだけ沈めようとしても、膝がいうことをきいてくれない。

(大丈夫……ワニグチクリップや縄鞭に比べたら、蚊に刺されるようなものよ)

自分を励ましてから。佐江は逆に膝をすこし伸ばした。そして。

「うん……！」

一気に腰を落とした。

(ぐううっ……)

ビチビチッと、続けざまに股間が裂かれたような、尖烈な痛み。顔をうつむけて結合部を覗くと、どす黒い肉棒に貫かれた無毛の秘裂が、薄赤く染まっていた。

(とうとう……)

処女を失ってしまった。それは悲哀であると同時に、一人前のオンナになったという感慨でもあり、今の自分にふさわしいところまで堕ちたという自嘲でもあった。

「感激しているのはわかるが、ちっとは動け」  
ピシッと太腿を叩かれて、佐江は我に還つ

た。どうすればいいか、悲しいことに佐江は肛門で教えられていた。右手でオーリングにくびられた実核をまさぐり、左手で乳房を揉みながら、膝の屈伸運動を始めた。

「んああっ……」

貫かれ引き裂かれたばかりの激痛が、抽挿で倍加する。自分で自分を慰める快感が、そこに重なる。佐江にとつて、嬉合いとは苦痛と快感のせめぎ合いだった。そういうふうに住込まれてきた。

きゅにつ、きゅにつ……と、粘膜同士がすれ合い引つ張られていたが、じきに。

ずぶ、ずぶ、ずぶ……ぬかるんだ音が、結合部から漏れ始めた。鮮血がこぼれて、男の淫毛に吸い込まれていく。

「うん、うん、うん……」

腰の動きに呼応して、呻きが鼻から漏れた。

じゅぶう、じゅぶ、じゅぶっ……音が大きくなる。微妙な緩急が生じたのは、佐江の意思なのか。

「あつ、あつ、あん……」

激痛はその場にわだかまり、快感は徐々に増していく。

「あ……」

佐江の中で、ぐぬつと怒張が角度を変えた。背中に男の胸板がかぶさって、両の乳房を強い力で揉まれた。

「ふあああ……ん」

初夜の花嫁なら苦悶の悲鳴をあげただろう乱暴な愛撫を、佐江は強い快感として受け容れた。佐江は乳房を男にまかせて、両手で実核をこねくった。

「あああん……あん、あん、あん」

苦痛を快感に追いつかせようとでもいうかのように、佐江は激しく腰を上下させた。いつか男は乳房を握ったまま手の動きを止めていたが、かえって乳房は激しく揺れた。

「ちよつと待て……」

強く言われると同時に、乳房を握りつぶされた。その新たな苦痛で、佐江の動きが止ま



った。

「そのまま、こつちを向け」

佐江は右脚を折って腹に引きつけ、身体を右へひねった。

「あひい……！」

なまめかしい苦悶の声が佐江の口から漏れた。貫かれたばかりの穴をぐるっとこねくられれば痛いのは当然だが、それだけではなさそうだった。

佐江は男に向き合い、そのまま抱きついた。

「そら……」

ずんずんと、男が腰を突き上げてきた。

「ああっ……あん」

佐江は男の腰と反対に動いて、膣口から深部まで亀頭を往復させた。

すべて、肛淫で仕込まれた性技だった。違うのは穴の位置と……膣の奥底まで拡張される感覚だけだった。肛門は、その入口だけに感覚が集まっている。

佐江は左手で男にしがみついて胸板に乳房

を密着させていた。腰を上下に揺すれば、乳房も同時に刺激される。そして右手は、いまや血まみれになった股間へ。

「あん、あん、あん、あん……」

しだいに高みへ登りながら、この体位は不自由だと感じていた。腰を左右に揺すったり円くこねくったりが、うまくできない。縛られてあお向けに転がされて脚を持ち上げられて、男の好き勝手に嬲られるのがなにも自分で考えなくてもいいから楽だ。そうでなければ犬のようにつながって、自由奔放に尻を振るのがいい（男が乳房と実核をかまってくれなければ厭だけど）。

いみじくも頭取が言ったように、未通で膜を残しているというだけで、佐江はとつくに淫らな娘に作り変えられていたのだった。生まれて初めて飲まされた酒と、父のための献身という口実とが——佐江の深部に蓄積されてきた調教の成果を解き放ったのだった。

日曜日の朝。本郷は上機嫌で佐江を迎えに来た。

「よくやったぞ。社長が帰国するまでは元本支払を猶予してもらえた」

期末試験が終わったら、遊びに連れて行ってやろうと言った。が、飴だけでなく鞭も用意していた。

「これからも、ときどきは頭取の接待が必要だ。貸家だって、契約更新というものがある」  
どうせ、そんなことだろうとは、佐江も疑っていた。

「けどな。処女を差し出せるのは一回こっきりだ」

つぎは踊りだけでなく、もつと見ごたえのある芸を披露しなければならぬと言われて、佐江は頭をかしげた。頭取は、女を縛って虐めるのは趣味ではないと言った。とすると……  
：機械仕掛の腰振りダンスでも披露させられるのだろうか。

そこで佐江は考えるのをやめた。そのとき

になれば、わかることだった。

その夜。すでに未通女でなくなった佐江を、当然のように利行が抱いた。基本を教えてやると言って、正常位で。佐江が淫核に触れるよりも先に、二回突き挿れただけで利行は果ててしまった。口とは気持ちの良さが段違いらしい。

後を受けた本郷は、いつものように佐江を座禪転がしにかけた。そこがよほど気に入っているのか、やはりケツマ●コに挿れて、仕上げはゴムサックをはずして口の中だった。それ以来、佐江の女陰は利行専用になった感があった。朝の口淫レッスンは、そのまま正常位の変形研究に流れることも珍しくなくなった。